

必若此。吾將二
伏劍而死。故
不三敢入於鄒。
鄒魯之臣。生
則不得事養。
死則不得飯
含。然且欲行二
天子之禮於
鄒魯之臣。不
果。納。今秦萬
乘之國。梁亦
萬乘之國。俱
據二萬乘之國。
交有二稱王之
名。暗二其一。戰
而勝。欲二從而
帝之。是使三
晉之大臣。不
如二鄒魯之僕
妾也。且秦無

爲めに患を排き、難を釋き、紛亂を解いて、取る所なきにあり。卽し取る所あら
ば、是れ商賈の人也。仲連爲すに忍びず」と。遂に平原君を辭して去り、終身復
た見えざりき。

● 勿論出来る。其位は何てもなし ● 乾肉 ● 姜里也。庫は物置ぐら ● 秦を帝と稱して也、王は附
帯の言と見るべし。但、正解には「帝」の字を衍とし、「昔者村既二諸侯ヲ開臨ニス、今秦天子ト爲ラバ亦梁王ヲ烹
醢スルヲ得ン、何スレゾ秦ト俱ニ王ト稱シ、終ニ臨ノ地ニ就カンヤ」 ● 牛羊豕を備へたる性を一牢といふ、
又之を太牢といふ、十太牢は其十倍にて、蓋し當時諸侯を待遇する禮なりしならん ● 諸侯の國を巡幸するをい
ふ ● 正殿也。天子諸侯に適(ユ)くや、必ず祖廟に舍する也 ● 筮は鎗也。筮は鉞やかぎ也。宮殿を去り城
内府庫の錠やかぎを天下に差出すは以て其國を有たざるを示す也 ● 枉は得也、矯は持也、几はより掛る具
● 堂下に下りて自ら吟味す ● 退出して政事を取る ● 關門を閉ぢて遂に齊王を納れざりき。其禮を
● 主人形を受くるの位。之を南方に置て北向に設く ● 齊を帝として事ふるを恥辱として之を背ぜざる也
● 老に事へ功を養ふ ● 珠玉を死者の口に納る、禮也。生きて云々より玆玆は、鄒魯國小にして貧、生死
共に其禮を備ふる能はざるをいふ ● 齊が也 ● 乘の ● 鮑く事無くして ● 大いに更迭せん ●
● 乘が認めて愚とする者を諷し ● 諷は儂に通ず、賤也 ● 内部より亂すの策としてならん ● 安穩なる
を得ず ● 凡人。普通の人 ● 偉大なる人物 ● 舊陰に止まりたる將軍晉鄙を殺し、其率わし大軍を奪

已而帝。則且
變二易諸侯之

大臣。彼將奪二
其所謂不肖。而予其所謂賢。奪其所憎。而與其所愛。彼又將使其子女譏妾。爲諸侯妃姬。
處中梁之宮。梁王安得晏然而已乎。而將軍又何以得龍乎。於是辛垣衍起再拜謝曰。始
以二先生爲二庸人。吾乃今日而知三先生爲二天下之士也。吾請去。不三敢復言レ帝秦。秦將聞之爲
却軍五十里。適會魏公子無忌奪晉鄙軍。以救趙。擊秦。秦軍引而去。於是平原君欲封二魯
仲連。魯仲連辭讓者三。終不肯受。平原君乃置酒酒酣。起前以二千金爲二魯連壽。魯連笑曰。
所貴於天下之士者。爲人排患釋難。解紛亂。而無所取也。卽有所取者。是商賈之人也。仲
連不忍爲也。遂辭平原君而去。終身不復見。

ひて趙を救ひ秦軍を驅ちたる也 ● 酒宴を張りて魯仲連を饗應す ● 前(サカヅキ)に酒を盛り樽者に進め
て爵を賀する也

秦攻趙。平原
君使人請救
於魏。信陵君
發兵。至鄒
城下。秦兵罷。
虞卿爲平原
君請益地。謂
趙王曰。夫不

秦、趙を攻む。平原君、人をして救を魏に請はしむ。信陵君兵を發して、邯
鄲の城下に至る。秦兵罷む。虞卿、平原君の爲めに地を益さんを請ひ、趙王に謂
つて曰く、「夫れ一卒を鬪はしめず、一戟をも頼らずして、二國の患を解くもの
は、平原君の力也。人の力を用ひて、而も人の功を忘るゝは不可なり。」趙王曰
く、「善し」と。將に之に地を益さんとす。公孫龍之を聞いて、平原君に見えて曰

國一卒。不煩二
一戰。而解三
國患。者。平原
君之力也。用
人之力。而忘
人之功。不可。
趙王曰。善。將
益之地。公孫
龍聞之。見平
原君曰。君無
覆軍殺將之
功。而封以東
武城。趙國豪
傑之士。多在
君之右。而君
爲相國者。以
親戚受封。而
國人計功也。爲君計者。不如勿受。平原君曰。謹受令。乃不受封。

秦攻魏取寧

く、「君、軍を覆へし將を殺すの功なくして、封するに東武城を以てせらる。趙國の豪傑の士多く君の右に在りて、而も君相國たるものは、親を以ての故なり。夫れ君封せらるゝに東武城を以てして、無功を讓らず、趙國の相印を佩びて無能を辭せず、一たび國患を解いて地を益すを求めんと欲せば、是れ親戚もて封を受けて、國人もて功を計る也。君の爲めに計るに、受くる勿きの便なるに如かず。」平原君曰く、「謹んで令を受く」と。乃ち封を受けず。

- 封地を増し賜ふことを
- 「二」の字衍か。或は趙魏を指していふか
- 教を魏に請へるの力
- 上
- 魏威
- 功能無きを以て之を辭讓せず
- 鈴木注曰く「昔ハ魏威ヲ以テ封ヲ受ケ、今ハ國人ニ比シテ功ヲ計ル」と。正解には「魏威ハ功ヲ計ラズシテ封ヲ受ケ、國人ハ功ヲ計トシ實ヲ受ク、魏威法ヲ異ニスルハ不可」といひたれど、寧ろ鈴木説を可とすべきが如し

秦、魏を攻めて寧邑を取る。諸侯皆賀す。趙王の使往いて賀し、三反すれども

邑。諸侯皆賀。趙王使往賀。三反不得通。趙王憂之。謂左右曰。以秦之強。得寧邑。以制齊趙。諸侯皆賀。吾往賀而獨不得通。此必加兵。我爲之奈何。左右曰。使者三往不得通者。必所使者非其人也。曰。諒毅者。辯士也。大王可試使之。諒毅親受命而往。至秦獻書秦王。

通するを得ず。趙王之を憂へて、左右に謂つて曰く、「秦の強を以て寧邑を得て、以て齊・趙を制す。諸侯皆賀す。吾往いて賀すれども、獨り通するを得ず。此れ必ず兵を我に加へん。之を爲す奈何。」左右曰く、「使者三たび往いて通するを得ざる者は、必ず使する所の者、其人に非ざればなり。諒毅と曰ふ者あり、辯士也。大王試みに之を使はす可し」と。諒毅親りに命を受けて往く。秦に至り、書を秦王に獻じて曰く、「大王、地を寧邑に廣め、諸侯皆賀す。敝邑の寡君亦竊かに之を嘉して、敢て寧居せず、下臣をして其幣物を奉じ、三たび王廷に至らしめしも、使通するを得ず。使若し罪なくんば、願はくは大王其權を絶つ無かれ。若し使罪あらば、願はくは之を請ふを得ん」と。秦王使者をして報せしめて曰く、「吾れ趙國を使ふ所の者、小大皆吾言を聽かば則ち書幣を受けん。若し吾言に従はずんば則ち使者歸れ。」諒毅對へて曰く、「下臣の來る、固より大國の意を承けんを願ふ。豈に敢て難る有らんや。大王若し以て之に令する有らば、請ふ奉けて

曰。大王廣地。寧邑。諸侯皆賀。敝邑寡君亦竊嘉之。不敢寧居。使三下臣奉其幣物。三至王廷。而使得通。使若無罪。願大王無絕其權。若使有罪。願得請之。秦王使使者報曰。吾所使趙國者。小大皆聽。吾言。則受書幣。若不從。吾言。則使者歸矣。諒殺對曰。下臣之來。固

之を行はん。敢て疑ふ所なかれ」と。是に於てか秦王乃ち使者を見て曰く、「趙約・平原君數々寡人を欺弄す。趙能く此二人を殺さば則ち可なり。若し殺す能はずんば、請ふ今諸侯を率ゐて、命を邯鄲の城下に受けん。」諒殺曰く、「趙約・平原君は、親しく寡君の母弟也。猶ほ大王の葉陽・涇陽君あるがごとし。大王、孝を以て治めて天下に聞ゆ。衣服の體に便なる、膳啗の口に味へる、未だ嘗て葉陽・涇陽君に分たすんばあらず、葉陽・涇陽君の車馬衣服にして、大王の服御に非ざるはなしと。臣之れを聞く、巢を覆へし卵を毀る有れば鳳凰翔らず、胎を刺き天を焚けば麒麟至らずと。今使臣、大王の令を受けて、以て還り報せば、敝邑の君畏懼して、敢て行はずんばあらざるも、乃ち葉陽君・涇陽君の心を傷る無からんや。」秦王曰く、「諾。政に従はしむる勿れ。」諒殺曰く、「敝邑の君、母弟ありて、教誨する能はず。以て大國に惡まる。請ふ之を黜け、政事に與らしむる勿くして、以て大國に稱へん」と。秦王乃ち喜び、其幣を受けて厚く之を遇せり。

○ 其旨を通ずるを得ずして歸る ○ 正解には「曰」は「有」の誤といへり ○ 勸めて賢使を殺すと也 ○ 覆來の上しみ ○ 罪狀を請ふ。即ち一々其罪狀を伺ひたしと也 ○ 使役する ○ 一職して勝敗を決せん ○ 天下を也 ○ 明は食也 ○ 來り潮らず ○ 未だ生ぜざる者を胎といひ、方に生ずる者を天と曰ふ。潮らず至らざる者は其類を傷るを恐み且つ其己に及ばんを恐る、也 ○ 然らば誅するに従はず、只趙約平原君の二人に國政に従事せしめずして之を罷めよ ○ 貴國の意に稱へん

願水大國之意也。豈敢有難。大王若有以令之。請奉而行之。無所政疑。於是秦王乃見使者曰。趙約平原君數欺弄寡人。趙能殺此二人。則可。若不能殺。請今率諸侯。受命邯鄲城下。諒殺曰。趙約平原君親寡君之母弟也。猶大王之有葉陽涇陽君也。大王以孝治。聞於天下。衣服之使於體。膳啗之味於口。未嘗不於葉陽涇陽君。葉陽涇陽君之車馬衣服。無非大王之服御者。臣聞之。有覆巢毀卵。而鳳凰不翔。創胎焚天。而麒麟不至。今使臣受大王之令。以還報。敝邑之君畏懼。不敢不行。無乃傷葉陽君涇陽君之心乎。秦王曰。諾。勿使從政。諒殺曰。敝邑之君有母弟。不能教誨。以惡大國。請黜之。勿使與政事。以稱大國。秦王乃喜。受其幣而厚遇之。

趙、姚賈をして韓・魏を約せしむ。韓・魏以て之を友とす。茅舉、姚賈の爲めに趙王に謂つて曰く、「賈は王の忠臣也。韓・魏之を得んと欲す。故に之を友とし、將に王をして之を逐はしめて、己因て之を受けんとす。今王之逐はざる、是れ韓・魏の爲めに也。」

忠臣也。韓魏欲得之。故友之。將使王逐之。而已因受之。今王逐之。是韓魏之欲得。而王之忠臣有罪也。故王不如勿逐。以明王之賢。而折韓魏招之。

魏の欲得て、王の忠臣罪ある也。故に王逐ふ勿くして以て王の賢を明かにして、韓・魏の之を招くを折かに如かず」と。

● 禮を厚うして之を親しむ。同井彫の語に此下に、「趙其韓魏二陰アランヲ離ヒテ將ニ之ヲ逐ハントス」と添ふれば義明かなりと ● 罪を得るあり

謂皮相國曰。以趙之弱。而據之。建信君。涉孟之讎。然者何也。以從爲有功也。齊不從。建信君知從之無功。建信君安能。以無功惡秦哉。不能以無功惡秦。則且下出兵助秦攻魏。以楚趙二分。齊。則是強。建信春申。從。則無功。而惡秦。秦分齊。齊亡。魏。則有功。而善秦。故兩君者。奚擇。有功之無功。爲知哉。

皮相國に謂つて曰く、「趙の弱を以てして、之を建信君・涉孟の讎に據す。然るものは何ぞや。從を以て功ありと爲せば也。齊從はずんば、建信君從の功なきを知らん。建信君安くんぞ能く功なきを以て秦を惡せんや。功なきを以て秦を惡する能はずんば、則ち且に兵を出し、秦を助けて魏を攻め、楚・趙を以て齊を分たんとす。則ち是れ強畢くるなり。建信・春申從せば、則ち功なくして秦に惡まれ、秦、齊を分ち、齊、魏を亡ぼさば、則ち功あつて秦に善し。故に兩君は、

奚ぞ有功を釋て、無功に之くを知らりとせんや」と。

● 或人が也。皮相國は趙の相、其人未詳也。此一章一體に意明かなりず、蓋し誤あらん ● 建信君や涉孟の如き君の仇讐たる人物に託す。正解は「之」を「於」の意とし、「建信君に據り、涉孟を之れ讐とす」と訓じ、「涉孟ハ蓋シ楨人」といへり ● 合從 ● 功なき合從を以てして交りを棄に離しくする事能はじ ● 分國。一説に分國 ● 國強の計畢る。一説に齊國の強も致に至りて畢る ● 合從せば ● 建信、春申 ● 「擇」は「釋」の誤といふ正解の説に従ふ

功惡秦。則且下出兵助秦攻魏。以楚趙二分。齊。則是強。建信春申。從。則無功。而惡秦。秦分齊。齊亡。魏。則有功。而善秦。故兩君者。奚擇。有功之無功。爲知哉。

或皮相國に謂つて曰く、「魏、呂遼を殺し、衛兵其北陽を亡うて梁危ふく、

或謂皮相國曰。魏殺呂遼。而衛兵亡其北陽。而梁危。河閉封不定。而趙危。文信不得志。三晉倍之憂也。今魏恥未滅。趙

河閉封定まらずして趙危ふし。文信志を得ず、三晉倍くの憂あり。今魏の恥未だ滅せずして、趙の患又起る。文信の憂大なり。齊、從せず、三晉の心疑ふ。憂大なる者は計らずして構じ、心疑ふ者は秦に事ふる急なり。秦・魏の構は割くを待たずして成らん。秦、楚・魏の齊を攻むるに從つて、獨り趙を吞まば、

患又起。文信侯之憂大矣。齊不從。三晉之心疑矣。愛大者不計而構。心疑者事秦急。秦魏之構不待割而成。秦從楚魏攻齊。獨吞趙。齊趙必俱亡矣。

齊・趙必ず俱に亡びんと。

- 蓋し秦の重なる所の者
- 秦怒りて魏を伐ち、魏兵敗れて北陽を失亡す
- 趙嘗て河間の十二縣を秦に略す、秦呂不韋を封ず、此時趙方に昭侯と合從し河間を收めんと欲す、故に封定まらずし秦趙之を争ひ趙爲に危ふし
- 呂不韋の封號、不韋河間を得ず、三晉倍反の憂有り也
- 魏が呂遼を殺したるの恥
- 合從せず
- 講也。講和し
- 其後に從つて

魏使人因平原君。語中從於趙。三言之。趙王不聽。出遇虞卿。曰。爲入必語從。虞卿入。王曰。今者平原君爲魏請從。寡人不聽。其於子何

魏、人をして平原君に因て、從を趙に請はしむ。三たび之を言へども、趙王聽かず。出で、虞卿に遇うて曰く、「爲めに入つて必ず從を語れ」と。虞卿入る。王曰く、「今者平原君、魏の爲めに從を請ふ。寡人聽かず。其れ子に於て何如。」虞卿曰く、「魏過てり。」王曰く、「然り。故に寡人聽かず。」虞卿曰く、「王も亦過てり。」王曰く、「何ぞや。」曰く、「凡そ強と弱との事を擧ぐる、強は其利を受け、弱は其害を受く。今、魏從を求めて王聽かず。是れ魏、害を求めて、王、

利を辭する也。臣故に曰く、魏過てり、王も亦過てりと。」

- 合從
- 王宮に入る
- 只今
- 魏は弱く趙は強ければ也との意を含めて見よ

如。虞卿曰。魏過矣。王曰。然。故寡人不聽。虞卿曰。王亦過矣。王曰。何也。曰。凡強弱之舉事。強受其利。弱受其害。今魏求從。而王不聽。是魏求害。而王辭利也。臣故曰。魏過。王亦過矣。

平原君、馮忌に謂つて曰く、「吾、北、上黨を伐ち、兵を出して燕を攻めんと欲す、何如。」馮忌對へて曰く、「不可なり。夫れ秦將武安君、公孫起、七勝の威に乗ずるを以てして、馬服の子と長平の下に戦ひ、大いに趙の師を敗り、因て其餘兵を以て邯鄲の城を圍む。趙、亡敗の餘衆を以て、破軍の敵を收めて守る。而して秦、邯鄲の下に罷れ、趙守つて拔く可らざるものは、攻は難くして守るは易きを以て也。今趙は七克の威あるに非ず、燕は長平の禍あるに非ず。今七敗の禍未だ復せずして、罷趙を以て強燕を攻めんと欲す。是れ弱趙をして強秦

平原君謂馮忌曰。吾欲下北伐。上黨出兵。攻也。燕何如。馮忌對曰。不可。夫以秦將武安君公孫起。乘七勝之威。而與馬服之子。戰於長平之下。大敗趙師。因以其餘

の禍未だ復せずして、罷趙を以て強燕を攻めんと欲す。是れ弱趙をして強秦

兵。圍邯鄲之
城。趙以亡敗
之餘衆。收破
軍之敵守。而
秦罷於邯鄲
之下。趙守而
不可拔者。以
攻難而守者
易也。今趙非
有七克之威。
也。而燕非有長
平之禍也。今
七敗之禍未復。
而欲以三罷
趙一攻中強
燕。是使弱
趙爲三強。秦
之所一以亡。
而弱越
之所一以霸。
故臣未見燕
之可攻也。平
原君曰。善哉。

の攻むる所以を爲さしめ、而して強燕をして弱趙の守る所以を爲さしむるなり。而して強秦、休兵を以て趙の敵を承けん。此れ乃ち強吳の亡びし所以にして、弱越の霸たりし所以也。故に臣未だ燕の攻む可きを見ざる也」平原君曰く、「善いかな」と。

● 趙括 ● 疲敵の卒を収めて邯鄲を守るを謂ふ ● 七勝 ● 回復 ● 休養したる強兵を以て疲弊せる趙に加へん ● 正解に曰く「弱趙ヲ以テ強吳ノ敵ヲ承ク、吳亡ビテ趙弱タリ、況ヤ強秦ヲ以テ弱趙ノ敵ヲ承クルヤ」

平原君謂平
陽君曰。公子
李游於秦。且
東而辭應侯。
應侯曰。公子
將行矣。獨無

平原君、平陽君に謂つて曰く、「公子牟、秦に遊び、且に東せんとして應侯に辭す。應侯曰く、「公子將に行かんとす。獨り以て之れを教ふる無きか」と。曰く、「且つ君の命之を命する微きも、臣固より且に君に效す有らんとす。夫れ貴は富

以教之乎。曰。
且微君之命
命之也。臣固
且有効於君。
夫貴不與富
期而富至。富
不與梁肉一期
而梁肉至。梁
肉不與驕奢一
期上而驕奢至。
驕奢不與死亡
亡期上而死亡
於心。願君之亦
勿忘也。平陽君
曰。敬諾。

と期せずして富至り、富は梁肉と期せずして梁肉至り、梁肉は驕奢と期せずして驕奢至り、驕奢は死亡と期せずして死亡至る。累世以前より此れに坐する者多し」と。應侯曰く、「公子之之を教ふる所以のもの厚し」と。僕此を聞くを得て、心に忘れず。願はくは君の亦忘るゝ勿らんを。」平陽君曰く、「敬んで諾す。」

● 魏の公子 ● 公子牟曰く、君の命を以て之を命する無くとも臣將に君に遊む有らんとす云々と也 ● 別に約束はしなくても ● 代々の昔より斯うして亡びたる者多し ● 平原君の自稱。但この語の切れ目につきては種々異説あり

說張相國曰。
君安能少趙
人。而令趙人
多君。君安能
憎趙人。而令
趙人愛君乎。

張相國に説いて曰く、「君安くんぞ能く趙人を少として、趙人をして君を多とせしめんや。君安くんぞ能く趙人を憎んで、趙人をして君を愛せしめんや。夫れ膠漆は至つて黏きも、遠きを合する能はず。鴻毛は至つて輕きも、自ら擧がる能

夫膠漆至黏也。而不能合。遠。鴻毛至輕也。而不能自擊。夫飄於清風。則橫行四海。故事有簡而功成者。因也。今趙萬乘之強國也。前漳滏。右常山。左河間。北有代。帶甲百萬。嘗抑強齊。四十餘年。而秦不能得所欲。由是觀之。趙之於天下也。不輕。今君易三萬乘之強趙。而慕三思不可得之小梁。臣竊爲君不取也。君曰。善。自是之後。衆人廣坐之中。未嘗不言趙人之長者一也。未嘗不言趙俗之善者一也。

はず。夫れ清風に飄へれば、則ち四海に横行す。故に事、簡にして功成る有る者は因れば也。今趙は萬乗の強國也。漳・滏を前にし、常山を右にし、河間を左にし、北に代あり、帶甲百萬。嘗て強齊を抑へ、四十餘年にして、秦、欲する所を得ず。是に由て之を觀れば、趙の天下に於けるや輕からず。今君、萬乗の強趙を易りて、得可らざるの小梁を慕思す。臣竊かに君の爲めに取らず。」君曰く、「善し」と。是よりの後、衆人廣坐の中に、未だ嘗て趙人の長ぜる者を言はずんばあらず、未だ嘗て趙俗の善き者を言はずんばあらずりき。

● 或人が趙の宰相張氏に ● 思しみて ● 重ぜしめ ● 依也。依託する所あれば也 ● 二水の名 ● 軍卒 ● 意の如くするを得ざる也、蓋し強は罪を以て梁を亡(二)げし者ならん ● 趙の習俗

建信君貴於趙。公子魏牟過趙。趙王迎之。顧反至坐。前有二尺帛。且令工以爲冠。工見客來也。因避。趙王曰。公子乃驪後車。幸以臨寡人。願開所三以爲天下。魏牟曰。王能重王。之國若此尺帛。則王之國大治矣。趙王不說。形於顏色。曰。先王不知寡人不肖。豈使奉社稷。豈

建信君趙に貴ばる。公子魏牟趙に過る。趙王之を迎へ、顧反し至つて坐す。前に尺帛あり。且に工をして以て冠を爲らしめんとす。工、客の來るを見て、因て避く。趙王曰く、「公子乃ち後車を驪つて、幸に以て寡人に臨む。願はくは天下を爲むる所以を聞かん。」魏牟曰く、「王能く王の國を重んずること、此の尺帛の若くならば、則ち王の國大いに治まらん」と。趙王説ばず、顔色に形はして曰く、「先王、寡人の不肖を知らずして、社稷を奉せしむ。豈に敢て國を輕んずること此の若くならんや。」魏牟曰く、「王怒る無かれ。請ふ王の爲めに之を説かん。曰く、王、此の尺帛あり。何ぞ前郎中をして以て冠を爲らしめざるや。」王曰く、「郎中、冠を爲るを知らず。」魏牟曰く、「冠を爲つて之を敗るとも、奚ぞ王の國に虧かん。而も王必ず工を待つて、而して後乃ち之を使しむ。今天下を爲むるの工或は非ならんか、社稷虚戻と爲り、先王血食せじ。而るに王以て工に予へずして、乃ち幼艾に與ふ。且つ王の先帝。犀首に駕して馬服を驂とし、以て秦と角

敢輕國若此。魏牟曰。王無怒。請爲王說之。曰。王有尺帛。何不令前耶。中以爲冠。王曰。耶中不知爲冠。魏牟曰。爲冠而敗之。奚虧於王之國。而王必待工。而後乃使之。今爲天下之工。或非也。社稷爲虛。戾先王不血食。而王不以予工。乃與幼艾。且王之先帝。駕犀首而勝馬服。以與秦角逐。秦當時適其鋒。今王憺憺。乃豈建信。以與強秦角逐。臣恐秦折王之椅也。

逐し、秦當時其鋒を避く。今王憺憺として乃ち建信を轡にし、以て強秦と角逐す。臣、秦の、王の椅を折かんを恐る」と。

蓋し好男子にて男色關係にて賣はれしならん ① 違反の意。かへること ② 職人 ③ 卽ち魏牟也 ④ 敢て其乘車を指して言はざる諱辭也 ⑤ 治也 ⑥ 尺帛 ⑦ 耶中の王前に在る者 ⑧ 圖に損失する所無し ⑨ 居宅人なきを慮といひ、死して後なきを慮といふ。兵は國と通ず、國の亡び絶ゆるをいふ也 ⑩ 祭祀絶えん ⑪ 美少年に託す。國政を建信君に委ぬ ⑫ 犀首馬服は人名、犀と驢(驢馬)とは以て馬に喩ふる也。犀首は公孫衍の任したる官名、驢驢し ⑬ 往來絶えざる貌 ⑭ てぐるま ⑮ 一本「轡」に作る、蓋し通用也、車旁をいふ、鞵といふによりてこの字を點出す。乘の爲めに敗られんと也

成謂建信君曰。君之所以事王者。色也。王者智也。色

或るひと建信君に謂つて曰く、「君の王に事ふる所以は色也。昔の王に事ふる所以は智也、色は老いて衰へ、智は老いて多し。日に多きの智を以て、衰悪するの色を逐はば、君必ず困しまん」建信君曰く、「奈何せん。」曰く、「驥に竝んで

老而衰。智老而多。以二日多之智。而逐二衰之色。君必困矣。建信君曰。奈何。曰。並驥而走者。五里而罷。乘驥而御之。不罷。而取道多。君令下。莖乘獨斷之車。御獨斷之勢。以居邯鄲。令下之內治。國事。外刺諸侯。則莖之事。有不不言者。一矣。君因言王。而重責之。莖之軸。令折矣。建信君再拜受命。入言於王。王厚任莖。以事。而重責之。未二期年。而莖亡走矣。

走る者は五里にして罷れ、驥に乗じて之を御すれば、倦まずして道を取る多し。君、莖をして獨斷の車に乗じ、獨斷の勢を御して、以て邯鄲に居らしめ、之をして内國事を治め、外諸侯を制せしめば、則ち莖の事、言ふべからざる者あらん。君因て王に言つて重く之を責めば、莖の軸折れしめん」と。建信君再拜して命を受け、入つて王に言ひ、厚く莖に任ずるに事を以てして、重く之を責む。未だ期年ならずして莖亡け走る。

坊本「莖」に作る、趙人の名 ② 原文「制」は「制」の誤、諸侯の事を制断するをいふ。原文のまゝにて「タダス」と訓ずるも亦可か ③ 有不不言者。は有不可言者之意。過失大にして言語に絶するあらん、内外を一人に獨断せしめば事多きに過ぎて必ず過失あらん ④ 其過失に因て ⑤ 任多くして必ず敗れん、此句前の驥に乗じて御す等の句に應ず

苦成常謂建

苦成常、建信君に謂つて曰く、「天下合從して、獨り趙をして秦に惡せしむる

信君曰。天下合從。而獨以趙惡秦何也。魏殺呂遼。而天下交之。今收河間。是與殺呂遼。何以異。君唯釋虛僞。疾文信侯。猶且知之也。從而有功乎。何患不得收河間。從而無功乎。收河間。何益也。

希寫見建信君。建信君曰。文信侯之於僕也。甚矣。無禮。秦使人來仕。

は何ぞや。魏、呂遼を殺して、天下之に交はる。今河間を收む。是れ呂遼を殺すと、何を以てか異ならん。君唯だ虚偽を釋て、文信侯を疾め。猶ほ且つ之を知らん。從して功あらんか、何ぞ河間を收むるを得ざるを患へん。從して功なくば、河間を收むるも何の益かあらんと。

● 以は使の意也。此章異説紛々、文義微茫しがたし ● 秦の慮する者。此事前に見ゆ。天下の諸侯此事を痛快として魏と親交を結べりと也 ● 趙は秦の文信侯が廣めんと欲する河間の地を取上げて與へず ● うはべにて諸侯に從約し、陰には文信侯と相善くするが如き事を爲すとならん ● 時機漏れたれど、諸侯は其誠意を知るならん

希寫、建信君に見ゆ。建信君曰く、「文信侯の僕に於けるや、甚だ禮なし。秦、人をして來つて仕へしむ。僕之を丞相に官し、五大夫に爵す。文信侯の僕に於ける、甚だしい矣。其の禮なきや。」希寫曰く、「臣以爲へらく、今の世の事を用

僕官之丞相。爵五大夫。文信侯之於僕也。甚矣。其無禮也。希寫曰。臣以爲今世用事者。不如商賈。建信君勃然曰。足下卑用事者。而高商賈乎。曰。不然。夫良商不與人爭。買賣之賈。而謹司時。時賤而買。雖賤已賤矣。時貴而賣。雖賤已貴矣。昔者文王拘於羈里。而武王羈於玉門。卒斷紂之頭。而懸於太白者。是武王之功也。今君

ふる者は商賈に如かず。」建信君勃然として曰く、「足下、事を用ふる者を卑しんで、商賈を高しとするか。」曰く、「然らず。夫れ良商は人と買賣の賈を争はずして、謹んで時を司ふ。時賤くして買はゞ、貴しと雖も已に賤く、時貴くして賣らば、賤しと雖も已に貴し。昔は文王羈里に拘はれ、而して武王は玉門に羈がれしも、卒に紂の頭を斬つて、太白に懸けたるものは、是れ武王の功也。今君、文信侯と相抗するに權を以てする能はずして、文信侯の禮を少くを責む。臣竊かに君の爲めに取らず」と。

● 趙人 ● 趙に仕へしむ ● 丞相の屬官たらしめ ● 價也、賈「カ」 ● 何也 ● 價の安い時買へば高く買つても一體に價の高い時よりは安く、價の高い時に賣れば安く買つても一體に價の安い時よりは高い、良價は人と争はず、物價高低の時機を伺つて賣買する故結局大いなる利益を得るとにて、以て、建信君の亦能く文信君と争はずして時を觀て動かば、暫く屈しても卒に能く伸び得べきをいふ也 ● 旗の名 ● 抗に同じ。抗衡するに權力を以てする能はずして其體を缺くを責む、是れ時を觀ずして人と争ふ、乃ち商賈に如かずと也 ● 少は缺也

不能與文信侯相仇以權。而責文信侯少禮。臣竊爲君不取也。

魏勉謂建信君曰。人有置虎。虎怒決躡而去。虎之情非不愛其躡也。然而不下以環寸之躡。害中七尺之軀。擢也。今有國。非直七尺軀也。而君之身於王。非環寸之躡也。願公之熟圖之一也。

魏勉、建信君に謂つて曰く、「人、係蹄を置く者ありて、虎を得たり。虎怒つて、躡を決つて去る。虎の情、其躡を愛まざるに非ず。然れども環寸の躡を以て、七尺の軀を害せざるは權也。今國を有つは、直に七尺の軀のみに非ずして、君の身の王に於けるは、環寸の躡に非ず。願はくは公の之を熟圖せんことを」と。

● わなを掛けて置く者 ● 自分の足の裏の肉をえぐり切つて逃げ去る ● 周圍一寸 ● 其得失輕重をはかりたる上の處置也 ● 國を保有するは虎が其躡を保たんとするが如き輕微のものにあらずして、王が建信君を視る事は虎が其躡を受するに及ばず、急あちは必ず之を斷ち去らんと也

秦攻趙。鼓鐸之音。聞於北堂。希卑曰。夫秦之攻趙。不宜急如此。此

秦、趙を攻む。鼓鐸の音北堂に聞ゆ。希卑曰く、「夫れ秦の趙を攻むる、宜しく急なること此の如くなるべからず。此れ兵を召けるならん。必ず大臣の衡を欲する者あらん耳。王、其人を知らんと欲せば、且日群臣を齎めて之を訪へ。先づ

横を言はん者、則ち其人也」と。建信君果して先づ横を言ふ。

● 横は金銀也。金口金舌の大鈴にて武事を奮ふ爲めに鼓する器 ● 深宮也 ● 内應する者ありて秦兵を招致せるならん ● 趙の大臣中に連横を欲する者あらん ● 明朝 ● 原文「賢」は「賢」の誤といふ、賢は聚也 ● 連横

召兵也。必有大臣欲衡者耳。王欲知其人。且日贊羣臣而訪之。先言横者。則其人也。建信君果先言横。

齊人李伯見孝成王。成王說之。以爲二代郡守。而居無幾。何人告之。反。孝成王方饋。不墮食。無幾。何告者復至。孝成王不應。已乃使使者言。齊舉兵

齊人李伯、孝成王に見ゆ。成王之を説び、以て代郡の守となす。而るに居る幾何も無く、人之が反を告ぐ。孝成王方に饋す。食を墮さず。幾何もなく、告ぐる者復た至る。孝成王應へず。已にして乃ち使者をして言はしむらく「齊、兵を舉げて燕を撃つ、其の燕を撃つを以て名として、兵を以て趙を襲はんを恐る。故に兵を發して自ら備ふ。今燕・齊已に合へり。臣請ふ其の敝を要へん。而らば地多く割く可し」と。是れより後、孝成王の爲めに事に外に従ふ者、自ら中に疑ふ者なし。

擊燕。恐其以
擊燕爲名。而
以兵襲趙。故
發兵自備。今
疑於中者。

● 食事す ● 一説はヤメズと訓ず、自若として食を廢せずと也、何れにしても驚き怒らざるを表はす句也 ●
李伯が也 ● 合戦始れり ● 一方の戦ひ疲れたるものを逃避して伐たん ● 皆王の疑はざるを信ずと也

爲齊獻書趙
王曰。臣一見
而能令王坐
而天下致名
實。而臣竊怪
王之不試見
臣。而窮也。
羣臣必多以
臣爲不能者
也。以臣爲不
能者。非他。欲
用王之兵。成
其私者也。非

齊の爲めに書を趙王に獻じて曰く、「臣一たび見えて、能く王をして坐ながらに
して天下に名實を致さしめん。而るに臣竊かに王の試みに臣を見ずして臣を窮せ
しむるを怪しむ。群臣必ず臣を以て不能と爲す者多し、故に王、臣を見るを重か
るならん。臣を以て不能と爲す者は他に非ず、王の兵を用ひて、其私を成さん
と欲する者也。然るに非ずんば則ち交偏する所ある者也。然るに非ずんば則ち
智足らざる者也。然るに非ずんば則ち天下の重を以て王を恐れしめて、行はる
るを王に取らんと欲する者也。臣、齊が王に循ひ事ふるを以てせば、王能く燕を
亡ほし、能く韓・魏を亡ほし、能く秦を攻め、能く秦を孤とせん。臣、齊が尊名

然。則交有。所
備者也。非然。
則智不足者
也。非然。則欲
以天下之重
恐王。而取中
於王者也。臣
以齊循事王。
王能亡燕。能
亡韓。魏。能攻
秦。能孤秦。臣
以齊致尊名
於王。天下孰
敢不致尊名
於王。臣以齊
致地於王。天
下孰敢不致
地於王。臣以
齊爲王求名
於燕及韓魏。

を王に致すを以てせば、天下孰れか敢て尊名を王に致さざらん。臣、齊が地を王
に致すを以てせば、天下孰れか敢て地を王に致さざらん。臣、齊が王の爲めに名
を燕及び韓・魏に求むるを以てせば、孰れか敢て之を辭せん。臣の能くするや、其
前に見る可き已。齊先づ王を重んぜば、故に天下盡く王を重んぜん。王、齊な
くんば、天下盡く王を輕んぜん。秦の強も、齊無きの故を以て王を重んぜん。
燕・韓・魏も自ら齊なきの故を以て王を重んぜん。今王、齊なくして、獨り安
んぞ能く天下に重んぜらるゝを得んや。故に王に勸めて齊なからしむる者は、智
の足らざるに非ずんば、則ち不忠なる者也。然るに非ずんば、則ち王の兵を用ひ
て、其私を成さんと欲する者也。然るに非ずんば、則ち王を輕くし、天下の重
を以て、行はるゝを王に取らんと欲する者也。然るに非ずんば、則ち位尊くし
て能卑しき者也。願はくは王の齊なきの利害を孰慮せんことを。」

● 或人が ● 名は帝號の尊名實は土地 ● 偏して一國に偏するをいふ ● 已の説の王に行はるるを取るを

孰敢辭之。臣之能也。其前可見已。齊先重王。故天下盡重王。王無齊。天下必盡輕王也。秦之強。以無齊之故。重王。燕韓魏自以無齊。故重王。今王無齊。獨安得無重天下。故勸王無齊者。非智不足也。則不忠者也。非然。則欲用王之兵。成其私者也。非然。則欲輕王以天下之重。取中行於王者也。非然。則位尊而能卑者也。願王之孰慮無齊之利害也。

趙使趙莊合從。欲伐齊。齊請效地。趙因賤趙莊。齊明爲謂趙王曰。齊畏從之合也。故效地。今聞趙莊賤。張勲責齊。必不

謂ふ ① 計策を測さばの意か。正解には「以」は「使」(シテ……シム)に同じとし、又一説には「オモヘラク」とす ② 孤立無援 ③ 帝號 ④ 臣と稱することを ⑤ 是等の事を能くするは、未だ致さざる前に之を見るべし ⑥ 齊が趙につきて秦自らに齊の助力無きに至れる故を以て ⑦ 趙をして齊無からしめて以て王を輕うするをいふ ⑧ 材能の低き ⑨ 孰は船に通ず

趙、趙莊をして合從せしめ、齊を伐たんと欲す。齊、地を效さんと請ふ。趙因て趙莊を賤しむ。齊明爲めに趙王に謂つて曰く、「齊、從の合はんを畏る、故に地を效せり。今趙莊賤しうして、張勲貴しと聞かば、齊必ず地を效さじ。」趙王曰く、「善し」と。乃ち趙莊を召して之を責ふ。

● 開君長曰く「齊合從せず、故二趙之ヲ伐タント欲ス、而シテ齊地ヲ效サント請フ、趙オモヘラク合從スルヲ須キズト、因テ趙莊ヲ賤シム」 ② 趙莊の爲めに ③ 從を敗る者、齊合從するを欲せず、故に地を效す、今從の成る

效地矣。趙王曰。善。乃召趙莊而責之。

翟章從梁來。甚善趙王。趙王三延之以相。翟章辭不受。田驪謂柱國韓向曰。臣請爲卿刺之。客若死。則王必怒而誅建信君。建信君必死。則卿必爲相矣。建信君不死。以爲交。卿終身不敵。卿因以德建信君一矣。

ざるを聞かば、即ち蘇丹地を效さじ

翟章梁より來る。甚だ趙王に善し。趙王三たび延くに相を以てす。翟章辭して受けず。田驪、柱國韓向に謂つて曰く、「臣請ふ卿の爲めに之れを刺さん。客若し死せば、則ち王必ず怒つて建信君を誅せん。建信君死せば、則ち卿必ず相たらん。建信君死せずば、以爲らく交り終身敵れじと。卿因て以て建信君に德せよ」と。

● 趙誘す、即ち宰相たらしめんと恩命を下す ② 官名 ③ 翟章を殺さん ④ 翟章 ⑤ 建信君が事を專らにせん爲めに之を殺したるものと疑ひて也 ⑥ 建信君は章の死を見、斯かる上は王との交り終身やぶれずと思ひて。「説には「交」の字を衍とす ⑦ 韓向は因て己が章を殺したる事を建信君に知らしめ以て彼に恩をさせよと也

馮忌爲盧陵君。謂趙王曰。王之逐盧陵君。爲燕也。王曰。吾所以重者。無燕秦也。對曰。秦三以廣卿爲言。而王不逐也。今燕一以盧陵君爲言。而王逐之。是王輕強秦。而重弱燕也。王曰。吾非爲燕也。吾固將逐之。然則王逐盧陵君。又不爲燕也。行逐愛弟。又兼無燕秦。臣竊爲大王不取也。

馮忌請見趙

馮忌、盧陵君の爲めに趙王に謂つて曰く、「王の盧陵君を逐ふは、燕の爲めにする也。」王曰く、「吾が重んぜらるゝ所以は、燕・秦を無みすれば也。」對へて曰く、「秦三たび廣卿を以て言を爲ししも、王逐はず。今燕一たび盧陵君を以て言を爲して、王之を逐はゞ、是れ王、強秦を輕んじて、弱燕を重んずる也。」王曰く、「吾燕の爲めにするに非ず。吾固より將に之を逐はんとせり。」然らば則ち王の盧陵君を逐ふ、又燕の爲めにするにあらず、行ひ愛弟を逐ひ、又兼ねて燕・秦を無みす。臣竊かに大王の爲めに取らざる也。

● 趙の孝成王の母弟 ● 吾が諸侯に尊重せらるる所以のものは燕秦の二國を無視するが故也 ● 既に眼中になし、何ぞ燕の爲めに盧陵君を逐ふ事あらんと也 ● 廣卿を逐ふべしと勸告せしも ● 其行爲たるや

馮忌、趙王に見えんと請ふ。行人之を見えしむ。馮忌、手を接へ首を俛し、

王。行人見之。馮忌接手俛首。欲言而不。敢。王問其故。對曰。客有下見。人於服子者。已而請其罪。服子曰。公之客獨有三罪。望我而笑。是狎也。談語而不稱師。是倍也。交淺而言深。是亂也。客曰。不然。夫望人而笑。是和也。言而不稱師。是庸說也。交淺而言深。是忠也。昔者

言はんと欲して敢てせず。王其故を問ふ。對へて曰く、「客、人を服子に見えしむる者あり。已にして其の罪を請ふ。服子曰く『公の客獨り三罪あり。我を望んで笑ふ、是れ狎るゝ也。談語して師を稱せず、是れ倍く也。交淺くして言ふこと深し、是れ亂也』と。客曰く、『然らず。夫れ人を望んで笑ふは、是れ和也。言つて師を稱せざるは、是れ庸說也。交淺くして言ふこと深きは、是れ忠也。昔し堯は舜を草茅の中に見、龍斂に席して鹿桑に廢し、陰移つて天下を授け、伊尹は鼎俎を負うて湯に干め、姓名未だ著はれずして三公を受く。夫れ交淺き者をして、以て深く談ず可らざらしめば、則ち天下傳へられずして、三公得られざりしならん』と。今外臣、交淺くして深く談せんと欲す、可ならんか。」王曰く、「請ふ教を奉ぜん」と。是に於て馮忌乃ち談ず。

● 取次の役人 ● 兩手を交へ ● 其人物事蹟未詳 ● 客が ● 君が見えしめたる人に ● 師の言を引き稱せざるは其師に背ける者也、倍は背 ● 禮を亂るもの也 ● 心々はちぎたる也 ● 日常平凡の語にて人の

堯見舜於草茅之中。席隴畝而廢此桑。陰移而授天下。伊尹負鼎俎而干湯。姓名未著而受三公。使夫交淺者不可深談。則天下不傳。而三公不得也。趙王曰。甚善。馮忌曰。今外臣交淺。而欲深談。可乎。王曰。請奉教。於是馮忌乃談。

同じくいふ所なれば、必ずしも師の言を導引せざる也。①はたけに師を設け、②生ひ茂りたる桑の木の蔭に居て、③日影の移る頃には、即ち少頃にして、④銅烹の具を携へ往く、⑤其説の容れられん事を湯王に求む。⑥名もまだ著れぬ程の暫時の程にして早くも三公の位を受く、⑦馮忌の自稱

客見趙王曰。臣聞王之使人買馬也。有之乎。王曰。有之。何故至今不遣。王曰。未得相馬之工也。對曰。王何不遣建信君乎。王曰。建信君有國事。又不知相馬。曰。

客、趙王に見えて曰く、「臣、王の人をして馬を買はしむるを聞く。之ありや。」王臣く、「之あり。」何の故にか今に至るまで遣らざる。王曰く、「未だ馬を相するの工を得ざれば也。」對へて曰く、「王何ぞ建信君を遣らざる。」王曰く、「建信君は國事あり。又馬を相するを知らず。」曰く、「王何ぞ紀姬を遣らざる。」王曰く、「紀姬は婦人也。馬を相するを知らず。」對へて曰く、「馬を買うて善くば何の國に補かある。」王曰く、「國に補なし。」馬を買うて悪しくば、何の國に危かある。」王曰く、「國に危なし。」對へて曰く、「然らば則ち馬を買うて善き

王何不遣紀姬乎。王曰。紀姬婦人也。不知相馬。對曰。買馬而善。何補於國。王曰。無補於國。買馬而惡。何危於國。王曰。無危於國。對曰。然則買馬善而若惡。皆無危。補於國。然而王之買馬也。必將待工。今治天下。舉錯非也。國家爲虛戾。而社稷不血食。然而王不待工。

も若しくは悪しきも、皆國に危補なし。然るに王の馬を買ふや、必ず將に工を待たんとす。今天下を治めて、舉錯非ならんか、國家虛戾と爲つて、社稷血食せじ。然るに王、工を待たずして、建信君と與にするは何ぞや」と。趙王未だ之れに應へず。客曰く、「郭偃の法に、所謂桑雍なる者あり。王之を知るか。」王曰く、「未だ之を聞かず。」所謂桑雍とは、便辟左右の人、及び夫人、優愛の孺子也。此れ皆能く王の醉昏に乗じて、欲する所を王に求むる者也。是れ能く之を内に得ば、則ち大臣之が爲めに法を外に枉ぐ。故に日月の外に暉するも、其賊は内に在り、謹んで其の憎む所に備ふるも、禍は愛する所に在り」と。

①買ふ人を差し遣さざるか ②日利き、名人 ③處置 ④虚厲也、衰亡をいふ。前にも見ゆ ⑤社稷の神祭祀絶まん ⑥古の管の大夫の名。其嘗當時世に似たりありしならん ⑦桑の木の瘤。吳註に「桑中虚有り、香液外ニ流ルルヲ以テ懸瀝(ネプトのツブレ)ノ如ク然リ」 ⑧近習驕幸の人 ⑨寵愛甚しき大奥の女子達 ⑩醉ひうつら／＼としてゐる隙、有解けくつらいでゐる隙 ⑪これ等の人々が奥向にありて其志を達するを得れば ⑫暉の誤又は通用、日月のかさ也 ⑬其内部に其光を蔽ひ晦ます者がある也、即ち權臣の法を外に枉ぐるは、驕龍の内に暉するに由る也 ⑭憎む所は權臣を謂ひ、愛する所は驕龍をいふならん

而與建信君何也。趙王未之應也。客曰。郭偃之法。有所謂桑雍者。王知之乎。王曰。未聞之也。所謂桑雍者。使辟左右之近者。及夫人優愛孺子也。此皆能乘王之醉。而求所欲於王者也。是能得之乎。內則大臣爲之枉法於外矣。故日月暉於外。其賊在於內。謹備其所憎。而禍在於所愛。

悼襄王

秦召春平侯。因留之。泄鈞爲之謂文信侯曰。春平侯者。趙王之所甚愛也。而郿中甚妬之。故相與謀曰。春平侯入秦。秦必留之。故謀而入之。秦今君留之。是空

秦、春平侯を召し、因て之を留む。泄鈞之が爲めに文信侯に謂つて曰く、「春平侯は趙王の甚だ愛する所にして、郿中甚だ之を妬めり。故に相與に謀つて曰く、『春平侯秦に入らば、秦必ず之れを留めん』と。故に謀つて之を秦に入る。今君之を留めば、是れ空しく趙を絶つて、郿中の計中る也。故に君春平侯を遣つて、平都侯を留めんにかかず。春平侯は、言趙王に行はる。必ず厚く趙を割きて以て君に事へて、平都侯に贖はん。」文信侯曰く、「善し」と。因て與に意を接へて之れを遣る。

絶趙。而郿中之計中也。故君不如遣春平侯。而留中平都侯。春平侯者。言行於趙王。必厚割趙以事君。而贖中平都侯。文信侯曰。善。因與接意而遣之。

- 趙人 ● 抑留す ● 秦人 ● 君側の官也 ● 郿中共が ● 亦趙の貴族にて春平侯と共に來れる者
- 春平と厚意を接する也

絶趙。而郿中之計中也。故君不如遣春平侯。而留中平都侯。春平侯者。言行於趙王。必厚割趙以事君。而贖中平都侯。文信侯曰。善。因與接意而遣之。

幽王

文信侯出走。與司空馬之趙。趙以爲守相。秦下甲而攻趙。司空馬說趙王曰。文信侯相秦。臣事之爲尙書。習秦事。今大王使守小官。習趙事。請爲大王設秦趙

文信侯出走し、司空馬と與に趙に之く。趙以て守相となす。秦、甲を下して趙を攻む。司空馬、趙王に説いて曰く、「文信侯、秦に相とし、臣之に事へて尙書たり、秦の事に習へり。今ま大王、小官を守らしむ、趙の事に習へり。謂ふ大王の爲めに秦・趙の戦を設けむ。而して親しく其孰れか勝たんを觀よ。」趙は秦の大なるに孰れぞ。」曰く、「如かず。」民は之が衆に孰れぞ。」曰く、「如かず。」金錢粟は之が富めるに孰れぞ。」曰く、「如かず。」國は之が治まれるに孰れぞ。」曰く、「如かず。」相は之が賢なるに孰れぞ。」曰く、「如かず。」將は之が武な

之戰。而親觀其孰勝。趙孰與秦。大曰。不。如。民孰與之。衆曰。不。如。金。錢粟孰與之。富曰。不。如。國。孰與之。治曰。不。如。相孰與之。賢曰。不。如。將孰與之。武曰。不。如。律令孰與之。明曰。不。如。司空馬曰。然則大王無及秦者。大王之國亡。趙王曰。卿不違趙。而惠教以

るに孰れぞ。」曰く、「如かず。」（一）「律令は之が明なるに孰れぞ。」曰く、「如かず。」司空馬曰く、「然らば則ち大王の國、百擧して而も秦に及ぶものなし。大王の國亡びん。」趙王曰く、「卿、趙を遠しとせずして、惠教するに國事を以てす。願はくは計に因らん。」司空馬曰く、「大王、趙の半を裂いて以て秦に賂はゞ、秦、双を接へずして趙の半を得、秦必ず説ばん。内趙の守らんを惡み、外諸侯の救はんを恐れれば、秦、必ず之れを受けん。秦、地を受けて兵を却け、趙、半國を守つて以て自ら存し、秦、賂を衛んで以て自ら強くせば、山東必ず、趙を亡はゞ自ら危ふからんを恐れ、諸侯必ず懼れん。懼れて相救はゞ、則ち從事成る可し。臣請ふ大王の爲めに從を約せん。從事成らば、則ち是れ大王、名は趙の半を亡ふも、實は山東を得て以て秦に敵するなり、秦亡ほすに足らじ。」趙王曰く、「前日、秦、甲を下して趙を攻め、趙之に賂ふに河間の十二縣を以てす。地削られ兵弱められて、卒に秦の患を免かれず。今又趙の半を割いて以て秦を強くせば、

國事。願於因。計。司空馬曰。大王裂趙之半。以賂秦。秦不接刃。而得趙之半。秦必說。內惡趙之守。外恐諸侯之救。秦必受之。秦受地而却兵。趙守半國。以自存。秦衛賂以自強。山東必恐亡。趙自危。諸侯必懼。懼而相救。則從事可成。臣請爲大王約。從。事。成。則。是。大。王。名。亡。趙。之。半。實。得。山。東。以。敵。秦。秦。不。足。亡。趙。王。曰。前日秦下甲攻趙。賂之。以河間十二縣。地削兵弱。卒不免秦患。今又割趙之半。以強秦。力不能自存。因以亡矣。願卿之更計。司空馬曰。臣少爲秦刀筆。以官長而守小官。未嘗爲

力自ら存する能はず、因て以て亡びん。願はくは卿の更に計らんを。」司空馬曰く、「臣少うして秦の刀筆と爲り、官の長を以て小吏を守る。未だ嘗て兵首たらざるも、請ふ大王の爲めに趙の兵を悉して以て遇はん」と。趙王、將とする能はず。司空馬曰く、「臣、愚計を效して、大王用ひず。是れ臣以て大王に事ふる無し、願はくは自ら請はん」と。（二）

- 吳註に「與」字を衍とし、正解亦之を是とす ● 宰相代とも稱すべき官ならん、司空馬を此官となす也 ● 甲兵 ● 文書を掌る官、書記官 ● 假に其事を陳設す、假定す ● 大王親しく ● どうして見ても ● 原文「於因計」は「因於計」に作るべしといふ、原文のまゝにて「計に因るを願ふ」と訓ずるも可ならん。司空馬の計に依らんと也 ● 惡み畏れ ● 趙を救はんを ● 受けて ● 山東の諸國。與趙なきに至る時は己の國危ふからんを恐ると也 ● 合從の事 ● 相手とするにも足らじ、敵し易きを言ふ也 ● 我が趙の國力は
- 刀筆の吏、尙書たりしをいふ ● 官長の命を以ての意か ● 戎首即ち將 ● 秦と合戰せん ● 司空馬を用ひて將とする能はず ● 御暇を賜らん

成。臣請爲大王約。從。事。成。則。是。大。王。名。亡。趙。之。半。實。得。山。東。以。敵。秦。秦。不。足。亡。趙。王。曰。前日秦下甲攻趙。賂之。以河間十二縣。地削兵弱。卒不免秦患。今又割趙之半。以強秦。力不能自存。因以亡矣。願卿之更計。司空馬曰。臣少爲秦刀筆。以官長而守小官。未嘗爲

兵首請爲大王悉趙兵以遇趙王不能將。司空馬曰。臣效愚計。大王不用。是臣無以事大王。願自請。

司空馬去趙。渡平原。平原津令郭遺勞而問。秦兵下趙。上客從趙。來。趙事何如。司空馬言。其爲趙王計。而弗用。趙必亡。平原令曰。以上客料之。趙何時亡。司空馬曰。趙將武安君。期年而亡。若殺武安君。不過半年。

司空馬趙を去つて、平原を渡る。平原の津令郭遺勞うて問ふらく、「秦兵趙に下ると。上客趙より来る。趙の事何如」と。司空馬、其の趙王の爲めに計つて用ひられず、趙の必ず亡ぶべきを言ふ。平原の令曰く、「上客を以て之を料るに、趙何れの時にか亡びん。」司空馬曰く、「趙、武安君を將とせば、期年にして亡びん。若し武安君を殺さば、半年に過ぎじ。趙王の臣に韓倉といふ者あり。曲を以て趙王に合ひ、其交り甚だ親し。其の人と爲り、賢を疾み功臣を妬む。今國危亡す。王必ず其言を用ひ、武安君必ず死せん」と。韓倉果して之を惡し、王、人をして代らしむ。武安君至る。韓倉をして之を數めしめて曰く、「將軍戦ひ勝つて、王、將軍に觴し、將軍、壽を前に爲すに、匕首を挿む。死に當す」と。武安君曰く、「縲鉤を病めり。身大に臂短くして、地に及ぶ能はず、起居不敬なり、前

趙王之臣有韓倉者。以曲合於趙王。其交甚親。其爲人。疾賢妬功。臣今國危亡。王必用其言。武安君必死。韓倉果惡之。王令人代武安君至。使韓倉數之曰。將軍戰勝。王觴將軍。將軍爲壽於前。而挿匕首。當死。武安君曰。縲病。不能及地。起居不敬。恐懼

に死罪あらんを恐懼す。故に工人をして木材を爲らしめ、以て手上に接けり。若し信ぜずんば、縲請ふ以て出示さんと。之を袖中より出して、以て韓倉に示す。狀振擱の如く、之を纏ふに布を以てす。「願はくは公入つて之を明かにせよ」と。韓倉曰く、「命を王に受けて、將軍に死を賜ふ。赦さず。臣敢て言はじ」と。武安君北面再拜して、死を賜ひ、劔を縮いて將に自ら誅せんとして、乃ち曰く、「人臣は宮中に自殺するを得ず」と。司馬門を過ぎて趨ること甚だ疾し。諺門を出づるや、右に劔を舉げて將に自ら誅せんとす。臂短くして及ぶ能はず。劔を衝み、之を柱に徴て、以て自ら刺す。武安君死して、五月趙亡ぶ。平原の令、諸公を見れば、必ず爲めに之を言つて曰く、「嗟茲乎、司空馬」と。又以爲らく、司空馬秦に逐はる、不智に非ざる也。趙を去る、不肖に非ざる也。趙、司空馬を去つて國亡ぶ。國の亡ぶるは、賢人なきに非ず、用ふる能はざれば也と。

- 渡津也
- 渡津の長官
- 趙の名將李牧
- 滿一年
- 邪曲不正
- 韓倉の諛言を用ひて武安君を殺さんと也
- 武安君を諛言し
- 下章を按ずるに、趙惠王最をして武安に代らしめたる也
- 御酒を賜ひ

死二罪於前。故使三工人爲二木材。以接二手上。若不信。繼請以出示。出之袖中。以示二韓倉。狀如二振捆。懸之。以布。願公入明之。韓倉曰。受命於王。賜二將軍死。不救。臣不敢言。武安君北面再拜。賜死。縮劍將二自誅。乃曰。人臣不得自殺。宮中。過二司馬門。趙甚疾。出二侈門也。右禦劍將二自誅。臂短不能及。術劍微之於柱。以自刺。武安君死。五月趙亡。平原令見二諸公。必爲言。之曰。嗟。茲乎。司空馬。又以爲司空馬。返於秦。非不智也。去趙。非不肖也。趙去二司空馬。而國亡。國亡者。非無二賢人。不能二用也。

秦使二王翦攻二趙。趙使二李牧司馬尙擊之。李牧數破二走秦軍。殺二秦將桓齮。王翦惡之。乃多與二趙

● あひくちを挿す、原文「挿」は挿の誤といふ ● 其罪死に當る ● 武安君の名 ● 手臂拘攣して其狀鉤の如し ● 王の前にて不敬により重料あるんを懼る ● 未詳。或はいふ東の樸木と。其他異説紛々 ● 將軍の事を王に辨明し難し ● 死罪の命を受け ● 引いて ● 宮門也 ● 別の通用門也。一説に侈は離にて「門を出診(ハナ)る、ヤ」と訓ず ● 劍の柄を柱に當て、「微」或は「質」の誤かといふ ● 高官の人々 ● 其言の違はざりしを歎ずる也

秦、王翦をして趙を攻めしむ。趙、李牧・司馬尙をして之を禦がしむ。李牧、數々秦軍を破り走らせ、秦將桓齮を殺す。王翦之を惡み、乃ち多く趙王の寵臣郭開等に金を與へて、反間を爲さしめて曰く、「李牧・司馬尙、秦に與し趙に反いて以て多く封を秦に取らんと欲す」と。趙王之を疑ひ、趙蕙及び顔最をして代つて

王寵臣郭開等金。使爲二反間。曰。李牧司馬尙欲二與二秦反。趙以多取二封於秦。趙王疑之。使二趙蕙及顔最代將。斬二李牧。廢二司馬尙。後三月。王翦因急擊。大破二趙。殺二趙軍。虜二趙王。遷及其將顔最。遂滅二趙。

將たらしめ、李牧を斬り、司馬尙を廢す。後三月、王翦因て急に撃つて大いに趙を破り、趙蕙を殺し、趙王遷及び其將顔最を虜にして、遂に趙を滅ぼせり。

● 隠して間をまくをいふ ● 坊本「五月」に作る ● 原文「趙軍」を史記によりて「趙蕙」に改む

卷第七上

魏上

桓子

智伯索地於魏桓子。魏桓子曰。何故弗予。曰。何故弗予。桓子曰。無故索地。故弗予。任章曰。無故索地。鄰國必恐。重欲無厭。天下必懼。君予之地。智伯

智伯、地を魏桓子に索む。魏桓子予へず。任章曰く、「何の故に予へざるか。」桓子曰く、「故なくして地を索む。故に予へず。」任章曰く、「故なくして地を索めば、鄰國必ず恐れん。欲を重ねて厭く無くんば、天下必ず懼れん。君之地を予へよ。智伯必ず僑らん。僑つて敵を輕んぜば、鄰國懼れて相親しまん。相親しむの兵を以て、敵を輕んずるの國を待たば、智氏の命長からじ。」周書に曰く、「將に之を取らんと欲せば、必ず姑らく之を輔けよ、將に之を取らんと欲せば、

必僑。僑而輕敵。鄰國懼而相親。以相親之兵。待輕敵之國。智氏之命不長矣。周書曰。將欲收之。必姑輔之。將欲取之。必姑與之。君不如與之。以僑智伯。君何釋天下。圖中智氏。而獨以晉國。爲智氏質乎。君曰。善。乃與之。萬家之邑一。智伯大說。因索蔡。臯梁於趙。趙弗與。因圍晉陽。韓魏反於外。趙氏應之於內。智氏遂亡。

必ず姑らく之を與へよ」と。君之に與へて以て智伯を僑らすに如かず。君何ぞ天下を以て智伯を圖るを釋いて、獨り吾國を以て智伯の質と爲すや。君曰く、「善し」と。乃ち之に萬家の邑一を與ふ。智伯大いに説ぶ。因て蔡・臯梁を趙に索む。趙與へず。因て晉陽を圍む。韓・魏外に反し、趙氏之に内に應じて、智氏遂に亡ぶ。

● 名は瑤。趙策に出づ ● 地を隣國に得てまた他邦に索めんと欲す、厭足する能はずば天下必ず恐れんと也 ● 命數、運命。命は天に受く、而してこれに安ずる能はざれば天は其驕盈を惡んで以て之を奪はんと也 ● 此れ蘇秦讀む所の周書陰符といふ物かといふ、老子に此句見ゆ、蓋しこれより出でし也 ● 的也、まとの星也。魏地を予へずば智伯必ず兵を加へん、是れ智氏の兵のまとなる譯也 ● 共に趙の地名 ● 城内より韓魏に應ず

國。爲智氏質乎。君曰。善。乃與之。萬家之邑一。智伯大說。因索蔡。臯梁於趙。趙弗與。因圍晉陽。韓魏反於外。趙氏應之於內。智氏遂亡。

文侯

韓趙相難。韓索兵於魏。曰。願得借師以伐趙。魏文侯曰。寡人與趙兄弟。不敢從。趙又索兵。以攻韓。文侯曰。寡人與韓兄弟。不敢從。二國不得兵。怒而反。已乃知文侯以講於己也。皆朝魏。

韓趙相難す。韓、兵を魏に索めて曰く、「願はくは師を借りて以て趙を伐つを得ん」と。魏の文侯曰く、「寡人趙と兄弟たり」と。敢て従はず。趙又兵を索めて以て韓を攻む。文侯曰く、「寡人韓と兄弟たり」と。敢て従はず。二國、兵を得ず、怒つて反る。已にして乃ち文侯の以て己に講ずるを知るや、皆魏に朝せり。

● 兵を借ふ ● 援兵を依頼す ● 軍勢 ● 講は和親也。韓にては文侯趙に告ぐるの言を聞き、趙にては其韓に告ぐるの言を聞き、二國各自魏の己に和親するを知りて之に朝する也

樂羊爲魏將。而攻中山。其子在中山。中山之君烹其子而遺之羹。樂羊坐於幕

樂羊、魏の將と爲りて中山を攻む。其子中山に在り。中山の君其子を烹て之に羹を遺る。樂羊、幕下に坐して之を啜り、一杯を盡す。文侯、視師贊に謂つて曰く、樂羊、我を以ての故に、其子の肉を食ふ」と。贊對へて曰く、「其子の肉尙

下而啜之。盡一杯。文侯謂視師贊曰。樂羊以我之故。食其子之肉。贊對曰。其子

ほ之を食ふ。其れ誰をか食はざらん」と。樂羊既に中山を罷む。文侯其功を賞して其心を疑へり。

之內尙食之。其誰不食。樂羊既罷中山。文侯賞其功。而疑其心。

● 樂羊に其子を煮たる汁を遺る ● 我が軍勢を率めて中山を伐ちたるが爲めに ● 中山を攻める事をやめて引上ぐ

西門豹爲鄴令。而辭乎魏文侯。文侯曰。子往矣。必就子之功。而威子之名。西門豹曰。敢問就功成名。亦有術乎。文侯曰。有之。夫鄉邑老者。而先受

西門豹、鄴の令と爲つて、魏の文侯に辭す。文侯曰く、「子往け。必ず子の功を就して、子の名を成せ。」西門豹曰く、「敢て問ふ、功を就し名を成す、亦術ありや。」文侯曰く、「之あり。夫れ郷邑の老者、而くは先づ坐を受くるの士には、子入つて其賢良の士を問うて、之に師事せよ。其の好みて人の美を掩ひて、人の醜を揚ぐる者を求めて、之を參驗せよ。夫れ物は多く相類して非也。黽の幼きや、禾に似たり。驢牛の黄なるは虎に似たり。白骨は象かと疑ひ、武夫は玉に似たり。此れ皆之に似て非なる者也」と。

坐之士。子入而問其賢。其之士。而師事之。求其好掩人之美。而揚人之醜。者。而參驗之。夫物多相類而非也。幽莠之幼也。似禾。驢牛之黃也。似虎。白骨疑象。武夫類玉。此皆似之而非者也。

- 暇請ひす
- 成して
- 而は若の如く讀む。又は才徳高くして衆に輝重せらるゝ人
- 其室に就きて
- 才徳高き人と對比研究せよ
- 生氣盛なるはぐさ(苗に似たる草)
- 粟苗、稻の苗
- まだら牛、黒牛の黄雜毛なるもの、或は單に黒牛の稱
- 象牙
- 磁鉄に同じ、玉に似たる石

文侯與虞人期獵。是日飲酒。樂。天雨。文侯將出。左右曰。今日飲酒。樂。天又雨。公將焉之。文侯曰。吾與虞人期獵。雖樂。豈可不一會期哉。乃往。身自罷之。魏於是乎始強。

文侯、虞人と獵を期す。是の日酒を飲んで樂しむ。天雨。文侯將に出でんとす。左右曰く、「今日酒を飲んで樂しみ、天又雨。公將に焉くにか之かんとする。」文侯曰く、「吾虞人と獵を期す。樂しむと雖も豈一たび期に會せざる可けんや」と。乃ち往き、身自ら之を罷む。魏是に於てか始めて強し。

- 山深を掌り苑園を守る吏。期すは日を定め約束するをいふ
- 一たび往いて其期する所に會せざるべからず、即ち其約束を實行せざるを得ず
- 自身にて其日の獵を取消したり

魏文侯與田子方飲酒而稱樂。文侯曰。鍾聲不比乎。左高。田子方笑。文侯曰。奚聞之。君明則樂。官不明則樂。音。今君審於聲。臣恐君之聾於官也。文侯曰。善。敬聞命。

魏の文侯、田子方と酒を飲んで樂を稱ぐ。文侯曰く、「鐘聲比せざるか、左高し」と。田子方笑ふ。文侯曰く、「奚をか笑ふ。」子方曰く、「臣之を聞く、君明なれば則ち官を樂しみ、君不明なれば則ち音を樂しむと。今君、聲に審かなり。臣、君の官に聾ならんを恐る。」文侯曰く、「善し。敬んで命を聞く。」

- 音樂を張る
- 和せざるか
- 樂に左右部あり、其左方の聲高しと也
- 官を治むるを樂しみ
- 音
- 音樂の調子

武侯

魏武侯與諸大夫浮於西河。稱曰。河山之險。豈不亦

魏の武侯、諸大夫と西河に浮び、稱して曰く、「河山の險、豈に亦信に固からずや」と。王鐘侍坐せり。曰く、「此れ晉國の強き所以也。若し善く之れを脩めば、則ち霸王の業具はらん」と。吳起對へて曰く、「吾が君の言は、國を危うするの道

信固哉。王鐘侍坐。曰。此晉國之所強也。若善脩之。則霸王之業具矣。吳起對曰。吾君之言。危國之道也。而子又附之。是重危也。武侯忿然曰。子之言有說乎。吳起對曰。河山之險。信不足保也。霸王之業。不從此也。昔者三苗之居。左彭蠡之波。右洞庭之水。汶山在

也。而るに子又之れに附く。是れ危きを重ぬる也」と。武侯忿然として曰く、「子の言、説あるか。」吳起對へて曰く、「河山の險は信に保つに足らず。霸王の業は此よりせざる也。昔し三苗の居は、彭蠡の波を左にし、洞庭の水を右にし、汶山其南に在りて、衡山其北に在り。此險を恃めるも、政を爲す善からずして、禹之を放逐せり。夫の夏桀の國は天門の陰を左にして、天谿の陽を右にし、盧壘其北に在り、伊・洛其南に出づ。此險ありしも、然も政を爲す善からずして、湯之を伐てり。殷紂の國は、孟門を左にして、漳・釜を右にし、前には河を帶び、後には山を被むる。此險ありしも、然も政を爲す善からずして、武王之を伐てり。且つ君親ら臣を從へて勝つて城を降す。城高からざるに非ず、人民衆からざるに非ざるも、然かも并すを得可きものは、政惡しきが故なり。是に従つて之を觀れば、地形の險阻は、爰ぞ以て霸王たるに足たらんや。」武侯曰く、「善し。吾乃ち今日聖人の言を聞けり。西河の政は、専ら之を子に委ねん」と。

● 船を浮べて遊覽す ● 完成せん ● 附益す、附け加へて言ふ ● 怒る貌 ● 汶は浜に通ず ● 夏の
● 魏王 ● 天門山の北方 ● 河濟也、陽は北をいふ。山は北を陰とし、河は北を陽とす ● 地名 ● 二つの
水の名 ● 殷の紂王 ● 山の名 ● 二つの水の名

其南。而衡山在其北。恃此險也。爲政不善。而禹放逐之。夫夏桀之國。左天門之陰。而右天谿之陽。盧壘在其北。伊洛出其南。有此險也。然爲政不善。而湯伐之。殷紂之國。左孟門。而右漳釜。前帶河。後被山。有此險也。然爲政不善。而武王伐之。且君親從臣。而勝降城。城非不高也。人民非不衆也。然而可得并者。政惡故也。從是觀之。地形險阻。奚足以霸王矣。武侯曰。善。吾乃今日聞聖人之言也。西河之政。專委之子矣。

惠王

魏公叔痤爲魏將。而與韓趙戰。滄北禽樂祚。魏王說郊迎。以賞田百萬。祿之。公

魏の公叔痤、魏の將として、韓・趙と滄北に戦ひ、樂祚を禽にす。魏王說んで郊迎し、賞田百萬を以て之を祿す。公叔痤反り走つて、再拜し辭して曰く、「夫れ士卒をして崩れず、直にして倚らず、揀撓して避けざらしむるものは、此れ吳起の餘教也。臣爲す能はず。前に壘形の險阻を脈し、利害の備を決し、三

叔痤反走。再拜辭曰。夫使士卒不崩。直而不倚。揀掩而不避者。此吳起餘教也。臣不能爲也。前脈壘形之險阻。決利害之備。使三軍之士不迷惑。者。巴寧。饗之力也。縣實罰於前。使昭然信之。於後者。王之明法也。見敵之可擊也。鼓之不敢怠倦者。臣也。王特爲

軍の士をして迷惑せざらしむるものは、巴寧・饗襄の力也。賞罰を前に懸け、民をして昭然として之を後に信ぜしむるものは、王の明法也。敵の撃つ可きを見るや、之を鼓して敢て怠倦せざる者は臣也。王特に臣の右手の倦まざりしが爲めに臣を賞せば可也。若し臣の功有るを以てせば、臣何の力か之あらん。王曰く、「善し」と。是に於て吳起の後を索めて、之に田二十萬を賜を、巴寧・饗襄には田各十萬。王曰く、「公叔は豈に長者に非ずや。既に寡人の爲めに強敵に勝ち、又賢者の後を遺れず、能士の迹を掩はず。公叔何ぞ益す無かる可けんや」と。故に又田四十萬を與へ、之を百萬の上に加へて、百四十萬ならしむ。故に老子の曰く、「聖人は積むこと無く、盡く以て人の爲めにして、己愈々有り、既く以て人に與へて、己愈々多し」と。公叔之に當る。

● 涪水の北 ● 趙將 ● 親しく郊外に出迎へ ● 隊伍亂れず ● 姿勢直立して傾かず ● 敵兵を擊亂して其強を避けず ● 吳起が以前に訓練をなしたる其御法也 ● 前には豫めの意。半は地也。脈は察しの意 ● 漢音はベイコク也、姑く通用に従つて振假名す、まよひまどふ ● 二人の名 ● あきらか ● 鼓を以て

臣之右手不
倦賞臣可也。

若以臣之有功。臣何力之有乎。王曰。善。於是索吳起之後。賜之田二十萬。巴寧。饗襄。田各十萬。王曰。公叔豈非長者哉。既爲寡人。勝強敵矣。又不遺賢者之後。不捨能士之迹。公叔何可無益乎。故又與田四十萬。加之百萬之上。使百四十萬。故老子曰。聖人無積。盡以爲人。己愈有。既以與人。己愈多。公叔當之矣。

進撃を命ずる也

● 右手に揮(鼓のバチ)を取る、故にいふ

● 子孫

● 徳高き君子

魏公叔痤病。惠王往問之。曰。公叔病。即不可諱。將奈社稷何。公叔對曰。痤有子。願王以國事聽之也。爲弗能聽。勿使出境。王弗應。出而謂左右曰。豈不悲哉。

魏の公叔痤病む。惠王往いて之を問うて曰く、「公叔、病、即し諱む可らずんば、將に社稷を奈何せんとする。」公叔痤對へて曰く、「座に御庶子公孫鞅あり。願はくは王、國事を以て之に聽け。爲し聽く能はずんば、境を出でしむる勿れ」と。王應へず。出で、左右に謂つて曰く、「豈に悲しからずや。公叔の賢を以てして、寡人に必ず國事を以て鞅に聽けと謂ふ。亦悖らずや」と。公叔痤死す。公孫鞅之を聞いて出奔し、西、秦に之く。考公受けて之を用ふ。秦果して日に以て強く、魏、日に以て削らる。此れ公叔の悖れるに非ず、惠王の悖れる也。悖れ

以公叔之賢。而謂寡人必以國事聽之。公叔死。公孫鞅聞之出奔。西之秦。考公受而用之。秦果日以強。魏日以削。此非公叔之悖也。惠王悖也。悖者之患。固

以公叔之賢。而謂寡人必以國事聽之。公叔死。公孫鞅聞之出奔。西之秦。考公受而用之。秦果日以強。魏日以削。此非公叔之悖也。惠王悖也。悖者之患。固

若しもの事があつたらば。死は人のいみじくも能はざる所なれば、死を翻うて不可諱といふをらん。官名。其の家臣ならん。若也。國外へ出す勿れ。王は公孫鞅の人物を知らず、其家臣を翻めたるの故を以て斯くいよ也。

秦韓圍梁。燕趙救之。謂山陽君曰。秦戰而勝三國。秦必過周韓而有梁。三國而勝秦。三國之力。雖不足以攻秦。足以救鄭。計者不如下搆三國攻秦。

秦・韓、梁を圍み、燕・趙之を救ふ。山陽君に謂つて曰く、「秦戰つて三國に勝たば、秦必ず周・韓を過ぎて梁を有たん。三國にして秦に勝たば、三國の力、以て秦を攻むるに足らずと雖も、以て鄭を抜くに足らん。計るに、三國と搆じて秦を攻むるに如かず」と。

蓋し魏の人にて當時韓に在りて事を用ひし者。客之に向つて謂ふ也。梁を搆。搆に作るべし、謂和するを謂ふ也。

龐葱與太子質於邯鄲。謂魏王曰。今一人言市有虎。王信之乎。王曰。否。二人言市有虎。王信之乎。王曰。寡人之疑之矣。三人言市有虎。王信之乎。王曰。寡人信之矣。龐葱曰。夫市之無虎。明明矣。然而三人言而成虎。今邯鄲去大梁也遠。於市而議。臣者過於三人矣。願王察之矣。王曰。寡人自爲知。於是辭行。而讒言先至。後太子罷質。果不得見。

龐葱、太子と邯鄲に質たり。魏王に謂つて曰く、「今一人、市に虎ありと言はば、王之を信ぜんか。」王曰く、「否。」二人、市に虎ありと言はば、王之を信ぜんか。」王曰く、「寡人之を疑はん。」三人、市に虎ありと言はば、王之を信ぜんか。」王曰く、「寡人之を信ぜん。」龐葱曰く、「夫れ市の虎なきや明かなり。然り而して三人言ひて虎を成す。今邯鄲は大梁を去るや、市よりも遠くして、而して臣を議する者は三人に過ぐ。願はくは王之を察せよ。」王曰く、「寡人自ら知るを爲す」と。是に於て辭して行く、而るに讒言先づ至る。後、太子質を罷む。果して見ゆるを得ず。

趙に人質となる。三人成市虎といふ懸詭の典故にて、讒言の入り易き也。魏の都。人を信ぜず。身は途に在りて先方に行きつかぬ内に讒言は早くも王に聴かれたり。共に趙に行きたる太子は質を罷めて趙に歸りたるに、龐葱は果して魏王に疑はれて見ゆるを得ざりき。

梁王魏嬰、諸侯を范臺に觴す。酒酣にして魯君に觴を舉げんことを請ふ。諸侯於范臺。酒酣。請魯君。魯君曰。昔者帝女令儀狄作酒而飲。進之禹。禹飲而甘之。遂疏儀狄。絕旨酒。曰。後世必有下以酒亡其國者。齊桓公夜半不寐。易牙乃煎熬燔炙。和之調五味。而進之。桓公食之而飽。至且。不覺。曰。後世必有下以味

梁王魏嬰、諸侯を范臺に觴す。酒酣にして魯君に觴を舉げんことを請ふ。魯君興つて席を避け、擇言して曰く、「昔し帝女、儀狄をして酒を作らしむ。而るに美なり。之を禹に進む。禹飲んで之を甘しとし、遂に儀狄を疏んじ、旨酒を絶つ。曰く『後世必ず酒を以て其の國を亡ぼす者あらん』と。齊の桓公夜半に不寐。易牙乃ち煎熬燔炙し、五味を和調して之を進む。桓公之を食して飽き、且に至るまで覺めず。曰く、『後世必ず味を以て其の國を亡ぼす者あらん』と。晉の文公、南之威を得て、三日朝を聽かず。遂に南之威を推して之を遠ざけて曰く、『後世必ず色を以て其の國を亡ぼす者あらん』と。楚王、強臺に登つて崩山を望む、江を左にして湖を右にし、以て臨んで彷徨し、其樂、死を忘る。遂に強臺に盟つて登らず。曰く、『後世必ず高臺陂池を以て其の國を亡ぼす者あらん』と。今主君の尊は儀狄の酒也。主君の味は易牙の調也。白台を左にして閭須を右にするは南之威の美也。夾林を前にして蘭臺を後にするは強臺の樂也。此に一

あるも、以て其國を亡ぼすに足る。今主君は此四者を兼ね。戒なかる可けんや」と。梁王、「善し」と稱して相屬す。

- 孟子に梁惠王といふものこれ也
- 宮の名といふ。そこにて酒宴を張る
- さかづき也。また盃をす、むる也
- 善美の言を爲して
- 堯の女といひ、或は「女」の字衍といふ
- うまし
- うまき酒
- 食ひ足らず思ふ意。物はしくなる
- 汁を煮つめいり肉を焼きあぶりて
- 南威といふ美人。之は助語也
- 朝政
- 臺の名。臺は物見の高樓
- ゆきつもどりつす。一説に方皇に同じ、水の名といふ、その説に従へば「以て彷徨に臨む」と訓ずべし
- 深障を陂といひ、水を停むるを池といふ
- 樽酒
- 調理せるに異ならず
- 閭須と共に美人の名
- 再三稱歎す。正解は酒をす、むと解す

亡其國者。晉文公得南之威。三日不聽。朝。遂推南之威。而遠之。曰。後世必有下以色亡其國者。楚王登強臺。而望崩山。左江而右湖。以臨彷徨。其樂忘死。遂盟強臺。而弗登。曰。後世必有下以高臺陂池亡其國者。今主君之尊。儀狄之酒也。主君之味。易牙之調也。左白台而右閭須。南威之美也。前夾林而後蘭臺。強臺之樂也。有一于此。足以亡其國。今主君兼此四者。可無戒與。梁王稱善相屬。

魏惠王起二境內衆。將太子申而攻齊。客謂公子理之。傅曰。何不令下

魏の惠王、境内の衆を起し、太子申を將として齊を攻む。客、公子理の傅に謂つて曰く、「何ぞ公子をして王太后に泣いて太子の行くを止めしめざる。事成らば則ち徳を樹て、成らざれば則ち王たらん。太子年少く、兵に習はず。田盼は宿將

公子泣王太子
后止太子之
行事成則樹
德不成則爲
王矣太子年
少不習於兵
田盼宿將也
而孫子善用
兵戰必禽不
不勝必禽公子
王也

にして、孫子善く兵を用ふ。戦必ず勝たざらん。勝たずば必ず禽にせられん。公子之を王に争ひ、王、公子に聽かば、公子必ず封せられん。公子に聽かずば、太子必ず敗れん。敗れば公子必ず立たん。立たば必ず王たらん」と。

● 國內の軍勢 ● 太子の弟。傳は守役 ● 太子の母后に哀願して ● 恩をきする事になり ● 用ひられずして太子出征し、戰敗して還らば則ち公子王とならん ● 田盼と孫臏とは共に齊の將、宿將は老將 ● 立ちて太子とならん

魏太子自將。
過宋外黃。外
黃徐子曰。臣
有二百戰百勝
之術。太子能
聽臣乎。太子
曰。願聞之。客

魏の太子自ら將として宋の外黃を過ぐ。外黃の徐子曰く、「臣、百戰百勝の術あり。太子能く臣に聽かんか。」太子曰く、「願はくは之を聞かん。」客曰く、「固より之を效さんを願ふ。今太子自ら將として齊を攻む。大に勝つて莒を并すとも、則ち富、魏を有つに過ぎず、而して貴、王たるに益さじ。若し戰つて勝

曰。固願效之。
今太子自將
攻齊。大勝并
莒。則富不遇
有魏。而貴不
益爲王。若戰
不勝。則萬世
無魏。此臣之
百戰百勝之
術也。太子曰。
諾。請必從公
之言。而還。客
曰。太子雖欲
還。不得矣。彼
利太子之戰
攻。而欲滿其
意者衆。太子
雖欲還。恐不
得矣。太子上
車。請還。其
御曰。將出而
還。與北同。不
如遂行。遂行
與齊人戰。卒
不得魏。

たずんば、則ち萬世魏なからん。此れ臣が百戰百勝の術也。」太子曰く、「諾、請ふ必ず公の言に従つて還らん。」客曰く、「太子還らんと欲すと雖も得ざらん。彼の、太子の戰攻を利して、其意を滿さんと欲する者衆し。太子還らんと欲すと雖も、恐らくは得ざらん」と。太子、車に上りて還らんを請ふ。其の御曰く、「將出で、還るは北ぐると同じ。遂に行かんにかかず」と。遂に行く。齊人と戰つて死し、卒に魏を得ず。

● 太子申 ● 城の名 ● 徐子をいふ ● 王たるの外加ふるなし ● 太子滅び、永遠に魏を我有としてたもつ能はじ ● 戰はずして軍を還せば戰敗の患なくして終に能く魏を有たん、故に之を百戰百勝の術といふ也 ● 魏の戰士をいふ。斯くいふは、如何に之を止むるものあるも一切顧みずして還るべしとの意を太子に告ぐる也 ● 御者 ● 敗北と同罪也

齊魏戰於馬

齊・魏、馬陵に戰ふ。齊大いに魏に勝ち、太子申を殺し、十萬の軍を覆へす。

陵。齊大勝。魏殺太子申。覆十萬之軍。魏王召惠施而告之曰。夫齊寡人之難也。怨之至死不忘。國雖小。吾常欲悉起兵而攻之。何如。對曰。不可。臣聞之。王者得度而罰者。知計。今王所以告臣者。疏於度。而遠於計。王固先屬怨於趙。而後與齊戰。今戰不勝。國無守戰。

魏王、惠施を召して之に告げて曰く、「夫れ齊は寡人の難也。之を怨んで死に至るまで忘れじ。國小と雖も、吾常に悉く兵を起して之を攻めんと欲す、何如。」對へて曰く、「不可なり。臣之を聞く、王者は度を得、而して霸者は計を知ると。今王の臣に告ぐる所以のものは、度に疏くして、計に遠し。王固より先づ怨を趙に屬して、後、齊と戦ふ。今戦ひ勝たず、國、守戰の備なし。王又悉く起して齊を攻めんと欲す。此れ臣の謂ふ所に非ず。王若し齊に報ゆるを欲せんか、則ち因て服を變じ節を折つて齊に朝せんに如かず。楚王必ず怒らん。王、人を游ばしめて其鬪を合せば、則ち楚必ず齊を伐たん。休楚を以て罷齊を伐たば、則ち必ず楚の禽と爲らん。是れ王、楚を以て齊を毀る也。」魏王曰く、「善し」と。乃ち人をして齊に報ぜしむらく、「願はくは臣畜として朝せん」と。田嬰許諾す。張丑曰く、「不可なり。戰つて魏に勝たずして朝禮を得、魏と和して楚に下さば、此れ以て大いに勝つ可し。今戦ひ魏に勝ち、十萬の軍を覆へして、太子申を禽に

之備。王又欲悉起而攻齊。此非臣之所謂也。王若欲報齊乎。則不如因變服折節而朝齊。楚王必怒矣。王游人而合其鬪。則楚必伐齊。以休楚而伐之。則必爲楚禽矣。是王以楚毀齊也。魏王曰。善。乃使人報於齊。願臣畜而朝。田嬰許諾。張丑曰。不可。戰不勝。魏而得朝禮。與魏和而下楚。此可。以大勝也。今戰勝魏。覆十萬之軍。而禽太子申。臣萬乘之魏。而畢秦楚。此其暴戾定矣。且楚王之爲人也。好用兵。而甚務名。終爲齊患。必楚也。田嬰不聽。遂內魏王。而與之並朝。齊侯再三。趙氏醜之。楚王怒。自將而伐齊。趙應之。大敗齊於徐州。

し、萬乘の魏を臣として、秦・楚を卑しむ。此れ其暴戾定まる。且つ楚王の人と爲りや、兵を用ふるを好んで甚だ名を務む。終に齊の患を爲さん者は、必ず楚ならん」と。田嬰聽かず。遂に魏王を内れて、之れと並んで齊侯に朝する再三なり。趙氏之を醜む。楚王怒り、自ら將として齊を伐つ。趙之に應じて、大いに齊を徐州に敗る。

- 法度。一説に亦計也、王者は計略を得て當らざるなく、霸者は計の可否を知ると解す
- 屬すは結ぶの意。
- 魏趙を伐ち、齊、趙を救ひて之と戦ふを以て斯くいふ也
- 上文に、度を得、計を知るといふ是也
- 敗軍の事を縁由として、人君の服を變易し、人君の節を屈折して自ら卑うして齊に朝せよ、さすれば楚王は必ず齊の強弱を察らん
- 人をして楚に游説して以て齊と合戦せしめば
- 休養平安の楚を以て戰ひ疲れたる齊を伐たば
- 大王の畜ひ養はる、臣としての意ならん
- 齊魏和平して諸侯相朝するの禮を得
- 兵を下さば
- 大國たる
- 見下げる
- 乘楚の怒り悻らん事必定也
- 名義を立つる事を務む
- 齊王の誤か

惠施爲齊魏交。令太子鳴爲質於齊。王欲見之。朱倉謂王曰。何不稱病。臣請說。魏王曰。魏王之年長矣。今有疾。公不如下歸太子。以德之。不然。公子高在楚。楚將內而立之。是齊抱空質而行不義也。

惠施、齊・魏の交を爲し、太子鳴をして齊に質たらしむ。王之を見んと欲す。朱倉、王に謂つて曰く、「何ぞ病と稱せざる。臣請ふ嬰子に説いて曰はん、『魏王は年長じ、今疾あり。公、太子を歸して以て之に徳せんに如かず。然らずんば、公子高、楚に在り、楚將に内れて之を立てんとす。之れ齊、空質を抱いて不義を行ふ也。』と」

● 魏王也。之上り前の文は往事を説き、これはそれより程経て後なる今の事を説く也。● 田嬰 ● 魏に内れて也。● 楚が高を納れて之を立つれば齊の抱ける人質は何等權威なきものとなり、又魏王病むといふにも拘らず、太子を留めて歸さざるはこれ不義也。

襄王

魏の惠王死す。葬日あり。天大いに雪をふらして、牛の目に至り、城郭を壞

魏惠王死。葬

有日矣。大大雨雪。至於牛目。壞城郭。且下爲棧道。而葬。群臣多下諫。太子者曰。雪甚如此。而喪行。民必甚病之。官費又恐不給。請弛期。更日。太子曰。爲人子。而以下民勞。與官費用之。故而不行。先王之喪。不義也。子勿復言。群臣皆不敢言。而以告犀首。犀首曰。吾未有以言

つ。且に棧道を爲つて葬むらんとす。羣臣、太子を諫むる者衆し。曰く、「雪甚だしきこと此の如くにして喪行かば、民必ず甚だ之を病まん。官費又給せざらんを恐る。請ふ期を弛べて日を更へん。」太子曰く、「人の子として、民勞と官費用との故を以て、先王の喪を行はざるは不義なり。子復た言ふ勿れ」と。羣臣皆敢て言はずして、以て犀首に告ぐ。犀首曰く、「吾未だ以て之を言ふ有らず。是れ其れ唯だ惠公か。請ふ惠公に告げん」と。惠公曰く、「諾」と。駕して太子に見えて曰く、「葬日あり」と。太子曰く、「然り。」惠公曰く、「昔、王季歴、楚山の尾に葬むらる。隤水其墓を齧み、棺の前和を見す。文王曰く、『嘻先君必ず一たび群臣百姓を見んと欲するか。故に隤水をして之を見さしむ』と。是に於て出して之が爲めに朝を張る。百姓皆之を見る。三日にして後更め葬むる。此れ文王の義也。今葬日ありて、雪甚だしく、牛の目に及ぶ。以て行き難し。太子、日に及ぶが爲めの故に、亟かに葬むらんと欲するに嫌なきを得んや。願はくは太子、日

陵舞陽新鄆。東有淮、潁、沂、黃、煮、鹽、海、鹽、無、疎、四、有、長、城、之、界。北、有、河、外、卷、衍、燕、酸、壘、壘、方、千、里。壘、名、雖、小、然、而、廬、田、廩、舍、曾、無、所、鄒、牧、牛、馬、之、塗、人、民、之、衆、車、馬、之、多、日、夜、行、不、休、已、無、以、異、於、三、軍、之、衆。臣、竊、料、之、大、王、之、國、不、下、於、楚。然、橫、人、諫、王。外、交、強、虎、狼、之、

も廬田廩舍曾て牛馬を芻牧する所の壘なし。人民の衆き、車馬の多き、日夜行いて休已せず。以て三軍の衆に異なる無し。臣竊かに之を料るに、大王の國、楚に下らじ。然れども、横人王を誑ひ、外、強虎狼の秦に交り、以て天下を侵し、卒かに國患あるも、其禍を被むらす。夫れ、強秦の勢を挾んで、以て内其主を劫かす。罪此に過ぎたるもの無し。且つ魏は天下の強國也。大王は天下の賢王也。今乃ち西面して秦に事へ、東藩と稱し、帝宮を築き、冠帯を受け、春秋を祠するに意あり。臣竊かに大王の爲めに之を愧づ。臣聞く、越王句踐は、散卒三千を以て、夫差を干遂に禽にし、武王は卒三千人、革車三百乗もて、紂を牧の野に斬ると。豈に其士卒衆からんや。誠に能く其威を振へば也。今竊かに聞く、大王の卒は、武力二十餘萬、蒼頭二十萬、奮擊二十萬、厮徒十萬、車六百乘、騎五千匹と。此れ其の越王句踐・武王に過ぐる遠し。今乃ち羣臣の説に劫かされて、秦に臣事せんと欲す。夫れ秦に事へば、必ず壘を割き質を效さん。故に

秦。以、侵、天、下。卒、有、國、患。不、被、其、禍。夫、挾、強、秦、之、勢。以、內、劫、其、主。罪、無、過、此、者。且、魏、天、下、之、強、國、也。大、王、天、下、之、賢、王、也。今、乃、有、意、西、面、而、事、秦。稱、東、藩。築、帝、宮。受、冠、帶。祠、中、春、秋。臣、竊、爲、大、王、愧、之。臣、聞、越、王、句、踐。以、散、卒、三、千。禽、夫、差。於、干、遂。武、王、卒、三、千。人。革、車、三、百。

兵未だ用ひずして國己に虧けん。凡そ羣臣の秦に事へよと言ふ者は、皆姦臣なり、忠臣に非ざる也。夫れ人の臣と爲り、其主の壘を割いて以て外に交はるを求め、一旦の功を偷取して、其後を顧みず、公家を破つて私門を成し、外強秦の勢を挾さんで、以て内其主を劫かし、以て地を割かんを求む。願はくは大王の之を熱察せんことを。周書に曰く、「綿綿を絶たずんば、蔓蔓を若何せん。毫毛拔かずんば、將に斧柯を成さんとす。前慮定まらずんば、後大患あらん。將に之を奈何せんとする」と。大王誠に能く臣に聽き、六國從親し、心を専らにし力を并せば、則ち強秦の患なからん。故に敝邑の趙王、使臣をして愚計を獻じ、明約を奉ぜしむ。大王の之を詔ぐるに在り。」魏王曰く、「寡人不肖にして、未だ嘗て明教を聞くを得ず。今主君、趙王の詔を以て之に詔ぐ。敬んで國を以て從はん。」

● 鴻溝、汝、淮、潁、沂は水の名、他は皆地名也 ● 廬は田間の小屋。廩は廬下の周屋。田

乘。斬紂於牧之野。豈其士卒衆哉。誠能振其威也。今竊聞大王之卒。武力二十餘萬。蒼頭二十萬。奮擊十萬。斷徒十萬。車六百乘。騎五千匹。此其過越王句踐。武王遠矣。今乃劫於群臣之說。而欲臣事秦。夫事秦必割地。以質。故兵未用。而國已虧矣。凡群臣之言事秦者。皆姦臣。非忠臣也。夫爲人臣。割其主之地。以求外交。偷取一旦之功。而不顧其後。破公家而成私門。外挾強秦之勢。以內劫其主。以求割地。願大王之熟察之也。周書曰。綿綿不絕。縵縵奈何。毫毛不拔。將成斧柯。前慮不定。後有大患。將奈之何。大王誠能聽臣。六國從親。專心并力。則必無強秦之患。故敝邑趙王使使臣獻愚計。奉中明約。在大王詔之。魏王曰。寡人不肖。未嘗得聞明教。今主君以趙王之詔。詔之。敬以國從。

張儀欲并相

張儀、秦・魏に并せ相たらんと欲す。故に魏王に謂つて曰く、「儀請ふ秦を以て

家の小屋大家多く立ち積きての意 ① 已は止也 ② 行人多くして軍陣の如しと也 ③ 富強楚の下に在らば ④ 連横を主唱する者 ⑤ 誘也 ⑥ 魏に秦の患有るも横人は其禍に對して責任を負はず ⑦ 秦の爲めに宮を築きて其巡幸に備へ、秦の冠帶の制度を受け、春秋貢奉以て秦祭を助く ⑧ 罷弊して用ふるに耐へざる卒 ⑨ 兵車 ⑩ 殷材 ⑪ 武力に秀でたる者 ⑫ 青巾にて頭を裹ひ、以て衆に異にする者 ⑬ 軍中より特に重進突撃する勇士を選抜した者 ⑭ 烹炊所養等の雜役に服する卒 ⑮ 偷は苟且也。後は野となれ山となれ鬼に角こゝて自分が手柄をあげればよいとして也 ⑯ 私家の富を成す ⑰ 蔓草の根も微細なる内に切取らざれば延びひろがつて後には手のつけやうなし ⑱ 樹木も萌芽の内に抜かなければ斧を用ふるに至らん。斧柯は斧の柄也 ⑲ 合従和親し ⑳ 從約の成否は大王の一言に在り ㉑ 大夫の稱。獻秦を謂ふ也

秦魏。故謂魏王曰。儀請以秦攻三川。王以其間約南陽。韓氏亡。史厭謂趙獻曰。公何不以楚佐儀。求相之於魏。韓恐亡。必南走楚。儀兼相秦魏。則公亦必并相楚韓也。

魏王將相張儀。犀首弗利。故令三人謂韓公叔曰。張儀已合秦魏矣。其言曰。魏攻三南陽。秦攻三川。韓氏必亡。

三川を攻めん。王其間を以て南陽を約せよ。韓氏亡びん」と。史厭、趙獻に謂つて曰く、「公何ぞ楚を以て儀を佐けて、之を魏に相とするを求めざる。韓、亡びんを恐れれば、必ず南楚に走らん。儀秦・魏に兼ね相たらば、則ち公亦必らず楚・韓に并せ相たらん」と。

① 南陽と共に韓の地 ② 兼に役て、さすれば ③ 史厭は未詳。趙獻は楚の臣ならんといふ ④ 張儀 ⑤ 韓の楚と合ふを謂ふ

魏王將に張儀を相とせんとす。犀首利とせず。故に人をして韓の公叔に謂はしめて曰く、「張儀已に秦・魏を合す。其言に曰く、「魏、南陽を攻め、秦、三川を攻めば、韓氏必ず亡びん」と。且つ魏王の張子を貴ぶ所以は、地を得んと欲して也。則ち韓の南陽舉げられん。子盍んぞ少しく委して以て衍の功とせざる。則ち秦・魏の交廢す可し。此の如くならば、則ち魏必ず秦を圖つて儀を棄て、韓

且魏王所以得地也。則韓子蓋少委焉以爲之。功則秦魏之交可廢矣。如此則魏必圖秦而棄儀。收韓而相衍。公叔以爲信。因而委之犀首。以爲功。果相魏。

● 少しく地を衍(公孫衍即ち犀首)に委ねて以て其功と爲せば、魏は勞せずして地を得、必ず悦んで衍を賞ばん、而して秦魏の交は廢すべし、さすれば魏は必ず秦を伐たんと圖りて、張儀を相とせず、韓と同盟して衍を相とせんと也 ● 衍が也

楚許魏六城。與之伐齊。而存燕。張儀欲敗之。謂魏王曰。齊畏三國之合也。必反之。燕壘以下楚。楚必聽之。而不與魏六城。是王失請於楚。魏に六城を許し、之と與に齊を伐つて燕を存せんとす。張儀之を敗らんと欲し、魏王に謂つて曰く、「齊、三國の合せんを畏るゝや、必ず燕の壘を反して以て楚に下らん。楚必ず之を聞かん、而らば魏に六城を與へじ。是れ王、謀を楚に失して、怨を齊・秦に樹つるなり。齊遂に趙を伐ち、乘丘を取り、侵地を收めば、虛・頓丘危く、楚、南陽・九夷・内沛を破らば、許・鄆陵危からん。王の得る所は新觀なり。而るに宋・衛に道塗して、爲めに制せられん。事敗れば趙の爲めに

楚。而樹怨於齊。秦也。齊遂伐趙。取乘丘。收侵地。虛頓丘危。楚破南陽。九夷内沛。許鄆陵危。王之所得者。新觀也。而道塗宋衛。爲制事。收爲趙。驅事成功。縣宋衛。魏王弗聽也。張儀告公仲。令以饋故。賞韓王。以近河外。魏王懼。問張子。張子曰。秦欲救齊。韓欲攻南陽。秦

驅られ、事成らば、功、宋・衛に懸らん」と。魏王聽かず。張儀公仲に告げ、饑を以ての故に、韓王に賞むるに近河外を以てせしむ。魏王懼れて張子に問ふ。張子曰く、「秦、齊を救はんと欲し、韓、南陽を攻めんと欲す。秦・韓の合して南陽を攻めんと欲するは、異なし、且に遇を以て王をトせんとす。王、秦を遇せずば、韓のトや決せん」と。魏王遂に秦を尙遇し、韓を信じ、魏を廣め、趙を救ひ、楚人の邊を草下に斥く。齊を伐つ事遂に敗る。

● 齊が燕を破りたる故、齊を伐ちて燕を存せんとする也 ● 楚魏趙。一説には楚魏趙 ● 楚に卑下して其力を恃まん ● 楚の六城を得んと欲して之を得ず ● 齊が侵したる趙の地を沒收せばの義か ● 虛、頓丘、許、鄆陵は皆魏の地、南陽、九夷、内沛は皆魏に近き地、即ち齊楚合は、魏の近地を伐ちて以て魏に迫らんと也 ● 以下諸説紛々、今諸説を參酌して試に之を解するに、「王の楚より得る所の地即ち楚が王に許す所の地は新觀なり、然るに魏より其地に行くには路宋衛を過ぎざるべからず、故に宋衛二國の制する所と爲らん、若し楚と謀りて其六城を得て齊を伐たんとするの事敗れば、趙の爲めに驅使せらるゝ事となり、若し其事成らば、楚は地を與ふとも、其功は宋衛に懸りて魏の自由には成らざるべし」との意にて、畢竟成敗共に益なきを謂ふ也 ● 韓の執政 ● 韓時に饑饉なり、故にそれを理由として民を近河外の地に移して粟に就かしむるやうに公仲をして韓王にすゝめしむ、

而見寡人也。請封子。因以魯侯之車迎之。

張儀欲下以魏合於秦。韓而攻中齊。楚惠施欲下以魏合於齊。楚以秦兵。人多爲張子於王所。惠子謂王曰。小事也。謂可者謂不可。不可者正半。況大事乎。以魏合於秦。韓而攻齊。楚大也。而王之群臣皆以爲不可。不知是其明耶。而群臣

張儀、魏を以て秦・韓に合して齊・楚を攻めんと欲し、惠施、魏を以て齊・楚に合して以て兵を案せんと欲す。人多く張子を王の所に爲く。惠子、王に謂つて曰く、「小事なるも可と謂ふ者不可と謂ふ者正に半す。況んや大事をや。魏を以て秦・韓に合して齊・楚を攻むるは大事也。而るに王の羣臣皆以て可と爲す。知らず是れ其の可とするや、是の如く其れ明かなるか、而して羣臣の智術や、是の如く其れ同じきか。是れ其の可とするや、未だ是の如く其れ明かならず、而して羣臣の智術や、又皆同じきにあらじ。是れ其れ半塞がるゝ有る也。所謂主を劫かす者は、其半を失ふ者也」と。

● 止めて時を待つ ● 爲は助也。人多く張子の爲めに其謀の利を王の前に陳説し、以て之を助け爲さんとす
● 其可なる事も明かならず、羣臣の智術も皆同じきに非ざれば、當然可否の説相半ばすべきに、皆張儀の説を助けて可といふは、其不可とする一半の者が押へ附けられ其説痛蔽せられて通ぜざる也、世に所謂威力にて君を押へ附

之智術也。如其同耶。是其明也。而未如

くるものは、其不可となす側の者をば押へ附け遠ざくるが故に、君としては臣の半數を失ふ譯になる也。今張儀は衆を挟む者なれば惠施儀を指して主を劫す者といひしならん

是其明也。而未如群臣之智術也。又非皆同一也。是有其半塞也。所謂劫主者。失其半二者也。

張儀以秦相而欲攻魏。雍沮謂張子曰。魏之所以相公者。以公相則國家安。而百姓無患。今公相而魏受兵。是魏計過也。齊楚攻魏。公必危矣。張子曰。然則奈何。雍沮曰。請令

張儀、秦を以て魏に相たり。齊・楚怒つて魏を攻めんと欲す。雍沮、張子に謂つて曰く、「魏の公を相とする所以は、公相たらば則ち國家安うして、百姓患なからんを以へばなり。今公相として、魏、兵を受く、是れ魏の計過てる也。齊・楚、魏を攻めば、公必ず危からん。」張子曰く、「然らば則ち奈何せん。」雍沮曰く、「請ふ齊・楚をして攻を解かしめん」と。雍沮、齊・楚の君に謂つて曰く、「王亦張儀の秦王に約せるを聞きしか。曰く、「王若し儀を魏に相とせば、齊・楚、儀を悪んで必ず魏を攻めん。魏戦つて勝たば、是れ齊・楚の兵折けて、儀固より魏を得ん。若し勝たずんば、魏必ず秦に事へて、以て其國を持し、必ず地を割いて以て王に賂はん。若し復た其敵を攻めんと欲すとも、以て秦に應ずるに足ら

齊楚解攻。雍
沮謂齊楚之
君曰。王亦聞
張儀之約。秦
王乎。曰。王若
相儀於魏。齊
楚惡儀。必攻
魏。魏戰而勝。
是齊楚之兵
折。而儀固得魏矣。若不勝。魏必事秦。以持其國。必割地以賂王。若欲復攻其敵。不足以應。秦。此儀之所。以與秦。王陰相結也。今儀相魏而攻之。是使儀之計當於秦也。非所以窮儀之道也。齊楚之王曰。善。乃遽解攻於魏。

- 秦の相にして兼て魏人
- 齊楚の兵を受くる也
- 魏に相たるを得ん
- 魏が齊楚に勝たざれば
- 保たんとし
- 復び齊楚が魏の疲弊に乗じて之を攻めんとすとも、秦之を救ふべきを以て、二國は秦に當るに足らじ
- 内々約束する
- 秦に取りて張儀の計策通りにならせるといふもの也

哀王

謂張儀。臣謂齊王曰。王不如下資韓朋。與之逐張儀於

張儀に謂へらく、「臣、齊王に謂つて曰はん、王、韓朋を資けて、之と與に張儀を魏より逐はんにかかす。魏をして因て犀首を相とせしめ、因て齊・魏を以て、

魏。魏因相犀首。因以齊魏廢韓朋。而相公叔。以伐秦。公仲聞之。必不入於齊。據公於魏。是公無患。

韓朋を廢して公叔を相とし、以て秦を伐たん」と。公仲之を聞かば、必ず齊に入らずして、公に魏に據らん。是れ公、患なきなり」と。

- 或人が
- 儀時に魏に相たり、韓の相韓朋(即ち公仲)之を逐はんと欲し、而して又公叔と善からざりしならん、故に客此言ある也
- 齊魏合同の力にて
- 韓の相とし
- 齊魏魏の三國聯合して
- 韓朋の字、韓明が客の斯く齊王に説く由を聞かば、己の失脚せんことを恐れ、齊と合して儀を逐ふ事なくして、反つて儀に取入りて魏に據らん、さすれば魏は儀の力にて韓と合する譯ゆゑ大いに儀を重んずべく、儀は逐はるゝ如き患なからんと也

陳軫爲秦使於齊。過魏求見犀首。犀首謝陳軫。陳軫曰。軫之所以來者事也。公不見軫。軫且行。不得待。異日矣。犀首乃見之。陳軫曰。公惡事乎。何

陳軫、秦の爲めに齊に使い、魏に過つて犀首を見んを求む。犀首、陳軫に謝す。陳軫曰く、「軫の來る所以は事也。公、軫を見ず、軫且に行かんとす。異日を待つを得ず」と。犀首乃ち之を見る。陳軫曰く、「公、事を惡むか。何爲れぞ飲食して事なきや。」犀首曰く、「衍、不肖にして、事を得る能はず。何ぞ敢て事を惡まん。」陳軫曰く、「請ふ天下の事を公に移さん。」犀首曰く、「奈何。」陳軫曰く、「魏王、李従をして、車百乘を以て楚に使せしむ。公以て其の中に居て之れ

爲飲食而無事。犀首曰。行不肖不能得事焉。何敢惡事。陳軫曰。請移天下之事於公。犀首曰。奈何。陳軫曰。魏王使李從以車百乘使於楚。公可下以居其中而疑之。公謂魏王曰。臣與燕趙故矣。數令人召臣也。曰。無事必來。今臣無事。請調而往。無久。旬五之期。王必無

を疑はしむ可し。公、魏王に謂つて曰へ、「臣、燕・趙と故あり、數々人をして臣を召さしむ。曰く、事なくば必ず來れと。今臣、事なし。請ふ調けて往かん。久しきこと無し、旬五の期なり」と。王必ず辭の以て公を止むる無けん。公行くを得ば、因て自ら廷に言つて曰へ、「臣、急に燕・趙に使す。急に車を約し行具を爲めん」と。犀首曰く、「諾」と。魏王に調す。魏王之を許す。即ち燕・趙に使すと明言す。諸侯の客、之を聞き、皆人をして其王に告げしめて曰く、「李從、車百乘を以て楚に使し、犀首、又車三十乘を以て燕・趙に使す」と。齊王之を聞いて天下の魏を得るに後れんを恐れ、事を以て犀首に屬す。犀首、齊の事を受く。魏王其行くを止む。燕・趙之を聞き、亦事を以て犀首に屬す。楚王之を聞いて曰く、「李從、寡人に約す。今燕・齊・趙皆事を以て犀首に因る。犀首必ず寡人を欲せん。寡人も之を欲す」と。乃ち李從に倍いて、事を以て犀首に因る。魏王曰く、「犀首を使はざりし所以は、以て不可と爲したればなり。今四國屬するに事を以てす。寡

人亦事を以て因らん」と。犀首遂に天下の事を主り、復た魏に相たり。

● 面會を謝絶す ● 貴公の行ふ所の事を告げんとて來れる也 ● 他日也。蓋し犀首が何れ他日を目に懸らんと言ひて斷りしならん ● 疑は厭惡即ちいみじきふ慮。公は國事に勞するを厭ふか、何とて徒に祿を食むのみにて事とする所なき ● 公孫衍、即ち犀首の名の自稱 ● 諸侯列國の政事を悉く移して犀首の身に歸する様に取計らはんと也 ● 趙人 ● 李從は出でて使し、行は其國に居る、因て諸侯をして之を疑はしむべしと也 ● 舊好 ● 取るべき國事もなく閑暇ならば ● 御暇を申し上げて ● 彼國に留るは十五日間位にて足らん ● 魏の朝廷、即ち表向きの役所也 ● 約は魏東也。車を解しの意 ● 朝廷百官の前にて明かに公言す ● 諸侯の客の魏に來り居る者也。其王に告ぐるはこれ只事ならじと疑ひたれば也 ● 魏と魏交を結ぶ ● 國事を犀首に依り頼す ● 初め事無きを以て行かん事を請ひたるに、今齊の事あり、魏王も亦之を見て將に之に國事を任ぜんとす、故に之を止むる也 ● 犀首に依託す ● 我が國事を彼に依託せん事を欲するならん

辭以止公。公得行。因自言於廷。曰。臣急使燕趙。急約車爲行具。犀首曰。諾。謂魏王。王許之。即明言使燕趙。諸侯客聞之。皆使人告其王。曰。李從以車百乘使楚。犀首又以車三十乘使燕趙。齊王聞之。恐後天下得魏。以事屬犀首。犀首受齊事。魏王止其行。燕趙聞之。亦以事屬犀首。楚王聞之。曰。李從約寡人。今燕齊趙皆以事因犀首。犀首必欲寡人。寡人欲之。乃倍李從。而以事因犀首。魏王曰。所以不使犀首者。以爲不可。今四國屬以事。寡人亦以事因焉。犀首遂主天下之事。復相魏。

齊王、將に燕・趙・楚の相を衛に見て、約して魏を外にせんとす。魏王懼る。其の魏を伐つを謀るを恐れ、公孫衍に告ぐ。公孫衍曰く、「王、臣に百金を與へよ。

衛約外也。魏王懼。恐其謀伐魏也。告公孫衍。公孫衍曰。王與臣百金。臣請敗之。王爲約車載百金。犀首期。齊王至之日。先以五十乘至衛。開齊行人以百金。以請先見齊王。乃得見。因久坐。安從容談。三國之相怨。謂齊王曰。王與三國約。外魏。魏使公孫衍來。今久與之談。是王謀三國也。齊王曰。魏王聞寡人來。使公孫子勞寡人。寡人無與之語也。三國之相不信齊王之遇。遇事遂敗。

魏令公孫衍

臣請ふ之。を敗らん」と。王爲めに車を約し百金を載す。犀首、齊王至るの日を期し、先づ五十乗を以て衛に至り、齊の行人に聞するに百金を以てし、以て先づ齊王に見ゆるを請ふ。乃ち見ゆるを得たり。因て久しく坐し、安に從容として談す。三國の相、怨んで齊王に謂つて曰く、「王、三國と與に魏を外にせんと約す。魏、公孫衍をして來らしむ。今久しく之と談す。是れ王、三國を謀るならん。」齊王曰く、「魏王、寡人の來るを聞き、公孫子をして寡人を勞はしむ。寡人、之と語る無しと。三國の相、齊王の遇を信ぜず。遇事遂に敗れぬ。」

● 魏外排斥 ● 其謀を破壊せん ● 待ちつけて ● 取次の役人。間は内々にて離道するをいふ ● 安閑也。一説には懇助にて「こゝに」と訓ず ● 我親しく物語りしたるに非ず、さのみ恐む勿れと辯解して三國の相を慰むる也 ● 會合 ● 衛に會合して魏を外にせんとしたる事

魏、公孫衍をして和を秦に請はしむ。蘇母恢之に教へて語りて曰く、「多く割

請和於秦。蘇母恢教之。語曰。無多割。曰。和成固有秦重。和以與王。遇。和不成。則後必莫能以魏合於秦者上矣。公孫衍爲魏將。與其相田需不善。季子爲衍謂梁王曰。王獨不見。夫服牛驂。乎。不可以行。百步。今王以行爲可使將。故用之也。而聽相之計。是

く無かれ。曰く、和成らば、固より、秦、和を重んじて、以て王と遇ふ有らん。和成らば、則ち後必ず能く魏を以て秦に合する者なからん」と。

● 多く地を割く無くして和せよ ● 其理由を申せば ● 多く地を割く無くして和成らば、これ秦和睦を重んずる也。必ず魏王と會見せん、若し多く地を割かざるが故に和成らば、これ秦は和を重んずるに非ずして地を賣る也。諸侯は秦の貪婪を惡み、必ず魏をして地を割きて以て秦に合せしむる者なく、魏を助けて秦に抵抗すべしと也

公孫衍、魏の將と爲つて、其相田需と善からず。季子、衍の爲めに梁王に謂つて曰く、「王獨り夫の牛を服とし、驥を驂とするを見ずや。以て百歩も行く可らず。今王、衍を以て將たらしむ可しと爲すが故に之を用ひ、而も相の計を聽く。是れ牛を服とし、驥を驂とする也。牛馬俱に死して、其功を成す能はじ。王の國必ず傷れん。願はくは王之を察せよ」と。

● 魏王 ● 車衡中の兩馬を服といひ、其外側の兩馬を驂といふ。牛と驥(駿馬)とは性質なり、遲速の差甚し、之を同車に並び駕すれば、到底車を行るべからず ● 田需

服牛駿騶也。牛馬俱死。而不能成其功。王之國必傷矣。願王察之。

犀首田盼欲得齊魏之兵以伐趙。梁君與田侯不欲。犀首曰。請國出五萬人。不

犀首・田盼、齊・魏の兵を得て、以て趙を伐たんと欲す。梁君と田侯と與に欲せず。犀首曰く、「請ふ國五萬人を出さば、五月を過ぎずして趙破れん。」田盼曰く、「夫れ輕しく其兵を用ふる者は、其の國危かり易く、易く其計を用ふる者は、其身窮し易し。公今趙を破らんと言ふ、甚だ易し。恐らくは後咎あらん。」犀首曰く、「公の不慧なるや、夫の二君は固より己に欲せず。今公又難きを言うて之を懼す。是れ趙伐たずして、二士の謀困まん。且つ公直だ易きを言ふも、事已に去らん。夫れ難を構へて兵結ばず、田侯・梁君其の危きを見、又安くんぞ敢て卒を釋て、我に予へざらんや。」田盼曰く、「善し」と。遂に兩君に勸めて犀首に聽かしむ。犀首・田盼遂に齊・魏の兵を得たり。兵未だ境を出でず。梁君・田侯其至つて戦ひ敗れんを恐れ、悉く兵を起して之に従ひ、大いに趙氏を敗る。

難以懼之。是趙不伐。而二士之謀困也。且公直言易。而事已去矣。夫構難而兵結。田侯梁君見其危。又安敢釋卒。不我予乎。田盼曰。善。遂勸兩君聽犀首。犀首田盼遂得齊魏之兵。兵未出境。梁君田侯恐其至而戰敗也。悉起兵從之。大敗趙氏。

● 魏王と齊侯とが其説を用ふるを欲せず ● 愚なるや ● 齊魏の二君 ● 共々に趙を伐つを欲せず ● 兩王を懼れしむ ● 我々二人 ● 國君長は謀困しむの後、直だ易きを言ふも、而も事機已に去りて復た用ふべからじの義と解し、一説には前文に「易危」「易窮」といへる其言葉を指していふと解す ● 一旦趙と戰端を開きて仲々ちのあかぬ時は ● 卒は二士の帥ある卒。釋つは舎にて見殺しにする意、二君が卒を見殺しにして我我に援兵を與へぬといふごとき事あらんや、必ず二君は其危きを見て援兵を與ふるに相違なし ● 趙に至つて

犀首見梁君曰。臣盡力。調智。欲以爲王。廣土取尊名。田需從中。敗臣。王又聽之。是臣終無成。功也。需亡。臣將侍。需侍。臣請亡。王曰。需

犀首、梁君に見えて曰く、「臣、力を盡し智を竭して、以て王の爲めに土を廣め尊名を取らんと欲す。田需、中より臣を敗る。王又之を聽く。是れ臣終に功を成すなし。需亡せば臣將侍せん、需侍せば臣請ふ亡せん。」王曰く、「需は寡人の股掌の臣也。子の便ならざるが爲めに、之を殺し之を亡せば、之を外にしては母に天下に何とか謂はん。之を内にしては羣臣を若何ともする無けん。今吾、子の爲めに之を外にし、敢て子の事に入る母らしめん。子の事に入らば、吾れ子の

寡人之股掌之臣也。爲子之不便也。殺之亡之。外之。母謂天下何。內之無若群臣。何上也。今吾爲子外之。令母三敢入子之事。入子之事者。吾爲子殺之。亡之。胡如。犀首許諾。於是東見田嬰。與之約結。召文子。而相之。魏。身相於韓。

爲めに之を殺し之を亡せん、胡如」と。犀首許諾す。是に於て、東、田嬰を見て、之と約結し、文子を召して之を魏に相とし、自ら韓に相たり。

- 君側にありて臣のなす事を破壊す
- 他國に走らば
- 謂也
- 股腋の臣に同じ。手足と頷む大事の臣
- 他國に放逐せば
- 外は天下に對し、内は羣臣に對し、言ひ解くべき辭なからんと也
- 語解か又は衍なちんといふ
- 田嬰を除外し。正解には「外之」の二字を衍とす
- 開與する事なからしめん、即ち口はしを出させざるべし
- 何如に同じ
- 齊にゆきて
- 田嬰の子田文

蘇代爲田需説魏王曰。臣請問文之爲魏。孰與其爲齊也。王曰。不如其爲齊也。如其爲魏。孰與其爲韓也。

蘇代、田需の爲めに魏王に説いて曰く、「臣請ふ問はん、其の齊の爲めにするに孰れぞや。」王曰く、「其の齊の爲めにするに如かじ。」王曰く、「其の韓の爲めにするに如かじ。」蘇代曰く、「衍將に韓を右にして魏を左にせんとし、文は

王曰。不如其爲韓也。蘇代曰。衍將右魏。而左魏。文將右齊。而左魏。二人者將用王之國。舉中事於世。中道而不可。王且無所聞之矣。王之國雖滲樂而從之可也。王不如下舍。需於側。以稽中二人者之所爲。二人者曰。需非吾人也。吾舉事而不利。於魏。需必挫我於王。二人

將に齊を右にして魏を左にせんとし。二人の者將に王之國を用て、事を世に舉げんとす。中道にして不可なるも、且に王之を聞く所なからんとす。王の國滲すと雖も、楽しんで之に従ふは可ぞや。王、需を側に舍いて、以て二人の者の爲す所を稽ふるに如かす。二人の者曰はん、「需は吾が人に非ず。吾れ事を舉げて魏に利ならずば、需必ず我を王に挫かん」と。二人の者必ず敢て外心あらじ。二人の者の爲す所の、魏に利なると、魏に不利なるとは、王、需を側に匿いて以て之を稽へよ。臣以爲らく、身の利にして、事に便ならん。」王曰く、「善し」と。果して需を側に匿けり。

- 田文
- 公孫衍
- 右は親しむ意、左は疎んずる意を以て略へしならん
- 王の國に據りて何か世の中に一仕事舉げ行はんとす
- 若し其事中途にて宜しからざる事ありとも
- 左右に人なくば之を聞知する能はざらん
- 姑く安井息軒の説に従て訓ず、息軒曰く「可亦當二讀ンテ何ト爲スベシ、形聲相涉リテ誤ルナリ、言フココロハ、文ハ齊ヲ右ニシ衍ハ韓ヲ右ニス、王ノ國滲シテ將ニ盡ヤントスト雖モ亦樂ンテ之ニ從フハ何ゾヤ」と。但、この一句錯簡として削る方聚る可なるを覺ゆ
- 我黨の人
- 二心を抱かじ
- 指也
- 王の身の

者必不敢有外心矣。二人者之所爲之利於魏。與不利於魏。王盾需於側以稽之。臣以爲身利。而便於事。王曰。善。果盾需於側。

史舉非犀首於王。犀首欲窮之。謂張儀曰。請令王讓先生以國。王爲堯舜矣。而先生弗受。亦許由也。衍請因令王致萬戶邑於先生。張儀說。因令史舉數見犀首。王聞之。而弗任也。史舉不辭而去。

● 上蔡の監門者にて甘茂の讒事せし人 ● 魏王に ● 史舉を指す ● 堯は國を舜に譲り、舜は禹に讓れると同じ聖徳となりん ● 堯帝の國を辭したる高德の士 ● 史舉始め衍をそしり、而して今は數々之に見ゆ、故に王其心事を疑ひて任ぜざりし也

楚王攻梁南。韓氏因圍蕃。

楚王、梁南を攻め、韓氏因て蕃を圍む。成恢、犀首の爲めに韓王に謂つて曰

く、「疾く蕃を攻めば、楚の師必ず進まん。魏支ふる能はずんば、臂を交へて楚に聽かん。韓氏必ず危ふからん。故に王、蕃を釋くに如かず。魏、韓の患なくんば、必ず楚と戦はん。戦つて勝たずんば、大梁守る能はじ。而るを又況んや蕃を存するをや。若し戦ひて勝つとも、兵罷敵せん。大王の蕃を攻むる易からん」と。

● 魏の地 ● 其間に乘じて亦魏の地蕃(坊本凡て蕃に作る)を圍む ● 魏人 ● 手を交して之を拜し ● 斯くして楚魏合は、則ち韓危ふし ● 蕃の圍みを ● 魏の都

成恢爲犀首。謂韓王曰。疾攻蕃。楚師必進矣。魏不能支。交臂而聽。楚韓氏必危。故王不如釋蕃。魏無韓患。必與楚戰。戰而不勝。大梁不能守。而又況存蕃乎。若戰而勝。兵罷敵。大王之攻蕃易矣。

張儀爲秦連橫。說魏王曰。魏塞方不過二千里。卒不過二三十萬。又塞四平。諸侯四

張儀、秦の爲めに連横し、魏王に説いて曰く、「魏は塞、方千里に過ぎず、卒三十萬に過ぎず。又塞四平にして、諸侯四通し、條達輻湊して、名山大川の阻ある無く、鄭より梁に至る、百里に過ぎず、陳より梁に至る、二百餘里なり、馬馳せ人趨つて、倦を待たずして至る。梁、南は楚と境し、西は韓と境し、北は趙

通。條達幅濶。無有阻。從鄆川之阻。從鄆里。從梁。不過三百里。從陳。至梁。二百餘里。馬馳人趨。不待倦而至。梁南與楚境。西與韓境。北與趙境。東與齊境。卒成四方。守二亭障者。參列。粟糧糟庚。不下二十萬。魏之舉勢。故戰場也。魏南與楚而不與齊。則齊攻其東。東與齊而不與

と境し、東は齊と境す。卒の四方を成り、亭障を守る者參列し、粟糧糟庚十萬に下らず、魏の壘勢は故より戰場也。魏、南楚に與して齊に與せずんば、則ち齊其東を攻めん。東齊に與して趙に與せずんば、則ち趙其北を攻めん。韓に合せずんば、則ち韓其西を攻めん。楚に親しまずんば、則ち楚其南を攻めん。此所謂四分五裂の道也。且つ夫れ諸侯の從を爲すは、以て社稷を安んじ、主を尊び、兵を強うし、名を顯はさんとて也。今從する者は天下を一にし、約して兄弟と爲り、白馬を刑して以て洹水の上に盟ひ、以て相堅うす。夫れ親昆弟同父母も、尙ほ錢財を爭ふ有り。而るを詐僞反覆の蘇秦の餘謀を恃まんと欲す。其の以て成す可らざるや亦明かなり。大王、秦に事へずんば、秦、兵を下して河外を攻め、卷・衍・燕・酸棗を抜き、衛を劫かして晉陽を取らば、則ち趙南せじ。趙南せずんば、則ち魏北せじ。魏北せずんば、則ち從道絶えん。從道絶えば、則ち大王の國、危き無きを求めんと欲すとも、得可らざらん。秦、韓を挾さんで魏を攻めんか、

趙。則趙攻其北。不令合於韓。則韓攻其西。不親於楚。則楚攻其南。此所謂四分五裂之道也。且夫諸侯之爲從者。以安社稷。尊主強兵。顯名也。合從者。一天下。約爲兄弟。刑自馬以盟於洹水之上。以相堅也。夫親昆弟同父母。尙有爭錢財。而欲恃詐僞。反覆蘇秦之餘

韓、秦に劫かされて、敢て聽かずんばあらず。秦・韓、一と爲らば、魏の亡びんこと立つて須つ可し。此れ臣の大王の爲めに患ふる所也。大王の爲めに計るに、秦に事ふるに如くは莫し。秦に事へば、則ち楚・韓必ず敢て動かじ。楚・韓の患なくんば、則ち大王枕を高くして臥し、國必ず憂なからん。且つ夫れ秦の弱めんと欲する所は楚に如く莫く、而して能く楚を弱めん者は魏に若く莫し。楚は富大の名ありと雖も、其實は空虚なり。其卒衆多なりと雖も、然れども輕走して北け易く、敢て堅く戦はず。魏の兵を悉くし、南面して伐たば、楚に勝たんこと必せり。夫れ楚を虧きて魏を益し、楚を攻めて秦に適はゞ、内、禍を嫁し國を安んぜん。此れ善事也。大王、臣に聽かずんば、秦の甲出で、東伐せん。秦に事へんと欲すと雖も、得可からじ。且つ夫れ從人は舊辭多くして、信す可き寡し。一諸侯の王に説けば、出で、其車に乗り、一國を約して成れば、反りて、封侯の基を取る。是の故に天下の游士、日夜、腕を搯し目を瞋らし齒を切して、以て從の

謀其不可二以成亦明矣。大王不事秦。秦下兵攻三河外。拔二卷行燕酸。陽。劫二衛取二晉。陽。則趙不南。趙不南。則魏不北。魏不北。則從道絕。從道絕。則大王之國欲求無危。不可得也。秦挾二韓而攻二魏。韓劫二於秦。不。敢。不。聽。秦。韓爲一。國。魏之亡。可立而須也。此臣之所爲二大王一患上

便を言ひ、以て人主に説かざるは莫し。人主其辭を覽り、其説を牽く。悪くんぞ眩する無きを得んや。臣聞く、積羽舟を沈め、羣輕軸を折り、衆口金を鏃すと。故に願はくは大王の之を熟計せんことを。」魏王曰く、「寡人愚にして、前計之を失せり。請ふ東藩と稱し、帝宮を築き、冠帯を受け、春秋を祠し、河外を效さん。」

● 地は四方平坦にして諸侯は四方より集まり ● 交通至便なるをいふ。道路の通ずること木の枝の分布せるが如く、四方より集まること輻(車ノ矢)の轂(コシキ)に於けるが如しと也 ● 險阻 ● 當時韓は鄭を并せ、楚は陳を并せたり、鄭陳は韓楚也 ● 地平かにして近し、人馬疲倦に及ばずして梁に至るべし ● 十里一亭。障は隔也、城壘を築いて之を爲る、即ち十里毎の城壘也 ● 輻重の兵をいふならん。國君長の説に「庚」は「廉」の誤にて廉に通ずといへり ● 魏の地は四方に開けて守備に多くの兵を要するにも拘らず地小にして兵少なければ攻め易くして守り難しとの意ならん ● 合従 ● 史記によりて原文の「合」を「今」に改め譯す ● 馬の血を飲(スス)りて盟ふ也 ● 親子兄弟の間にて也 ● 瓊末の謀計 ● 河外は即ち卷・衍・酸・陽にて魏の地也 ● 趙は南して魏に向はず、魏は北して趙に向はず、積弱兩國合せざる事になれば、趙は合従の盟主ゆる當然合従の道絶えん ● 引入れて待みとす ● 原文「一國」とあるを史記によりて「一」に改む ● ヤヤもすれば走りて ● 楚國を削りて魏國を増益し ● 秦の欲する所は叶はしめば、秦の欲する所は楚を弱め

也。爲二大王一計。莫如事秦。事秦。則楚韓必不。敢。動。無。楚韓之患。則大王高枕而臥。國必無憂矣。且夫秦之所欲弱莫如楚。而能弱楚者莫若魏。楚雖有富大之名。其實空虚。其卒雖衆多。然而輕走易北。不。敢。堅。戰。悉。魏。之。兵。南。而。而。伐。勝。楚。必。矣。夫。虧。楚。而。益。魏。攻。楚。而。適。秦。內。嫁。禍。安。國。此。善。事。也。大王不聽。臣。秦。甲。出。而。東。伐。雖。欲。事。秦。而。不。可。得。也。且。夫。從。人。多。辭。而。寡。可。信。說。一。諸。侯。之。王。出。而。乘。其。車。約。一。國。而。成。反。而。取。封。侯。之。基。是。故。天。下。之。游。士。莫。不。日。夜。擡。腕。目。切。齒。以。言。從。之。便。以。說。中。人。主。人。主。覽。其。辭。幸。其。說。惡。得。無。眩。哉。臣。聞。積。羽。沈。舟。群。輕。折。軸。衆。口。鏃。金。故。願。大。王。之。熟。計。之。也。魏。王。曰。寡。人。愚。愚。前。計。失。之。請。稱。東。藩。築。帝。宮。受。冠。帶。祠。春。秋。效。河。外。一。

んとするにあること前文に見ゆ ● 史記には「内」の字なし。魏が秦に攻めらるべき禍を楚に移嫁して國家を安泰ならしむる也 ● 甲兵魏を伐たん ● さうなりて後に也。速かに秦に事ふべきをいふ ● 合従論者 ● 大言壯語 ● 諸侯常用の車に乗る。輻重の厚きをいふ ● 合従の約を結びて反れば、それにて封侯たるべき基礎を作る ● 何れも激激の状也 ● 廉に通ず。輻重は其辭説を漢に受けて取り用ふるの謂ならん ● まどふ、まよふ ● 輕き羽も多く積めば舟を沈め、輕き物も多く積めば車軸を折り、衆人の口に鏃る所は金石の堅きをも熔し去るべし。衆口の言はし易く恐るべきをいふ ● ちろかなるうまれつき ● 前にも出づ。東方の藩屏となり、秦王の巡幸を迎ふべき行宮を作り、秦の冠帯を受けて用ひ、秦國宗廟の春秋の祠を助け、河外の地を築上げん

齊・魏、約して楚を伐つ。魏、董慶を以て齊に質とせり。楚、齊を攻め大いに之

楚。魏以董慶爲質於齊。楚攻齊大敗之。而魏弗救。田嬰怒。將殺董慶。田嬰爲董慶。田嬰曰。董慶謂田嬰曰。楚攻齊大敗之。而不致深入者。以魏爲將下內之於齊。而擊其後。今殺董慶。是示楚無魏也。魏怒合於楚。齊必危矣。不如下貴董慶以善魏。而疑中之於楚上。也。

張儀走之魏。魏將迎之。張丑諫於王曰。王欲勿內。不得於王。張丑退。復

を敗る。而るに魏救はず。田嬰怒つて、將に董慶を殺さんとす。田嬰、董慶の爲めに田嬰に謂つて曰く、「楚の齊を攻めて大いに之を敗り、而も敢て深く入らざるものは、魏、將に之を齊に内れて其後を撃たんとするを爲すを以てなり。今董慶を殺すは、是れ楚に魏なきを示す也。魏怒つて楚に合せば、齊必ず危からん。董慶を貴びて以て魏に善くし、而して之を楚に疑はしめんにかかず」と。

●魏の臣 ●齊を ●齊の相 ●楚を齊に攻め入らせて魏が其後から撃たうとするものと思ひて深く入らざる也。正解に原文の「魏爲」を「爲魏」の誤とす、さすれば「以爲」と讀きて「おもへらく」と訓ず、最も通じ易きが如し ●齊の魏なきを ●魏に計あることを

張儀走つて魏に之く。魏、將に之を迎へんとす。張丑、王を諫めて内るゝ勿らんと欲す。王に得ず。張丑退き、復た王を諫めて曰く、「王亦老妾の其の主婦に事ふる者を聞けりや。子長じ色衰ふ、家を重んずるのみ。今臣の王に事ふる、

老妾の其の主婦に事ふる者の若し」と。魏王因て張儀を内れず。

●妾より逃走してならん ●其諫用ひられず ●一應王前を引きさがり ●老いたる妾の其家の正妻に事ふることを御承知なりや ●其子は長じて後を繼ぐべきに至り、容色は衰へて其主人に喜ばるべくもあらず、而してよく其主婦に事ふるは、決して自己の利益よりにあらず、其家を重んずるを以てのみ ●只々御國大事と思ふのみ故に諫言申す也との意にて比喩せるならん

諫於王曰。王亦聞下老妾事其主婦者乎。子長色衰。重家而已。今臣之事王。若老妾之事。其主婦一者。魏王因不内張儀。

文子田需周霄相善。欲罪犀首。犀首患之。謂魏王曰。今所患者齊也。嬰子言行於齊王。王欲得齊。則胡不召文子而相之。彼必務以

文子・田需・周霄、相善し。犀首を罪せんと欲す。犀首之を患へ、魏王に謂つて曰く、「今患ふる所のものは齊也。嬰子の言、齊王に行はる。王、齊を得んと欲せば、則ち胡ぞ文子を召して之を相とせざる。彼必ず務めて齊を以て王に事へん。」王曰く、「善し」と。因て文子を召して之れを相とす。犀首以て田需・周霄に倍かしむ。

●犀首を罪に落して文子(田文)を相とせんと謀りし也 ●魏の國の心配とする所は ●田嬰 ●齊の心を得て之と交はらんと欲せば ●田嬰の子田文 ●田嬰 ●文子をして二人に背かしむ、文は前に二人に親

齊事王。王曰。善。因召文子而相之。犀首以倍田需周霄。

しかりしも、今犀首之を聽めて相とせし故、文は犀首を善くす、従つて前に善かりし二人に背く也

魏王令惠施之楚。令犀首之齊。乘數釣。釣二子者乘數釣將測交也。楚王聞王施因令人先之楚。言曰。魏王令犀首之齊。惠施之楚。釣二子者將測交也。楚王聞之。因郊迎惠施。

魏王、惠施をして楚に之かきめ、犀首をして齊に之かきむ。乗數釣し。施因て人をして先づ楚に之き言はしめて曰く、「魏王、犀首をして齊に之かきめ、惠施をして楚に之かきむ。二子を釣しうするは、將に交を測らんとすれば也」と。楚王之を聞き、因て惠施を郊迎す。

● 二子の乘車の數同一也。以下原文十五字衍といふ説に従つて削り譯す ● 使を待つの際重に因つて交りの厚薄をト知せんとなす。惠施楚をして己を重んずしめんとして斯く言はしめし也 ● 親しく郊外に出迎ふ

田需貴於魏王。惠子曰。子必善左右。今夫楊橫樹之。

田需、魏王に貴ばる。惠子曰く、「子必ず左右に善くせよ。今夫れ楊は横に之を樹うるも則ち生じ、倒に之を樹うるも則ち生じ、折つて之を樹うるも又生

則生。倒樹之則生。折而樹之又生。然使十人樹楊。一人拔之。則無生楊矣。故以十人之衆。樹易生之物。然而不勝一人。者何也。樹之難。而去之易也。今子雖自樹於王。而欲去子者衆。則子必危矣。

す。然れども十人をして楊を樹らしめて、一人をして之を抜かしめば、則ち生楊なからん。故に十人の衆を以て、生じ易き物を樹ゑて、然かも一人に勝たざるは何ぞや。之を樹うるの難くして、之を去るの易ければ也。今子自ら王に樹うと雖も、而も子を去らんと欲する者衆ければ、則ち子必ず危からん」と。

● 田需に説いて曰く ● 王の御側の官人に善く交はれ ● かはやなぎ ● はえつきたる楊 ● 自身王に取入りて顯達すとも

田需死。昭魚謂蘇代曰。田需死。吾恐張儀薛公犀首之有二人相魏者。代曰。然則相者以誰。

田需死す。昭魚、蘇代に謂つて曰く、「田需死せり。吾れ張儀・薛公・犀首の、一人魏に相たる者あらんを恐る。」代曰く、「然らば則ち相たる者誰を以てして、君之を便とする。」昭魚曰く、「吾れ太子の自ら相たらんを欲する也。」代曰く、「請ふ君の爲めに、北、梁王に見えて、必ず之を相とせん。」昭魚曰く、「奈何。」代曰く、「君其れ梁王と爲れ。代請ふ君に説かん。」昭魚曰く、「奈何。」

而君便之也。昭魚曰。吾欲太子之自相也。代曰。請爲君北見梁王。必相之矣。昭魚曰。奈何。代曰。君其爲梁王。代請說君。昭魚曰。奈何。對曰。代也。從楚來。昭魚甚愛。代曰。君何愛。曰。田需死。吾恐張儀薛公犀首有二。人相魏者。代曰。勿愛也。梁王長主也。必不相。張儀。張

對てて曰く、「代や楚より来る。昭魚甚だ愛ふ。代曰く、『君何をか愛ふる』と。曰く、『田需死せり。吾れ張儀・薛公・犀首の、一人魏に相たる者あらんを恐る』と。代曰く、『愛ふる勿れ。梁王は長主也。必ず張儀を相とせじ。張儀、魏に相たらば、必ず秦を右にして魏を左にせん。薛公、魏に相たらば、必ず齊を右にして魏を左にせん。犀首、魏に相たらば、必ず韓を右にして魏を左にせん。梁王は長主也。必ず相たらしめじ』と。王曰はん、『然らば則ち寡人孰をか相とせん』と。代曰はん、『太子の自ら相たるに如くは莫し。是の三人皆太子を以て固相に非ずと爲し、皆將に務めて其國を以て魏に事へて、丞相の璽を欲せんとす。魏の強を以てして、三萬乗の國を持して之を輔けば、魏必ず安からん。故に曰く、太子の自ら相たるに如かじ』と。」遂に、北、梁王に見えて、此語を以て之に告ぐ。太子果して自ら相たり。

- 魏の相 ● 楚の相 ● 齊の田嬰 ● 君假に梁王となりて我が説を聽けと也 ● 試みに君に説かん

儀相魏。必右秦而左魏。薛公相魏。必右齊而左魏。犀首相魏。必右韓而左魏。梁王長主也。必不使相也。王曰。然則寡人孰相。代曰。莫如太子之自相。是三人皆以太子爲非固相也。皆將務以其國事魏。而欲丞相之璽。以魏之強。而持三萬乘之國。輔之。魏必安矣。故曰。不如太子之自相也。遂北見梁王。以此語告之。太子果自相。

- 才德優長の主 ● 右は先也親也、左は後也疎也 ● 此三人中誰をも ● 斯くいはゞ王は必ず曰はん ● 權宜の處置にて永久の相に非ずの意 ● 宰相の印。相たらんとするをいふ ● 三人は何れも萬衆の自國の政柄を持つる者、之を以て魏に事ふ、即ち三萬衆を持して魏を輔くる也

周最善齊。翟強善楚。二子者欲傷張儀於魏。張子聞之。因使其人爲見者。齎夫間見者。因無三敢傷張子。周最入齊。秦王怒。令姚賈

周最、齊に善く、翟強、楚に善し、二子の者、張儀を魏に傷らんと欲す。張子之を聞き、因て其人をして見者の齎夫と爲り、見者を間はしむ。因て敢て張子を傷る無かりき。

- 二人相謀りて ● 張儀魏に相たる時ならん。傷は中傷也 ● 自分の舍人 ● 見者を以て引見合を傳ふる臣とし、齎夫はその臣に使はる、小臣となす説と、見者は見ゆる者にて即ち周最翟強を指し、齎夫はその見ゆる者を王に取次ぐ役とする説と二者並び行はる。後説從ふべきか

周最、齊に入る。秦王怒り、姚賈をして魏王を讓めしむ。魏王之が爲めに秦王に

讓魏王。魏王爲之謂秦王曰。魏之所以下者。以周最也。今最遣寡人入齊。齊無通於天下矣。敝邑之事。王亦無齊累矣。大國欲急兵。則趣趙而已。

秦召魏相信安君。信安君不欲往。蘇代爲說秦王曰。臣聞之。忠不

謂つて曰く、「魏の、王の爲めに天下に通ずる所以は、周最を以て也。今最、寡人を遁れて齊に入る。齊、天下に通ずる無けん。敝邑の王に事ふる、亦齊の累なけん。大國兵を急にせんと欲せば、則ち趙を趣がさんのみ」と。

● 魏、秦と齊を伐たんと欲す、而して今、周最魏より齊に入る、故に秦王は魏が周最をして好を齊に結ばしむるものと思ひて怒る也 ● 文意難解也、諸説紛々姑く岡井彪の説に従つて、天下は趙を指すと解す。其説によれば、魏の周最に於ける何等齊と陰あるにあらざ、豈に齊が周最を逐ひし時、魏は之を收めて明かに齊の讐たり、趙は魏の齊に與せざるを見たる故、既に約して秦と通ぜり、即ち秦の爲めに趙を逐じたるは周最の事によりて也、然るに周最は魏に在りてなは齊に善くして齊を伐つを欲せず、從て魏が齊と陰私あるやの疑を秦趙より蒙るを免れず、然るに今また周最は魏を遁れて齊に入り、齊之を收めし事故、趙は魏と齊との全く仲違ひなる事を明知し又疑ふ事なからん。因て秦と聯合して齊を伐たんと決し、從つて齊は趙に趙に運ずる能はじ、弊邑が王に事ふるについて齊との間を疑はる、迷惑は無からん、故に王が急に齊を伐たんとすれば、魏は趙に出兵を促さんのみと也

秦、魏の相信安君を召す。信安君往くを欲せず。蘇代爲めに秦王に説いて曰く、「臣之を聞く、忠は必ずしも當らず、當る必ずしも忠ならずと。今臣願はくは大王の爲めに臣の愚意を陳べん。其の下吏に忠ならずして、自ら要領の罪あらし

必當。當不忠。今臣願爲大王。陳臣之愚意。恐其不忠。於下吏。自使有要領之罪。願大王察之。今大王令人執事於魏。以完其交。臣恐魏交之益疑也。將以塞趙也。臣又恐趙之益勁也。夫魏王之愛習魏信也甚矣。其智能而任用之也厚矣。其畏惡嚴尊秦也明矣。

めんを恐る。願はくは大王之を察せよ。今大王、人をして事を魏に執らしめ、以て其交を完うせんとすと。臣、魏の交の益々疑はんを恐る。將に以て趙を塞がんとするや、臣又趙の益々勁からんを恐る。夫れ魏王の魏信を愛習するや甚だしく、其智能ありとして之れを任用するや厚し。其の秦を畏惡嚴尊するや明かなり。今王の使人魏に入りて用ひられずんば、則ち王の使人魏に入るも益無き也。若し用ひられれば、魏必ず愛習する所を捨て、畏惡する所を用ふるなり。此れ魏王の安んぜざる所ならん。夫れ萬乗の事を捨て、退くは、此れ魏信の行ひ難き所ならん。夫れ人の君をして安んぜざる所に處らしめ、人の相をして能はざる所を行はしめ、此れを以て親を爲すとも、則ち久しうし難からん。臣故に魏の交の益々疑はんを恐る也。且つ魏信事を捨てば、則ち趙の謀者は必ず曰はん、『秦に捨てられ、秦必ず其の愛信する所の者をして趙を用ひしめん。是れ趙存して而も我亡び、趙安くして而も我危き也』と。則ち上は野戰の氣あり、下は堅守

今王之使人。入魏而不入。則王之使人。入魏無益也。若用魏必舍。所愛習而用。所畏惡。此魏王之所不安也。夫舍萬乘之事而退。此魏信之所難行也。夫令二人之君。處所不安。令二人之相。行所不能。以此爲親。則難久矣。臣故恐魏交之益疑也。且魏信舍事。則趙之謀

の心あらん。臣故に趙の益々勤からんを恐るゝ也。大王、魏の交を完うして、趙をして小心ならしめんと欲せんか、魏信を用ひて、之れを尊ぶに名を以てせんに如かず。魏信、王に事へば國安くして名尊く、王を離れば國危うして權輕からん。然らば則ち魏信の王に事ふるや、上、其主の爲めにする所以は忠に、下、自ら爲めにする所以は厚し、彼れ其の王に事ふる必ず完からん。趙の事を用ふる者は必ず曰はん、「魏氏の名族我より高からず、土地の實我より厚からざるも、魏信、魏を以て秦に事へて、秦甚だ之を善くし、國安きを得、身尊きを得たり。今我、難を秦に構へ、兵、招質と爲り、國、削危の形に處るは、得計に非ず。怨を外に結び、主中に患へ、身死亡の地に處るは、完事に非ず」と。彼れ將に其の前事を傷んで、其の過行を悔い、其利を冀ひ、必ず多く地を割いて、以て深く王に下らんとす。則ち是れ大王垂拱して多く地を割き、以て利を爲す重からん。堯舜も求めて得る能はざる所也。臣願はくは大王の之を察せられんことを」と。

者必曰。舍於秦。秦必令其所以愛信者用也。趙是趙存而我亡也。趙安而我危也。則上有二野戰之氣。下有二堅守之心。臣故恐趙之益勤也。大王欲完魏之交。而使趙小心乎。不如下用魏信。而尊之以名。魏信事王。國危而權輕。然則魏信之事王也。上所爲其主者忠矣。下所以自爲者厚矣。彼其事王必完矣。趙之用事者必曰。魏氏之名族。不高於我。土地之實。不厚於我。魏信以魏事秦。秦甚善之。國得安焉。身得尊焉。今我構難於秦。兵爲招質。國處削危之形。非得計也。結怨於外。主患於中。身處死亡之地。非完事也。彼將傷其前事。而悔其過

● 秦が信安君を召して別に相を置かんと欲せしを知りし故に行くを欲せざりしならん ● 誠心を以て君に事ふる者は必ずしも君の御心に當るものにあらず、君の御心に當りても隨分忠とは申し難きものあり。「當」の字坊本「黨」に作る ● 王をいふ。指して言はざる謙辭也、王の心に當らざりて罪を得んを恐ると也。要領は腰と首にて斬刑をいふ ● 政事を執る、相たらしむ ● 秦に對する交情に疑を益す ● 魏が趙の秦と交はるとするを蓋ぎて通ぜざらしむ ● 下文に於て其理由を發揮せり ● 信安君 ● 寵愛して側近く召し使ふ ● 惡は憚る意。其の秦」の上に「然して又」と補ひ見よ ● 魏に入りて相たらしめんとする人。「人をして魏に入らしむる」と訓ずるも可ならんか ● 大國の政事を捨て、即ち魏の相位を捨て、 ● 親交をなしても其機なる事にては永續きはせず ● 政事を捨てて相位を退かば ● 事を用ふる者 ● 我々も秦の爲めに相位を認められ。正解には「舍」は「合」の誤とせり ● 趙の政事を ● 進んで秦と戰はんとするの氣あり ● 退いては堅く疆域するの心あらん ● 小心翼々、謹慎 ● 秦、信安を以て己の用として魏に相たらしむるをいふ、即ち秦の後援ありとの聲名の義ならん ● 秦王を指して曰ふ ● 門閭、國柄 ● それに因りて ● 職端を開き ● 標的、まこと ● 土地を割讓すべき危急の状態 ● 完全なる政策 ● 腕組して、手を下さずして ● こんな事は也

行。冀其利。必多割地。以深下王。則是大王垂拱多割地。以爲利重。幾舜之所求。而不能得也。臣願大王察之。

樓梧約秦魏。魏太子爲質。紛彊欲敗之。謂太后曰。國與還者也。敗秦而利魏。魏必負之。負秦之日。太子爲質矣。太后坐而泣。王因疑於太子。令之留於酸棗。樓子患之。昭衍爲周之梁。樓子告之。昭衍見梁王。梁王曰。何聞。曰。

樓梧秦・魏を約し、魏の太子質たらんとす。紛彊之を敗らんと欲して、太后に謂つて曰く、「國は與に還る者也。秦を敗つて魏に利あらば、魏必ず之に負かん。秦に負くの日は、太子質たらんと。太后坐して王に泣く。王因て太子を疑ひ、之をして酸棗に留らしむ。樓子之を患ふ。昭衍、周の爲めに梁に之く。樓子之に告ぐ。昭衍、梁王に見ゆ。梁王曰く、「何をか聞ける。」曰く、「秦且に魏を伐たんとすと聞く。」王曰く、「期を爲して我と約せり。」曰く、「秦、王の約を疑ふ。太子の酸棗に留まつて秦に之かざるを以てなり。秦王の計に曰く、「魏、我と約せずんば、必ず我を攻めん。我其の處ながらにして之に攻めらるゝを待たんよりは、先づ之を伐たんに如かじ」と。秦の強を以て節を折つて與國に下らば、臣其の東周に害あらんを恐る」と。

聞秦且伐魏。王曰。爲期與我約矣。曰。秦疑於王之約。以下太子之留酸棗。而不之計。秦王之計。曰。魏不與我約。必攻我。我與其處。而待之。見攻。不如先伐之。以秦強。折節而下與國。臣恐其害於東周。

- 魏人也 ● 秦に人質たらんとす ● 魏の臣 ● 國の政策はどこでも旋轉して振りなき者也 ● 他日に至りて也 ● 秦に背かん ● 穰境、あつた。秦にて太子を殺さんと也 ● 原文の「王泣」は「泣王」の倒置法也 ● 太子の身に危害あらんを疑ひ ● 魏の地 ● 何か聞きたる事ありや ● 我は秦と和を請ずる期限までも約定したる事なればそんな事は無き善也 ● 講和の約を實行せずんば ● 膝を屈して與國に下り、以て與國と共に魏を攻めば ● 魏に害あるを正言せずして殊更に周に害ありといふ也。東周は魏に隣し、秦來伐せば必ず東周を征すべきが故也

秦楚攻魏。圍皮氏。爲魏謂楚王曰。秦楚勝魏。魏王之恐也。見亡矣。必合於秦。王何不背秦。而與魏王。魏王喜。必內太子。

秦・楚、魏を攻めて、皮氏を圍む。魏の爲めに楚王に謂つて曰く、「秦・楚、魏に勝たば、魏王の恐るゝや亡びんことを見、必ず秦に合せん。王何ぞ秦に背いて魏王に與せざる。魏王喜んで必ず太子を内れん。秦、楚を失はんを恐れれば、必ず城地を王に效さん。王復た之と魏を攻むると雖も可也。」楚王曰く、「善し」と。乃ち秦に背いて魏に與す。魏、太子を楚に内る。秦恐れ、楚に城地を許し、之と復た魏を攻めんと欲す。博里疾怒り、魏と與に楚を攻めんと欲すれども、魏

秦恐失楚。必效城地於王。王雖復與之。攻魏可也。楚王曰。善。乃背秦而與魏。魏內太子於楚。秦恐許楚城地。欲與之復攻魏。楊里疾怒。欲與魏攻楚。恐魏之以太子在楚。不肯也。爲疾謂楚王曰。外臣疾使臣謂之曰。敝邑之王。欲效城地。而爲魏太子之尙在楚也。是以未敢。王出魏質。臣請效之。而復固秦楚之交。以疾攻魏。楚王曰。諾。乃出魏太子。秦因合魏以攻楚。

の、太子の楚に在るを以て肯んぜざらんを恐る。疾の爲めに楚王に謂つて曰く、
「外臣疾、臣をして之れに謁せしめて曰く、『敝邑の王、城地を效さんと欲すれども、魏の太子の尙ほ楚に在るが爲めに、是れを以て未だ敢てせず。王、魏の質を出さば、臣請ふ之れを效さん。而して復た秦・楚の交を固くし、以て疾く魏を攻めん』と。」楚王曰く、「諾」と。乃ち魏の太子を出す。秦因て魏に合して以て楚を攻めぬ。

● 魏の邑 ● 魏王其亡ばせられんを恐れて也。原文「王之恐也見亡矣」は「王之恐見亡也」の「也」を中間に置きたる一種の語法ならん ● 人質として太子を楚に入れん ● 然して復た秦と共に ● 正解には、原文「欲」の上に「楚」の字を補ふべしといふ ● 秦の楊里疾は楚の反覆を怒り ● 或人楊里疾の爲めに ● 外邦の臣 ● 大王に ● 人質たる太子 ● 必ず土地献上の約を履行する様に取計らはん

魏太子在楚。

魏の太子、楚に在り。樓子に郢陵に謂つて曰く、「公必ず且に齊・楚の合する

謂樓子於郢陵曰。公必且待齊楚之合也。以救中皮氏。今齊楚之理。必不合矣。彼翟子之所惡。於國者。無公矣。其人皆欲合齊秦外楚。以輕公。公必謂齊王曰。魏之受兵。非秦實首伐之也。楚惡魏之事。王也。故勸秦攻魏。齊王故欲伐楚。而又怒其不己善也。必令魏以

を待つて、以て皮氏を救はんとするも、今齊・楚の理必ず合はじ。彼の翟子の國に惡む所は、公より無し。其人皆、齊・秦を合し、楚を外にして、以て公を輕んぜんと欲す。必ず齊王に謂つて曰はん、「魏の兵を受くるは、秦實に首として之を伐つに非ず。楚、魏の、王に事ふるを惡む也、故に秦に勸めて魏を攻む」と。齊王故より楚を伐たんと欲す。而して又其の己に善からざるを怒るや、必ず魏をして地を以て秦に聽いて和を爲さしめん。張子の強を以てして、秦・韓の重きありしも、齊王之を惡みて、魏王敢て據らざりき。今齊・秦の重きを以て、楚を外にして以て公を輕んぜんとす。臣、公の爲めに之を患ふ。鈞しく之れ地を出して以て秦に和を爲す也、豈に楚に由るに若かんや。秦、疾く楚を攻め、楚、兵を還さば、魏王必ず懼れん。公因て汾北を寄せて、以て秦に予へて和を爲し、合親して以て齊を孤とせば、秦・楚、公を重んじ、公必ず相たらん。臣、秦王と楊里疾との之を欲するを意ふ也。臣請ふ公の爲めに之に説かん」と。乃ち楊里子に謂つて曰く、

地聽秦而爲之。和以張子之強。有秦韓之重。齊王惡之。而魏王不敢據也。今以齊秦之重。外楚以輕公。臣爲公患之。鈞之出地以爲和。於秦也。豈若由楚乎。秦疾攻楚。楚選兵。魏王必懼。公因寄汾北。以予秦而爲和。合親以孤齊。秦楚重公。公必爲相矣。臣意秦王與樛

「皮氏を攻むるは、此れ王の首事也。而れば抜く能はずんば、天下且に此を以て秦を輕んぜん」とす。且つ皮氏を有つは、以て韓・魏を攻むるに於て利也。」樛里子曰く、「吾已に魏に合へり。之を用ふる所なし。」對へて曰く、「臣願はくは鄙心を以て公を意らん。公以て罪と爲す無かれ。皮氏を有つは國の大利也。而るを、以て魏に與ふるは、公終に自ら以て守る能はずと爲す、故に以て魏に與ふるなり。今公の力は之を守るに餘あり。何の故にか有たざる。」樛里子曰く、「奈何。」曰く、「魏王の恃む所は齊・楚也。用ふる所は樓・翟強也。今齊王、魏王に謂つて曰く、『講攻を齊に欲へ』と。主兵の辭なり、是れ救はざらん。楚王、魏の、樓子を用ひずして、翟強をして和を爲さしめしを怒り、怨顔して已に之を絶てり。魏王の懼るゝや、亡を見ればなり。翟強は齊・秦を合し、楚を外にして以て樓・翟強を輕んぜんと欲し、樓・翟強は秦・楚を合し、齊を外にして以て翟強を輕んぜんと欲す。公如かず魏の和を按じ、人をして樓子に謂つて曰はしめんには、『子能く汾北

里疾之欲也。臣請爲公說之。乃謂樛里子曰。攻皮氏。此王之首事也。而不能拔。天下且以此輕秦。且有皮氏。於三以攻韓。魏一利也。樛里子曰。吾已合魏矣。無所用之。對曰。臣願以鄙心。意公。公無以爲罪。有皮氏。國之大利也。而以與魏。公終自以爲不能守也。故以與

を以て我に與へんか。請ふ楚に合し、齊を外にして以て公を重んぜん。此れ吾事也」と。樛子、楚王と必ず疾くせん。又翟子に謂へ、『子能く汾北を以て我に與へんか。必ず齊に合し、楚を外にして以て公を重くせん』と。翟強、齊王と必ず疾くせん。是れ公、外、齊・楚を得て以て用とし、内、樓・翟強を得て以て佐とするなり。何の故にか地を河東に有つ能はざらんや」と。

● 或人が樓里に ● 魏の地。鄆陵に於て ● 魏の地名 ● 齊楚の交は理として必ず合はじ ● 翟強、魏人にて齊に仕ふ。翟強が國中にて惡み憚る者は公に如くはなし ● 翟強の徒 ● 彼等は也。原文此上にある「公」の字は衍 ● 齊王に ● 往日張儀の也 ● 二國に重ぜらる、權ありしも ● その爲に魏王は張儀を信賴することなかりき ● 樛子が因る所の楚を疎外排斥して ● 然れば魏王敢て樛子に據らじ、故に之を患ふ也 ● どの道地を出して秦に和を爲すとすれば、楚の手を経て之を爲し以て齊王を孤立ならしむるが可也 ● 一説に魏の誤となす ● 前文「楚」を「魏」の誤とする説に従へば、楚、魏を救はずして兵を引還す也 ● 魏の地。汾北を楚に密せて以て秦に予へて和す、是れ楚に由つて和を爲す也 ● 魏の相 ● 始められたる事、首唱して謀られし事 ● 客の計を也 ● 攻め陥さぬ内に兵を解く、故に與ふと謂ふ也 ● 秦に和すると之を攻むると共に齊の指圖を仰ぎて行へとならん ● 是れ戰爭の盟主が其從屬に對する辭也、其魏を救ふの眞意

魏。今公之力。有餘守之。何故而弗有也。榜里子曰。奈何。曰。魏王之所恃者。齊楚也。所用者。樓。樓強也。今齊王謂魏王曰。欲講攻於齊。主兵之辭也。是弗救矣。楚王怒於魏之不用樓子。而使翟強爲和也。怨顔已絕之矣。魏王之懼也。見亡。翟強欲合齊秦。外楚以輕中樓。樓欲合秦楚。外齊以輕中翟強。公不如按魏之和。使人謂樓子曰。子能以汾北與我乎。請合於楚。外齊以重公也。此吾事也。樓子與楚王必疾矣。又謂翟子曰。子能以汾北與我乎。必爲合於齊。外楚以重公也。翟強與齊王必疾矣。是公外得齊楚。以爲用。內得樓。樓強。以爲佐。何故不能有地於河東乎。

なきを見るべし 樓子を用ひて楚に和睦するを爲さずして、翟強をして秦と和せしめしを怒り 怨を顔色に出して 魏との國交を 魏に亡形有り故に魏王懼る 控へて急に和せず これ我が能くする所也 疾く之に應ぜん 輔佐 必ず皮氏を得んと也

獻書秦王曰。臣竊聞大王之謀出事於梁。謀恐不出於計矣。願大王之熱計之也。梁者山東之要也。有蛇

書を秦王に獻じて曰く、「臣竊かに、大王の出で、梁に事せんを謀ると聞く。謀計に出でざらんを恐る。願はくは大王の之を熱計せられんを。梁は、山東の要なり。此に蛇あり。其尾を撃てば其首救ひ、其首を撃てば其尾救ひ、其中身を撃てば、首尾俱に救ふ。今梁は天下の中身也。夫れ秦の梁を攻むるは、是れ天下の要を刺し、山東の脊を斷する也。是れ山東の首尾皆中身を救ふの時也。山東

於此。擊其尾。其首救。擊其首。其尾救。擊其中身。首尾俱救。今梁者。天下之中身也。夫秦攻梁者。是示天下要。斷山東之脊也。是山東首尾皆救。中身之時也。山東見亡必恐。恐必大合。山東尙強。臣見秦之必大憂。可立而待也。臣竊爲大王計。不如南出事於南方。其

亡ぶるを見れば必ず恐れん。恐れれば必ず大いに合はん。山東尙ほ強し。臣、秦の必ず大憂立つて待つ可きあらんを見る也。臣竊かに大王の爲めに計るに、南に出で、南方に事せんに如かず。其兵弱く、天下救ふ能はず。地廣む可く、國富ます可く、兵強うす可く、主尊うす可し。王、湯の桀を伐ちしを聞かずや。之を弱き密須氏に試み、以て武教を爲し、密須氏を得て、而して湯は桀を服せり。今秦國、山東と讎を爲す。先づ弱を以て武教を爲さずんば、兵必ず大いに挫け、國必ず大いに憂へん」と。秦果して、南、藍田・鄆郢を攻む。

● 或人が 梁を攻伐せんと 大王の計慮に出でしにあらじとの意にて、其失計たるをいふ也 腰に當る所 原文「示天下要」は「刺天下之要」の誤といふ正解の説により改譯す。天下と山東、要と脊は互言也。或は「天下に山東の脊を要斷するを示す也」とも訓ずべきか 魏に亡形あるを見れば、其必ず已に及ばんを恐れん ● 「必大憂」は「大憂必」の誤かといふ 楚を攻伐せんに如かずと也 遊方なれば也。原文「必」は「不」の誤 殷の湯王が夏の桀王を 兵を弱き密須氏に試用して以て教練を爲し。吳註によるに密須を伐ちしは西伯也、こゝに湯とするは誤也 弱楚を伐ちて以て

兵弱。天下必能救。地可廣。國可富。兵可強。主可尊。王不聞湯之伐桀乎。試之弱密須氏。以爲武教。得密須氏。而湯之服桀矣。今秦國與山東爲讎。不先以弱爲武教。兵必大挫。國必大憂。秦果南攻藍田鄆郢。

魏秦伐楚。魏王不欲。樓緩謂魏王曰。王不與秦攻楚。楚且與秦攻王。王不如下令秦楚戰。王交制之也。

魏・秦、楚を伐つ。魏王欲せず。樓緩、魏王に謂つて曰く、「王、秦と與に楚を攻めずんば、楚且に秦と與に王を攻めん。王、秦・楚をして戦はしめ、王交々之を制せんに如かず」と。

卷第七下

魏下

昭王

秦敗東周。與魏戰於伊闕。殺犀武。魏令下公孫衍乘勝而留於境。請中卑辭割地。以講於秦。爲寶屢謂魏王曰。臣不知衍之所聽於秦。之少多。然而臣能半衍之

秦、東周を敗り、魏と伊闕に戦つて、犀武を殺し、勝に乗じて境に留まる。魏、公孫衍をして、辭を卑うし地を割き、以て講を秦に請はしむ。寶屢の爲めに魏王に謂つて曰く、「臣、衍の秦に聽く所以の少多を知らず。然れども臣能く衍の割を半にして、秦をして王に講せしめん。」王曰く、「奈何。」對へて曰く、「王若かず寶屢に關内侯を與へて趙王をして其行を重くして厚く之を奉ぜしめ、因て揚言して曰はしめんには、『周・魏、寶屢をして以て魏を奉陽君に割いて秦に聽かしめしと聞く』と。夫れ周君・寶屢・奉陽君の穰侯に與ける、首を買ふるの仇也。今和

割。而令秦講。於王。王曰。奈何。對曰。王不若與寶。屢關內侯。而令趙王重。其行。而厚奉之。因揚言曰。聞周魏令中寶。屢以割魏於秦。陽君而聽秦矣。夫周君寶。屢奉陽君之與。穰侯。寶首之仇也。今行和者。寶屢也。割割者。秦陽君也。太后恐其不。因穰侯也。而欲收之。必以少割。請合於王。而和於東周。與魏也。

● 正解の説に従ひ、此の句の位置を改め譯す ● 或人が也。寶屢は魏人 ● 許す也。地を割くを秦に許すをいふ ● 割讓する地 ● 爵の名 ● 趙王をして寶屢の秦に之く其行を重々しくし、厚く之れを奉ぜしむと也 ● 魏の地を割くの全權を趙の秦陽君に委ね、以て秦の條件を聽いていよく講和を爲すと聞く ● 秦の公族 ● 互に首を取換へんとする程の仇 ● 割地の權を委ねられたる者は ● 穰侯は太后の弟なれば也 ● 太后、周魏に合ふを以て秦王に請ふを謂ふ

秦趙約而伐魏。魏王患之。芒卯曰。王勿憂也。臣請發張倚。使謂趙

秦・趙約して魏を伐つ。魏王之を患ふ。芒卯曰く、「王憂ふる勿れ。臣請ふ張倚を發せん」と。趙王に謂はしめて曰く、「夫れ魏は、寡人固より刑有たず。今大王、秦を收めて魏を攻む。寡人請ふ魏を以て大王に事へん」と。趙王喜び、相

王曰。夫鄴。寡人固刑弗有也。今大王收秦而攻魏。寡人請以鄴事大王。趙王喜。召相國。而命之曰。魏王請以鄴事寡人。使寡人絕秦。相國曰。收秦攻魏。利不過鄴。今不用兵而得鄴。請許魏。張倚因謂趙王曰。敝邑之吏效城者。已在鄴矣。大王且何以報魏。趙王因令

國を召して之に命じて曰く、「魏王、鄴を以て寡人に事へんと請ひ、寡人をして秦に絶たしむ」と。相國曰く、「秦を收めて魏を攻むるも、利は鄴に過ぎじ。今兵を用ひずして鄴を得。請ふ魏に許さん」と。張倚因て趙王に謂つて曰く、「敝邑の吏の、城を效す者、已に鄴に在り。大王且に何を以てか魏に報いんとする」と。趙王因て關を閉ちて秦に絶たしむ。秦・趙大いに惡し。芒卯、趙使に應じて曰く、「敝邑の大王に事ふる所以は、鄴を完うせんが爲め也。今鄴を效せるは、使者の罪也。卯は知らず」と。趙王、魏の秦の怒を承けんを恐れ、遽かに五城を割きて以て魏に合して秦を支ふ。

● 發遣してよろしく取計らはん ● 乃ち張倚を遣して ● 一に「形」に作る、蓋し「刑・形」相通ずる也、形勢の義。正解には「固刑」は「計固」の誤とせり ● 鄴を以て趙を致して之に事へん ● 宰相 ● 味方にして ● 既勝の利は鄴を得るに過ぎじ ● 交り惡し ● 鄴を受取らんとする趙の使者に應對して曰く ● 既に秦を怒らしたる上に重ねて又魏を怒らせんを恐れて也。或は「承」を樂じと解し、魏が、秦の趙を怒るに乗じて來り伐たんとするを恐れの意味とも見るを得ん

閉關絕秦。秦趙大惡。芒卯應趙使曰。敝邑所以事大王者。爲完鄴也。今效鄴者。使者之罪也。卯不知也。趙王恐魏承秦之怒。遂割五城。以合於魏。而支秦。

芒卯謂秦王曰。王之士未也。臣聞明王不背中而行。王之所欲於魏者。長平王屋洛林之地也。王能使臣爲魏之司徒。則臣能使魏獻之。秦王曰。善。因任之以爲魏之司徒。謂魏王曰。所患者。上地也。秦之所欲於

芒卯、秦王に謂つて曰く、「王の士未だ之を中に爲す者あらず。臣聞く、明王は中に背いて行はずと。王の魏に欲する所は、長平・王屋・洛林の地也。王能く臣をして魏の司徒たらしめば、則ち臣能く魏をして之を獻せしめん。」秦王曰く、「善し」と。因て之れを任じて以て魏の司徒となす。魏王に謂つて曰く、「王の患ふる所は上地也。秦の魏に欲する所は長平・王屋・洛林の地也。王之れを秦に獻せば、則ち上地憂患なけん。因て請うて以て兵を下し、東、齊を撃たば、地を攘ふこと必ずや遠からん。」魏王曰く、「善し」と。因て之れを秦に獻す。地入つて數月、而も秦兵下らず。魏王、芒卯に謂つて曰く、「地入つて已に數月、而も秦兵下らざるは何ぞや。」芒卯曰く、「臣死罪あり。然りと雖も、臣死せば則ち契秦に折けて、王以て秦を責むる無けん。王因て其罪を赦さば、臣、王の爲めに約を秦に責

めん」と。乃ち秦に之き、秦王に謂つて曰く、魏の、長平・王屋・洛林の地を獻せし所以は、以て大王の兵を下して、東、齊を撃たんと欲するに意あれば也。今地已に入つて、而も秦兵下る可らずんば、臣は則ち死人也。然りと雖も、後山東の士、利を以て王に事ふる者なからん」と。秦王懼然として曰く、國、事あり。未だ兵を下すに濟らざりし也。今兵を以て従はん」と。後十日、秦兵下る。芒卯、秦・魏の兵に并せ將として、以て東、齊を撃ち、地を啓くこと二十二縣なり。

- 諸侯の中に居りて秦の爲に便宜を計る者
- 諸侯の中に然るべき者を置き萬事其者の意見通りに行ふ
- 敵教を司る者。前に所謂中に爲す者たらしめばの意也
- 保證して
- 芒卯が
- 魏魏に兩屬せる上黨の地
- 秦に請うて秦の援兵と魏兵とを下す
- 攘奪する
- 秦に入つて
- 約東の手形が秦に破毀されて
- 魏に殺されん
- 臣の死は辭する所にあらざるも
- 驚きあわてて
- 贈に過ず、給也。十分に事足る

魏者。長平王屋洛林之地也。王獻之秦。則上地無憂。患。因請以下兵。東擊齊。攘地必遠矣。魏王曰。善。因獻之秦。地入數月。而秦兵不下。魏王謂芒卯曰。何也。芒卯曰。臣有死罪。雖然。臣死。則契折於秦。王無以責秦。王因赦其罪。臣爲王責約於秦。乃之秦。謂秦王曰。魏之所以獻長平王屋洛林之地者。有意欲以下大王之兵。東擊齊也。今地已入。而秦兵不可下。臣則死人也。雖然後山東之士。無以利事王者矣。秦王懼然曰。國有事。未濟下兵也。今以兵從。後十日。秦兵下。芒卯并將秦魏之兵。以東擊齊。啓地二十二縣。

蘇代拘於魏。欲走而之齊。魏氏閉關而不可通。齊使蘇鳳爲之謂魏王曰。齊請以宋地封涇陽君。而秦非不受也。夫秦非不利有齊而得宋也。然其所以不受者。不信齊王與蘇代也。今秦見齊魏之不合也。如此其甚也。則齊必不欺秦。而秦信齊矣。齊秦合。而涇陽君有宋地。則非魏之利也。故王不如復東蘇代。秦必疑齊而不聽也。夫齊秦不合。天下無憂。伐齊成。則地廣矣。

蘇代、魏に拘はれ、走つて齊に之かんと欲す。魏氏、關を閉ぢて通ぜず。齊、蘇鳳をして之が爲めに魏王に謂はしめて曰く、「齊、宋の地を以て涇陽君を封ぜん」と請へども、秦受けず。夫れ秦、齊を有して宋の壑を得るを利とせざるに非ず。然れども其受けざる所以は、齊王と蘇代とを信ぜざれば也。今秦、齊・魏の合せざるや、此の如く其甚だしきを見れば、則ち齊必ず秦を欺かずとして、秦、齊を信ぜん。齊・秦合して、涇陽君、宋の地を有たば、則ち魏の利に非じ。故に王復た蘇代を東せしめんにかかず。秦必ず齊を疑うて聽かざらん。夫れ齊・秦合はずんば、天下憂なく、齊を伐つて成らば、則ち地廣まらん」と。

- 魏は燕の爲めに抑留拘禁したる也
- 秦王の弟
- 齊の交を得て
- 齊は蘇代と善し、而るに魏之を拘ふ、是れによりて齊魏の合はざる甚しきを知る
- 魏は宋に近し、秦が宋を得れば則ち日々侵さる、慮あれば也
- 東齊に入らしめんに

五國伐秦。無功而還。其後齊欲伐宋。而秦禁之。齊令宋郭之秦。請合而以伐宋。秦王許之。魏王畏秦。秦之合也。欲講於秦。謂魏王曰。秦王謂宋郭曰。分宋之城。服宋之強者。大國也。乘宋之敵。而與王爭得者。楚魏也。請爲王母禁楚之伐魏也。而王獨舉宋。王之伐宋。

五國、秦を伐ち、功なくして還る。其後、齊、宋を伐たんと欲し、而して秦之を禁ず。齊、宋郭をして秦に之き、合して以て宋を伐たんと欲しむ。秦王之を許す。魏王、齊・秦の合せんを畏れて、秦に講せんと欲す。魏王に謂つて曰く、「秦王、宋郭に謂つて曰く、『宋の城を分ち、宋の強を服する者は、大國也。宋の敵に乗じて、王と得を争ふ者は楚・魏也。請ふ王の爲めに、楚の魏を伐つを禁する母からん。而れば王獨り宋を舉げよ。王の宋を伐つや、請ふ剛柔而も皆之を用ひよ。宋の如きは、之を欺くとも逆と爲さず、之を殺すとも讎と爲さざる者也。王と講する無くして以て地を取れ。既に已に地を得ば、又力を以て之を攻めよ。宋を啗ふを期せんのみ』と。臣此言を聞いて、竊に王の爲に悲む。秦必ず且に此を王に用ひんとす。又必ず且に王を劫かして以て地を求めんとす。既に已に地を得ば、又且に力を以て王を攻めんとす。又必ず王に謂つて、王をして齊を輕んぜしめん。齊・魏の交已に醜しくば、又且に齊を攻めて以て更に王に索めんと

也。請剛柔而皆用之。如宋者。欺之不爲。逆殺之不爲。離者也。王無與之。講以取地。既已得地矣。又以力攻之。期於啗宋而已矣。臣聞此言。而竊爲王悲。秦必且用此於王矣。又必且劫王以求地。既已得地。又且以力攻王。又必謂王使王輕齊。齊魏之交已醜。又且收

す。秦嘗て此を楚に用ひ、又嘗て此を韓に用ふ。願はくは王の深く之を計らんとす。秦の魏に善き、知る可らざるのみ。故に王の爲めに計るに、太上海は秦を伐ち、其次は秦を賓し、其次は約を堅くし、詳はり講じて、與國相離する無き也。秦・齊合は、國爲す可らざらんのみ。王其れ臣に聽いて、必ず與に講ずる無かれ。秦の權、魏に重く、魏冉明かに熱せり。是の故に又足下の爲めに秦を傷はんとする者、敢て顯はにせざるなり。天下、秦を伐たしむ可くんば、則ち陰かに勸めて敢て圖らず、天下の秦を傷ふを見るや、則ち先づ與國を驚いで以て自ら解く。天下、秦を賓せしむ可くんば、則ち與國に劫かされて已むを得ざる者となす。天下不可なれば、則ち先づ去つて秦と上交を爲し、以て自ら重うす。是の如き人は、王を驚いで以て資となす者なり、而るを焉くんぞ能く國を患より免かれしめん。

- 成皇の役也。趙策に出づ
- 講和せんと
- 或人が
- 分取し
- 齊を指す
- 齊王と利得を爭ふ
- 秦は楚が魏を伐つを止めずして相争はしめん、齊王其間に乘じて宋を取れと也
- 齊が宋を伐つに驚

以更索於王。秦嘗用此於楚矣。又嘗用此於韓矣。願王之深計之也。秦善魏。不可知也。故爲王計。太上伐秦。其次賓秦。其次堅約。而詳講。與國無相離也。秦齊合。國不可爲也。已。王其聽臣也。必無與講。秦權重魏。魏冉明也。是故又爲足下傷秦者。不取顯也。天下可令伐秦。則陰勸而弗取圖也。見天下之傷秦也。則先驚與國。而以自解也。天下可令賓秦。則爲下劫於與國。而不得已者。天下不可。則先去而以秦爲上交。以自重也。如是人者。驚王以爲資者也。而焉能免國於患。

國を患に免かれしむる者は、必ず三節を窮めて其の上を行ふ。上不可ならば、則ち其中を行ひ、中不可ならば、則ち其下を行ひ、下不可ならば、則ち秦と兩生せざるを明かにして以て秦を殘へ。秦をして皆百怨百利なく、惟だ己をのみ會

- (意)も柔(魏)も皆之を用ひ其手段を違ふ勿れと也
- 正解には「宋ハ弱小ニテ齊ニ逆歸スル能ハズ」と解せり。宋王は暴戻なれば之を欺きて之を殺すも逆歸(非道不都合の意)にあらず。此説によれば「逆を」「善を」と訓ずべし
- 之と同様の手段筆法
- 惡也
- 求むる所あらんとす
- 情偏知り難し。信ずべからず
- 最上の計
- 排斥し
- 從約を堅うし伴つて秦と和す。詳は伴に逆ず
- 魏の國如何ともなし離からん
- 秦と
- 秦の種侯魏冉はよく魏國の情に精熟して凡ての事が直ちに分る故
- 客の、魏王の爲めに秦を害せんとする者
- 自ら表面に立ちて討伐を圖る事なく
- 同盟國を賣りて罪を之にさせて自ら辨をなせ
- 排斥
- 止むを得ずやりたる也として辨解し
- 天下の形勢が秦を伐ち又は損すべからずは
- 計る計策を爲す人は
- 自己の資とす

其下不可。則明不與秦。兩生以殘秦。使秦皆無。已怨百利。惟已之曾安。今足下驚之。以合於秦。是免國於患。者之計也。臣何足。以當之。雖。然。顧足下之論。臣之計也。燕齊。離國也。秦兄弟之交也。合。離國。以伐。婚姻。臣。爲。之。苦矣。黃帝。戰。於。涿鹿。之。野。而。西戎。之。兵。不。

安からしめんとせば、今足下之を驚いで、以て秦に合へ。是れも國を患に免かれしむる者の計ならん。臣何ぞ以て之に當るに足らん。然りと雖も願はくは足下の臣の計を聽かんことを。燕は、齊とは離國也、秦とは兄弟の交也。離國を合して以て婚姻を伐つ、臣之が爲めに苦めり黃帝、涿鹿の野に戦つて、西戎の兵至らず、禹、三苗を攻めて、東夷の民赴かざりき。燕・齊を以て秦を伐つは、黃帝だに難しとする所也。而れども臣以て燕の甲を致して、齊の兵を起せり。臣又偏なく三晉の吏、奉陽君・孟嘗君・韓氓・周最・韓餘爲の徒に事へて、従つて之に下れり。其の秦を伐つ疑を恐るゝや、又身自ら秦に醜まれて之に扮し、天下の秦符を焚かんと請へる者は臣也。次に符を焚くの約を傳へし者も臣也。次に五國をして約して秦關を閉ぢしめたる者も臣也。奉陽君・韓餘爲、既に和し、蘇脩・朱嬰皆陰かに邯鄲に在り。臣又齊王に説いて、往いて之を敗らん。天下共に講じ、因て蘇脩をして天下の語を遊せしめて、齊を以て上交と爲さん。兵、魏を伐たんと請

は、臣又之を争ふに死を以てして果し、西、蘇脩に因て重ねて報ぜん。臣、秦權の重を知らざるに非ず。然り而して之を爲す所以は、足下の爲め也」と。

至。禹攻三苗。而東夷之民不赴。以燕齊伐秦。黃帝之所難也。而臣以致燕甲。而起齊兵。矣。臣又編事三晉之吏。奉陽君。孟嘗君。韓氓。周最。韓餘。爲徒。從而下之。恐其伐秦之疑也。又身自醜於秦。扮之。請於天下之。秦符者。臣也。次傳焚符之約者。臣也。次使五國約閉。

● 上擲の太上と其次と其次と也 ● 兩立せず。秦を離すか自かと離るゝか ● 此の邊古來異説紛々殆ど遵從する所を知らず、姑く愚意を以て解す。秦をして利もなく魏を護む事もなく、只其自國を安んずるのみにて敢て兵を出す事を爲さしめじとならば、前に言へるが如き策士を賣り之を出しぬきて其の計策によらずして秦と合せよとならん、自は増也 ● 諱辭也 ● 婚姻を結びたる國 ● 婚姻の國。燕齊を合して秦を伐つをいふ ● 晉國を合して以て婚姻を伐つは帝王にても成し難しとの意にて引例したる也 ● 兵を起し。以下數項凡て將來の事となすも亦通アベシ ● 節を用してそれらの人々の機嫌を取り ● 其人々の秦を伐つ策を遲疑して決せざるを恐るるや ● 仲井履軒の説に従ひ、扮を裝ふとし、今秦を伐つ議を唱ふるも人の或は之を信ぜざるを恐れ、故意に自ら秦に惡まるゝやうにし、その秦に合はざるの體を明かに裝ふと解す。正解には「醜ハ猶本義ノゴトシ、扮ハ醜ヲラクハ當ニ紛ニ作ルベシ、言フハ秦陽之徒ヲ伐ツノ決セザルヲ恐レ又身自ラ秦ノ從約ヲ紛亂センヲ進ヅ、故ニ身ヲ挺シテ敢テ爲スコト下文ノ如シ」といへり、これによれば「又身自ら秦の之を扮(ミダ)さん醜(ハ)グ」と訓ずべし ● 天下諸侯の間に在る秦の切符 ● 善く諸侯の間に傳へし者 ● 秦と通ぜざるをいふ ● 伐秦の議に和し ● 共に三晉の使 ● 伐秦を議するを謂ふ ● 秦に往きて宋郭の合秦の約を敗らん ● 揚言せしめ。吹聴せしめ ● 齊の兵魏を伐たんと秦に請はす。「兵」は「齊」の誤ともいふ ● 死を以て齊王に争ひて魏を伐たざるの議を決し ● 脩は邯鄲にあり、齊の西地、即ち西の方に居る蘇脩に因て重ねて報ずるに

王聞之。夜見孟嘗君。告之曰。秦且攻魏。子爲寡人謀奈何。孟嘗君曰。有諸侯之侯也。王曰。寡人願子之行也。重爲之約。車百乘。孟嘗君曰。文願借兵以救魏。趙王曰。寡人不能。孟嘗君曰。夫敢借兵者。以忠王也。王曰。可得聞乎。孟嘗君曰。夫趙

且に魏を攻めんとす。子、寡人の爲めに謀らば奈何。」孟嘗君曰く、「諸侯の救あらば、則ち國存す可し。」王曰く、「寡人子の行かんことを願ふ」と。重く之が爲めに車百乘を約す。孟嘗君、趙に之き、趙王に謂つて曰く、「文願はくは兵を借りて以て魏を救はん。」趙王曰く、「寡人能はず。」孟嘗君曰く、「夫れ敢て兵を借るは、以て王に忠ならんとすれば也。」王曰く、「聞くを得可きか。」孟嘗君曰く、「夫れ趙の兵、能く魏の兵より強きに非ず、魏の兵、能く趙より弱きに非ず、然れども趙の地、歳々危からずして、民歳々死せざるに、魏の地、歳々危うして、民歳々死するものは何ぞや。其の西に趙の蔽たるを以てなり。今趙、魏を救はずんば、魏、秦に敢り盟はん。是れ趙、強秦と界を爲すなり。地亦且に歳々危からんとし、民亦且に歳々死せんとす。此れ文の大王に忠ならんとする所以なり」と。趙王許諾し、爲めに兵十萬、車三百乘を起す。又北、燕王に見えて曰く、「先日公子嘗て兩主の交を約せり。今秦且に魏を攻めんとす。願はくば大王の之

之兵。非能強之於魏之兵。魏於趙也。然而趙之地不歳危。而民不歳死。而魏之地歳危。而民歳死者。何也。以其西爲趙蔽也。今趙不救魏。魏歎盟於秦。是趙與強秦爲界也。地亦且歳危。民亦且歳死矣。此文之所以忠於大王也。趙王許諾。爲起兵十萬車

を救はれんことを。」燕王曰く、「吾歳熟せざる二年。今又數千里を行いて以て魏を助くるは、且に奈何せんとする。」田文曰く、「夫れ數千里を行いて人を救ふは、此れ國の利なり。今魏王、國門を出で、軍を望見す。數千里を行いて人を助けん」と欲すと雖も、得可けんや」と。燕王尙ほ未だ許さず。田文曰く、「臣、便計を王に效さん。王、臣の忠計を用ひずんば、文請ふ行らん。天下の將に大變あらんとするを恐る。」王曰く、「大變聞くを得可きか。」曰く、「秦、魏を攻め、未だ之に克つ能はざるも、而も彙已に燔かれ游已に奪はる。而るに燕、魏を救はずば、魏王、節を折り地を割き、國の半を以て秦に與へん。秦必ず去らん。秦已に魏を去らば、魏王、韓・魏の兵を悉し、又西、秦の兵を借り、以て趙の衆に因て、四國を以て燕を攻めん。王且に何れか利ありとする。數千里を行いて人を助くるを利とするか。燕の南門を出で、軍を望見するを利とするか。則ち道里近くして、輸すこと又易し。王何れをか利とする。」燕王曰く、「子行け、寡人子に聽か

三百乘。又北見燕王曰。先日公子嘗約二兩王之交矣。今秦且攻魏。願大王之救之。燕王曰。吾歲不熟二年矣。今又行二數千里而以助魏。且奈何。田文曰。夫行二數千里而救人者。此國之利也。今魏王出國門而望見軍。雖欲行二數千里而助也人。可得乎。燕王尚未許也。田文曰。臣效二便計於王。王不用二臣之忠計。臣請行矣。恐天下之將有二大變也。王曰。變可得聞乎。曰。秦攻魏。未能克之也。而臺已燔。游已奪矣。而燕不救魏。魏王折節割地。以二國之半與秦。秦必去矣。秦已去魏。魏王悉韓魏之兵。又西借秦兵。以因二趙之衆。以二四國攻燕。王且何利。利行二數千里而助也人乎。利出二燕南門而望見軍上乎。則道里近。而輸又易矣。王何利。燕王曰。子行矣。寡人聽子。乃爲之起兵八萬車二百乘。以從二田文。魏王大說曰。君得二燕趙之兵。甚衆且亟矣。秦王大恐。割地請講於魏。因歸燕趙之兵。而封二田文。

● 田文 ● 用意す。備ふ ● 孟嘗君の自稱 ● 其譚を聞きたし ● 魏は趙の西に在りて之が險蔽たるを以て也 ● 血を飲りて秦に降を盟はんと也 ● 孟嘗君は又北に行きて ● 孟嘗君の父田嬰とし、或は燕の公子とす ● 燕魏兩主 ● 國伐たる故に國門を出て敵軍を窺見する也 ● 遊觀の所。臺も燬かれ、游觀の所も奪はるとは、秦軍の魏國に入る事の深きをいふ也 ● それとも四國の敵軍に包圍せられ、國門を出て其の敵軍を窺見するを利とするか ● 輸すは軍糧を送るをいふ。王は數千里を行きて魏を助くるは難儀と言はる、然らば四國の敵を御引受けになれば、此方は手近かにて輸送も御便利ならんと、王の言を反して皮肉に謂へる也

穰侯攻二大梁。乘二北郢。魏王且從。謂穰侯曰。君攻楚。得宛穰。以廣陶。得許。鄢陵。以廣陶。秦王不問者。何也。以大梁之未亡也。今日大梁亡。許鄢陵必議。議則君必窮。爲君計者。勿攻便。

穰侯、大梁を攻め、北郢に乗す。魏王且に従はんとす。穰侯に謂つて曰く、「君楚を攻め宛穰を得て以て陶を廣め、齊を攻め剛博を得て以て陶を廣め、許・鄢陵を得て以て陶を廣む。秦王問はざるものは何ぞや。大梁の未だ亡びざるを以て也。今日大梁亡びば、許・鄢陵必ず議せられん。議せられれば則ち君必ず窮せん。君の爲めに計るに、攻むる勿き便なり」と。

● 秦將 ● 魏の都 ● 魏の別邑といひ、或は「郢」又は「郢」の誤といふ。梁は勝つ也 ● 願服せんとす ● 或人が ● 穰侯の私邑 ● 魏の地 ● 其の私邑を廣めたるを咎め問はざるは ● 私有したるに ついて必ず服従非難を受けん

白珪謂新城君曰。夜行者。能無爲姦。不能禁狗使無吠己也。故臣

白珪、新城君に謂つて曰く、「夜行く者は、能く姦を爲す無きも、狗を禁じて己に吠ゆる無からしむる能はず。故に臣能く君を王に議する無きも、人の、臣を君に議するを禁する能はず」と。

能無議君於王。不能禁人議臣於君也。

秦攻韓之管。魏王發兵救之。昭忌曰。夫秦強國也。而韓魏壤秦。不出攻則已。若出攻。非於韓也。必魏也。今幸而於韓。此魏之福也。王若救之。夫解攻者。必韓之管也。致攻者。必魏之梁也。魏王不聽。曰。若不救韓。韓

●此條は秦策段重の語に同じ。一二八頁を見よ

秦、韓の管を攻む。魏王、兵を發して之を救ふ。昭忌曰く、「夫れ秦は強國也。而して韓、魏は秦に壤す。出で、攻めずんば則ち已む、若し出で、攻めば、韓に於てするに非ずんば、必ず魏ならん。今幸ひにして韓に於いてす。此れ魏の福也。王若し之れを救はば、夫れ攻を解かん者は必ず韓の管也、攻を致さん者は必ず魏の梁ならん」と。魏王聽かずして曰く、「若し韓を救はずんば、韓、魏を怨んで、西、秦に合せん。秦、韓一とならば、則ち魏危からん」と。遂に之れを救ふ。秦果して管を釋て、魏を攻む。魏王大いに恐れ、昭忌に謂つて曰く、「子の計を用ひずして禍至る。之を爲すこと奈何」と。昭忌乃ち之れが爲めに秦王に見えて曰く、「臣聞く、明主の聽くや、以て私を挾さんで攻を爲さずと。是れ參し

怨魏。西合於秦。秦韓爲一。則魏危。遂救之。秦果釋管而攻魏。魏王大恐。謂昭忌曰。不用子之計。而禍至。爲之奈何。昭忌乃爲之見秦。王曰。臣聞明主之聽也。不以挾私爲政。是參行也。願大王無攻魏。聽臣也。秦王曰。何也。昭忌曰。山東之從。時合時離。何時也哉。秦王曰。

て行ふ也。願はくは大王、魏を攻むる無く、臣に聽かんことを。」秦王曰く、「何ぞや。」昭忌曰く、「山東の從、時に合し時に離るゝは何ぞや。」秦王曰く、「識らず。」曰く、「天下の合するは、王の必せざるを以て也。其離るゝは、王の必するを以て也。今韓の管を攻めて、國危く、未だ卒らざるに、兵を梁に移す。天下の從を合する、此れより精なるもの無し。以て秦の求索、必ず支ふ可らずとすればなり。故に王の爲めに計るに、趙を制するに如かじ。秦已に趙を制せば、則ち燕敢て秦に事へずんばあらず、荆、齊獨り從する能はじ。天下、秦に爭敵せば則ち弱からん」と。秦王乃ち止む。

- 城地の名 ● 地帯と相接す ● 攻伐を免るゝ者は ● 來さん。自ら禍を被ぶるに至らんと也 ● 事を聽くや ● 虛心坦懐、己を虚しうして、人の言と彼此參照して行ふと也 ● 合從 ● 態度曖昧にて當にならざる故也 ● 韓の國危よく ● 深くたしか也 ● 天下諸侯は ● 支へ止む ● 楚齊 ● 斯くすれば天下何れの國も

不識也。曰。天下之合也。以王之不必也。其離也。以王之必也。今攻韓之管。國危矣。未卒而移兵於梁。合天下之從。無精於此者矣。以爲秦之求索。必不可支也。故爲王計者。不如制趙。秦已制趙。則燕不敢不事秦。荆齊不能獨從。天下爭敵於秦。則弱矣。秦王乃止。

芮宋欲絕秦趙之交。故令魏氏收秦太后之養地。秦王怒。芮宋謂秦王曰。魏委國於王。而王不受。故委國於趙也。李郝謂臣曰。子言無秦。而養秦太后。以地。是欺我也。故敝邑收之。秦王怒。遂絕趙也。

爲魏謂楚王曰。魏之爲めに楚王に謂つて曰く、「魏を攻めんことを秦に索むとも、秦必ず王に聽

芮宋、秦・趙の交を絶たんと欲し、故に魏氏をして秦の太后の養地を收めしむ。秦王怒る。芮宋、秦王に謂つて曰く、「魏、國を王に委ぬ。而るに王受けず。故に國を趙に委ぬる也。李郝、臣に謂つて曰く、「子、秦無きを言へども、秦の太后を養ふに地を以てす。是れ我を欺く也」と。故に敝邑之を收む」と。秦王怒つて、遂に趙を絶てり。

● 魏人 ● 魏王 ● 魏に魏より太后の養地として奉りし地を授けせしむ ● 國を以て王に聽く、而るに王は魏に對しませ ● 趙人 ● 秦と好を通ずる無きを

曰。索攻魏於秦。秦必不聽王矣。是智困於秦。而交疏於魏也。楚魏有怨。則秦重矣。故王不如下順天下。遂伐齊。與魏便地。兵不傷。交不變。所欲必得矣。

管鼻之令。翟強與秦事。謂魏王曰。鼻之與強。猶晉人之與楚人也。晉人見楚人之急。帶劍而緩之。楚人惡其緩而急之。

かざらん。是れ智、秦に困しんで、交、魏に疏なる也。楚、魏怨あらば、則ち秦重からん。故に王天下に順ひ、遂に齊を伐ち、魏に便地を與へんに如かず。兵傷かず、交變ぜず、欲する所必ず得ん」と。

● 或人が ● 諸國の楚と共に齊を伐たんとする其考に従ひて ● 齊に勝つて地を得、以て魏の便とする所を與ふ ● 楚魏の交合へば秦重からず、齊に勝てば楚重し、即ち欲する所必ず得る也

管鼻之翟強と秦の事に與かる。魏王に謂つて曰く、「鼻之と強とは、猶ほ晉人と楚人のごとし。晉人は楚人の急に劍を帶ぶるを見て之れを緩うし、楚人は其の緩きを惡んで之を急にす。今鼻之の入るや、秦の傳舎、以て之れを舍するに足らず。強の入るや、秦に蔽はるゝ者なし。強は王の貴臣也。而るに秦此の若く其れ甚だし。安くんぞ可ならん」と。

● 正解に原文「令」は鼻の眼とす。或は原文のまゝ「翟強をして秦の事に與らしむ」と訓じ、管鼻之(之は助語)

今鼻之入。秦之傳舍。舍不之入。無下蔽於秦者。強王貴臣也。而秦若此其甚。安可。

成陽君欲下以韓魏聽秦。魏王弗利。白圭謂魏王曰。王不如下陰使中人說成陽君曰。君入秦。秦必留君。而以多割於韓矣。韓不聽。秦必留君。而伐韓矣。故君不如安

が正使となり、復強を推薦して同行せし者と解すも亦通ずべし。秦の事とは秦に行く使事。或人復強の爲めに也。正解には「蓋し魏王二人ヲシテ秦使ノ事ニ與ラシム、而シテ鼻ヲ置シ強ヲ輕ズ、故ニ強、秦ニ使スルヲ欲セス、客、強ノ爲ニ魏王ニ説クコト下文ノ如シ」と。但、二人の性質の異同及び秦の二人に對する態度を擧げて二人を使者とするの得失を論ずる者とも見るも亦通ずべし。● 性急に ● ゆる／＼と氣水にやる ● 秦之を厚遇し、守衛處にて傳舍も容る、能はずと也 ● 原文「舍不」の「舍」は衍として削り譯す ● 守衛する者なきをいふなり、冷遇するの甚しきをいふ

成陽君、韓・魏を以て秦に聽かんと欲す。魏王利とせず。白珪、魏王に謂つて曰く、「王陰かに人をして成陽君に説いて曰はしむるに如かず、「君、秦に入らば、秦必ず君を留めて、以て多く韓を割かん。韓聽かすんば、秦必ず君を留めて、韓を伐たん。故に君安行して質を秦に求めんに如かず」と。成陽君必ず秦に入らじ。秦韓合せすんば、則ち王重からん」と。

● 韓人にして秦に善き者 ● 韓の地を割き取らんせん ● 餘行して進まず。人質を秦に求め以て質を得て後に行かんとするを示せと也 ● 然らば其事成らずして也

行求質於秦。成陽君必不入秦。秦韓不取合。則王重矣。

安釐王

秦敗魏於華。走芒卯而圍大梁。須賈爲魏謂穰侯曰。臣聞魏氏大臣父兄。皆謂魏王曰。初時惠王伐趙。戰勝乎三梁。十萬之軍拔邯鄲。趙氏不割。而邯鄲復歸。齊人攻燕。殺子之。破故國。

秦、魏を華に敗り、芒卯を走らして大梁を圍む。須賈、魏の爲めに穰侯に謂つて曰く、「臣聞く、魏氏の大臣父兄、皆魏王に謂つて曰く、「初時・惠王、趙を討ち、戦ひ三梁に勝つて、十萬の軍、邯鄲を抜きしも、趙氏割かずして、邯鄲復歸し、齊人、燕を攻め、子之を殺して故國を破りしも、燕割かずして、燕國復歸せり。燕・趙の、國全く兵勁くして、地諸侯に并せられざる所以は、其の能く難きを忍んで地を出すを重ぜしを以て也。宋・中山は、數々伐たれ數々割いて、隨つて以て亡びたり。臣以爲らく、燕・趙法る可くして、宋・中山、爲す無かる可しと。夫れ秦は貪戾の國にして親しみ無く、魏を蠶食し、晉國を盡くし、戦ひ舉子に勝つて、八縣を割き、地未だ畢く入らずして、兵復た出づ。夫れ秦何の厭く

燕不割。而燕國復歸。燕趙之所。以國全兵勁。而地不井。乎諸侯者。以其能忍。難而重。出地也。宋中山數伐。數割。而隨以亡。臣以爲燕趙可法。而宋中山可無爲也。夫秦貪戾之國。而無親。置食魏。盡晉國。戰勝。舉子。割八縣。地未畢入。而兵復出矣。夫秦何厭之有哉。今

ことか之あらん。今又芒卯を走らし、北地に入る。此れ但だ梁を攻むるのみに非ず、且に王を劫かして以て多く地を割かんとする也。王必ず聽く勿れ。今王、楚・趙に倍きて講せば、楚・趙怒つて、王と争うて秦に事へ、秦必ず之を受けん。秦、楚・趙の兵を挾さんで以て復た攻めば、則ち國、亡を救はんこと、得可らざらんのみ。願はくは王の必ず講する無からんを。王若し講せんと欲せば、必ず少しく割いて質を有て。然らずんば必ず欺かれん」と。是れ臣の魏に聞く所也。願はくは君の是を以て事を慮らんを。周書に曰く、「維れ命、常に于てせず」と。此れ幸の數す可らざるを言へるなり。夫れ戰ひ舉子に勝つて八縣を割く。此れ兵力の精なるに非ず、計の工なるにも非ず。天幸を多しと爲す。今又芒卯を走らし北地に入り、以て大梁を攻む。是れ天幸を以て自ら常とする也。智者は然らず。臣聞く、魏氏、其百縣の勝兵を悉して、以て止まりて大梁を成ると。臣以爲ふに三十萬に下らざらん。三十萬の衆を以て、十仞の城を守る。臣以爲らく、

又走芒卯。入北地。此非但攻梁也。且劫王以多割也。王必勿聽也。今王循楚趙怒而講。楚趙怒而與王爭事。秦秦必受之。秦挾楚趙之兵以復攻。則國救亡不可得也。已願王之必無講也。王若欲講。必少割而有質。不然必欺。是臣之所聞於魏也。願君之以此是慮事也。

湯武復生くと雖も、攻め易からじと。夫れ輕くしく楚・趙の兵を信じ、十仞の城を陵ぎ、三十萬の衆を戴いて、志必ず之を舉げんとす。臣以爲らく、天下の始めて分れてより、以て今に至るまで、未だ嘗て之あらじと。攻めて拔く能はずんば、秦兵必ず罷れ、陰必ず亡びん。則ち前功必ず棄れん。今魏方に疑ふ。少割を以て收む可し。願はくは君の、楚・趙の兵の未だ大梁に任らざるに及んで、亟かに少割を以て魏を收めんことを。魏方に疑ふ。而るを少割を以て和を爲すを得ば、必ず之を欲すべく、則ち君、欲する所を得ん。楚・趙、魏の己に先だつて講するを怒るや、必ず争うて秦に事へ、從是を以て散せん。而して君後に擇べ。且つ君の嘗て晉國を割いて地を取るや、何ぞ必ずしも兵を以てせしならんや。夫れ兵用ひずして、魏は絳・安邑を效さん。又陰の爲めに兩を啓き、機をもて故宋を盡くし、衛は尤憚を效さん。秦兵已に全うして君之を制せば、何を求めてか得ざらん、何を爲してか成らざらん。臣願はくは君の熱計して、危を行ふ無からんと

周書曰。維命不于常。此言不幸之不可數也。夫戰勝八縣。子而割之。此非兵力之精。非計之工也。大幸為多矣。今又走芒卯。入北地。以攻大梁。是以天幸自為常也。智者不然。臣聞魏氏悉其百縣勝兵。以止戍大梁。臣以為不下三十萬。以三三十萬之衆。守二十倍之城。臣以為雖湯武復生。弗易攻也。夫輕信楚趙之兵。陵十倍之城。載三十萬之衆。而志必舉之。臣以為自天下之始分。以至於今。未嘗有之也。攻而不能拔。秦兵必罷。陰必亡。則前功必棄矣。今魏方疑。可以少割。收上也。願君之及楚趙之兵。未任於大梁也。亟以少割。收魏。魏方疑。而得以下少割。為和。必欲之。則君得所欲矣。楚趙怒於魏之先已講也。必爭事秦。從是以散。而君後擇焉。且君之嘗割晉國取地也。何必以兵哉。夫兵不用。而魏效絳安邑。又為陰啓兩。機盡也。

●魏の將 ●地を割かずして ●邯鄲復び趙に歸し ●番都 ●地を出すことを拒み重んじて輕々しくせず ●魏の將。一に墨子(エキシ)に作る ●魏王に對して其大臣のいふ語 ●背いて秦と和を講せば也。原文「循」は字の誤 ●魏の己を出し抜きて講和したるを怒り ●魏の地を割いて、秦より人質を求めよ ●臣は賈自ら調ひ、君は穰侯を指す ●廉誥之幣に出づ。天運は一定不變のものにあらずと也 ●天の幸運はいつも變らぬものと思ふ也 ●勇力よく事に勝ふる丁男 ●止まりて還らざるをいふ ●一切は八尺 ●史記に「背」に作る。或は「倍」の誤にて、楚趙の救兵背後にあるをたのむの義と解すべきか ●十倍の上に在るが故に敵くといふ ●即ち阿、穰侯の封邑也 ●和戰何れにせんかと迷ひ疑ふ ●史記「至」に作る「任」は字の誤か ●欲する所の地 ●合從 ●さすれば凡て君の黨通りになるべき故、何れとも御都合よき道を探ればよ ●河西河東の兩道。「兩」の下に「道」の字を脱せるならん ●其機會を以て宋の故地を盡く下し ●原文「令」の字を史記に因て「全」に改む

周書曰。維命不于常。此言不幸之不可數也。夫戰勝八縣。子而割之。此非兵力之精。非計之工也。大幸為多矣。今又走芒卯。入北地。以攻大梁。是以天幸自為常也。智者不然。臣聞魏氏悉其百縣勝兵。以止戍大梁。臣以為不下三十萬。以三三十萬之衆。守二十倍之城。臣以為雖湯武復生。弗易攻也。夫輕信楚趙之兵。陵十倍之城。載三十萬之衆。而志必舉之。臣以為自天下之始分。以至於今。未嘗有之也。攻而不能拔。秦兵必罷。陰必亡。則前功必棄矣。今魏方疑。可以少割。收上也。願君之及楚趙之兵。未任於大梁也。亟以少割。收魏。魏方疑。而得以下少割。為和。必欲之。則君得所欲矣。楚趙怒於魏之先已講也。必爭事秦。從是以散。而君後擇焉。且君之嘗割晉國取地也。何必以兵哉。夫兵不用。而魏效絳安邑。又為陰啓兩。機盡也。

故宋。備效尤懼。秦兵已令。而君制之。何求而不得。何為而不成。臣願君之熟計。而無行危也。穰侯曰。善。乃罷梁圍。

秦取魏於華。魏王且入朝於秦。周新謂王曰。宋人有三年反。而名其母。其母曰。子學三年。反而名我者。何也。其子曰。吾所賢者。無過堯舜。堯舜名。吾所大者。無大天地。天地名。今母賢。不過堯舜。母大。不過天地。是以名母。

秦、魏を華に敗る。魏王、且に秦に入朝せんとす。周新王に謂つて曰く、「宋人學ぶ者あり。三年にして反つて其母を名ふ。其母曰く、『子學ぶと三年、反つて我を名ふは何ぞや』と。其子曰く、『吾が賢とする所は堯舜に過ぐる無し。堯舜も名ふ。吾が大とする所は天地より大なるは無し。天地も名ふ。今母の賢は堯舜に過ぎず、母の大は天地に過ぎじ。是を以て母を名ふ』と。其母曰く、『子の學に於けるは、將に盡く之を行はんとするか。願はくは子の以て母を名ふに易ふる有れ。子の學に於けるは、將に行はざる所あらんとするか。願はくは子の且母を名ふを以て後と爲せ』と。今王の秦に事ふるは、尙以て入朝を易ふべき者あらんか。願はくは王の、以て之を易ふる有りて、入朝を以て後と爲さんとを。」魏王曰く、「子、寡人の入つて出でざらんを患ふるか。許綰、我が爲に祝して曰く、入つて出でず

也。其母曰。子之於學者。將盡行之乎。願子之有以易名母也。子之於學也。將有所以不行乎。願子之且以名母爲後也。今王之事秦。尙有可三以易入朝者乎。願王之有以易之。而以入朝爲後。魏王曰。子患寡人入而不出邪。許縮爲我祝曰。入而不出。請殉寡人以頭。周

んば、請ふ寡人に殉するに頭を以てせん」と。周新對へて曰く、「臣の賤の如きも、今人、臣に謂つて、不測の淵に入るも必ず出でん、出でずんば請ふ一鼠首を以て汝の殉と爲さんと曰ふ者あるも、臣必ず爲さざる也。今秦は知る可らざるの國なること、猶ほ不測の淵のごとき也。而して許縮の首は猶ほ鼠首のごとし。王を知る可らざるの秦に内れて、而して王に殉するに鼠首を以てす。臣竊かに王の爲めに取らず。且つ梁なきは、河内なきの急なるに孰れぞや。」王曰く、「梁急なり。」梁なきは、身なきの急なるに孰れぞや。」王曰く、「身急なり。」曰く、「三者を以てせば、身は上也、河内は其の下也。秦未だ其の下を索めざるに、王其上を效す可ならんや」と。王尙ほ未だ聽かず。支期曰く、「王、楚王を視よ。楚王、秦に入らば、王、三乘を以て之に先んぜよ。楚王入らず、楚・魏一たらば、尙ほ以て秦を捍ぐに足れり」と。王乃ち止む。王、支期に謂つて曰く、「吾始め已に應侯に諾せり。今行かすんば、之を欺くなり。」支期曰く、「王、憂ふる勿れ。

新對曰。如臣之賤也。今人有謂臣曰。入不測之淵。而必出。不出。請以一鼠首爲中。汝殉上者。臣必不爲也。今秦不可知之國也。猶不測之淵也。而許縮之首猶鼠首也。內王於不可知之秦。而殉王以鼠首。臣竊爲王不取也。且無梁孰與無河內。急。王曰。梁急。無梁孰與無

臣、長信侯をして請うて王を内るゝ無からしめん。王、臣を待て」と。支期、長信侯に説いて曰く、「王、命じて相國を召す」と。長信侯曰く、「王何をか臣を以て爲さん。」支期曰く、「臣知らず。王急に君を召す。」長信侯曰く、「吾れ王を秦に内るゝは、寧ろ以て秦の爲めにせんや。吾以て魏の爲めにする也。」支期曰く、「君、魏の爲めに計る無く、君其れ自ら爲めに計れ。且つ死を安んずるか、生を安んずるか、窮を安んずるか、貴を安んずるか。君其れ先づ自ら爲めに計つて、後、魏の爲めに計れ。」長信侯曰く、「樓公將に入らんとす。臣今從はん。」支期曰く、「王急に君を召す。君行かすんば、血、君が襟に濺がん」と。長信侯行く。支期其後に隨ふ。且に王に見えんとし、支期先づ入つて王に謂つて曰く、「病者と僞はつて呼んで之を見よ。臣已に之を恐せり」と。長信侯入つて王に見ゆ。王曰く、「病甚だし。吾始め已に應侯に諾せるを奈何せん。意、道に死すと雖も行かんか。」長信侯曰く、「王、行く母れ。臣能く之を應侯に得ん。願は

身急。王曰。身急。曰。以三者。身上也。河內其下也。秦未索其下。而效其上。可乎。王曰。未聽也。支期曰。王視楚。王曰。楚王入秦。王以三乘先之。楚王不入。楚魏爲一。尙足以捍秦。王乃止。王謂支期曰。吾始已諾於應侯矣。今不行者。欺之矣。支期曰。王勿憂也。臣使長信侯請無內王。王待臣也。支期說於長信侯曰。王命召相國。長信侯曰。王何以臣爲。支期曰。臣不知也。王急召君。長信侯曰。吾內王於秦者。寧以爲秦邪。吾以爲魏也。支期曰。君無爲魏計。君其自爲計。且安死乎。安生乎。安貴乎。君其先自爲計。後爲魏計。長信侯曰。樓公將入矣。臣今從支期曰。王急召君。君不行。血濺君襟矣。長信侯行。支期隨其後。且見王。支期先入謂王曰。僞病者乎。而見之。臣已恐之矣。長信侯入見王。王曰。病甚。奈何。支期始已諾於應侯矣。

くは王憂ふる無かれ」と。
 ● 母の名を呼び捨てにす。これ甚だしき孝廉也 ● 喪葬の事をも名を以て呼ぶ ● 他稱を以て母の名いふに易ふるあれ ● 後通しにして爲さざる事にせよ ● 入朝すると其儀留められて復び歸られざるを心配するか ● 若し入つて出でざるが如き事あらんか、頭を以て王に殉せんとにて、一命に掛けて其無事を保證せる言ならん ● 情偏するべからざる ● 魏に取りては、都の梁を失ふと河内を失ふと何れが重大なりや ● 比較すれば ● 身を以て入朝す、即ち最上の身を效す也 ● 楚王の爲す所を見て事を計れ ● 輕き使、急行の輕使を遣し楚王に先だつて秦に至ると也 ● 秦に行く事を也 ● 長信侯を指す ● 支期の一物ありげにいふ態度にあざけつき、且つ魏の廷中に秦への入朝につきて異議ある事をもうすく知りて心配の餘り、「一體どんな御用でせう」と問へるならん ● 御自身の計を爲さるがよからんと、暗に其身の危ふきを諷する也 ● 御殿に入らんとする所なればそれに從つて入らん ● 首が危ふし。殺されん ● 病床に呼んで。原文「乎」は「呼」の誤 ● 病氣にて秦に行かれずと也 ● 古く抑と通用す ● 應侯をして王の行を止めしめん

意雖道死一行乎。長信侯曰。王毋行矣。臣能得之於應侯矣。願王無憂。

華陽之戰。魏不勝秦。明年將使段干崇割地而講。孫臣謂魏王曰。魏不以敗之上割。可謂善用。不勝矣。而秦不以勝之上割。可謂不處期年。乃欲私。是羣臣之也。且夫欲置者。段干子也。王因使之割地。欲地者。秦

華陽の戰に、魏、秦に勝たず。明年將に段干崇をして地を割いて講せしめんとす。孫臣、魏王に謂つて曰く、「魏、收の上を以て割かざるは、善く勝たざるを用ふると謂ふ可く、而して秦、勝の上を以て割かざるは、勝を用ふる能はずと謂ふ可し。今處る明年にして乃ち割かんと欲す。是れ羣臣の私、而して王知らざる也。且つ夫れ璽を欲する者は段干子なるに、王因て之をして地を割かしめ、地を欲する者は秦なるに、王因て之をして璽を授けしむ。夫れ璽を欲する者地を制して、地を欲する者璽を制す、其勢必ず魏なからん。且つ夫れ羣臣は固より皆、地を以て秦に事へんと欲す。地を以て秦に事ふるは、譬へば猶ほ薪を抱いて火を救ふがごとし。薪盡きずんば、則ち火止まじ。今王の地盡くる有りて、秦の求むる窮まり無し。是れ薪火の説也。」魏王曰く、「善し。然りと雖も吾已に秦に

也。而王因使之授。置。夫欲置者制地。而欲地者制置。其勢必無魏矣。且夫姦臣固皆欲以地事秦。譬猶抱薪而救火也。薪不盡。則火不止。今王之地有盡。而秦之求無窮。是薪火之說也。魏王曰。善。雖。然。吾已許秦矣。不可。以。革。也。對曰。王獨不見。夫博者之用。梟耶。欲。食。則。食。欲。握。則。握。今。君。劫。於。羣。臣。而。許。秦。因。曰。不。可。革。何。用。智。之。不。若。梟。也。魏王曰。善。乃。案。其。行。

許せり。以て革む可らず。」對へて曰く、「王獨り夫の博者の梟を用ふるを見ずや。食まんと欲すれば則ち食み、握らんと欲すれば則ち握る。今君、羣臣に劫かされて秦に許し、因て革む可らずと曰ふ。何ぞ智を用ふるの梟に若かざるや。」魏王曰く、「善し」と。乃ち其行を案めぬ。

- 數軍の當時 ● 戰勝の當時魏の地を割かざるは ● 一ヶ年 ● 自ら爲めにするの計。私利を謀る計 ● 秦の封を得其印璽を受けんとす ● 雙方別れ合ひて自利を圖り魏の地遂に盡くるに至らん ● 害を除かんを欲して益々之を甚しからしむる處として最も有名な句 ● 博奕者 ● 梟、博奕の頭を知して梟鳥の形を爲す者 ● 子即ち梟を食はんと欲すれば食ひ、又梟を握り止めて行はざらんとすれば行ふ、即ち便なれば行ひ便ならざれば止め、己の欲するまゝになす也 ● 段干崇の行くを止めて遣らず

秦魏爲二與國。

秦・魏與國たり。齊・楚約して魏を攻めんと欲す。魏、人をして救を秦に求めしむ。

齊楚約而欲攻魏。魏使人求救於秦。冠蓋相望。秦救不出。魏人有唐且者。年九十餘。謂魏王曰。老臣請出西說秦。令兵先臣出。可乎。魏王曰。敬諾。遂约车而遣之。唐且見秦王。秦王曰。丈人芒然。乃遠至此。甚苦矣。魏來求救數矣。寡人知魏之急矣。唐且對曰。大王已

しむ。冠蓋相望んで、秦の救出です。魏人唐且といふ者あり、年九十餘。魏王に謂つて曰く、「老臣請ふ出で、西、秦に説き、兵をして臣に先だつて出でしめん、可ならんか。」魏王曰く、「敬んで諾す」と。遂に車を約して之を遣る。唐且秦王に見ゆ。秦王曰く、「丈人芒然として乃ち遠く此に至る、甚だ苦めり。魏來つて救を求むる數々、寡人魏の急なるを知る。」唐且對へて曰く、「大王已に魏の急なるを知つて、而も救の至らざるものは、是れ大王の籌策の臣、任ふる無ければならん。且つ夫れ魏の一萬乗の國にして、東藩と稱し、冠帶を受け、春秋を祠するものは、秦の強以て與とするに足れりと以爲へば也。今齊・楚の兵已に魏の郊に在り、大王の救至らず。魏急なれば、則ち且に地を割いて齊・楚に約せんとす。王之を救はんと欲すと雖も、豈に及ぶ有らんや。是れ一萬乗の魏を亡つて、二敵の齊・楚を強うする也。竊かに以爲へらく大王の籌策の臣任ふる無ければならん」と。秦王喟然として愁悟し、遽かに兵を發して、日夜魏に赴く。齊・楚之

知魏之急。而救不至者。是大王籌策之臣無任矣。且夫魏一萬乘之國。稱東藩。受冠帶。刺春秋。以爲秦之強。足與也。今齊楚之兵。已在魏郊矣。大王之救不至。魏急。則且割地而約齊楚。王雖欲救之。豈有及哉。是亡一萬乘之魏。而強二敵之齊楚也。竊以爲大王籌策之臣無任矣。秦王喟然愁悟。遽發兵。日夜赴魏。齊楚聞之。乃引兵而去。魏氏復全。唐且之說也。

を聞き、乃ち兵を引いて去れり。魏氏復た全かりしは、唐且の説也。

●同盟國 ●蓋は車蓋。使者の往還絶えざるをいふ ●と、のへ仕度して ●大人といふに同じ。長老の稱 ●罷倦の貌 ●御苦勞なり ●謀臣 ●其事に任ふる ●秦の俗を受けて用ひ、秦の春秋の祭祠に参りたすく。此句前にも見ゆ ●與國。同盟國 ●さうなつた後にてはと補ひ見よ

虞卿謂趙王曰。人之情。寧朝人乎。寧朝於人也。趙王曰。人亦寧朝人耳。何故寧朝於人。虞卿曰。夫魏爲從

虞卿、趙王に謂つて曰く、「人の情、寧人を朝せしめんか、寧人に朝せんか。」趙王曰く、「人亦寧人を朝せしめん耳。何の故にか寧人に朝せん。」虞卿曰く、「夫れ魏、從主となりて、違ふものは范座也。今王能く百里の地若くは萬戸の都を以て、范座を殺さんことを魏に請へ。范座死せば、則ち從事は趙に移る可し。」趙王曰く、「善し」と。乃ち人をして百里の地を以て、范座を殺さんことを魏に請

主。而違者范座也。今王能以百里之地。若萬戸之都。請殺范座。死。則從事可移於趙。趙王曰。善。乃使人以百里之地。請殺范座於魏。魏王許諾。使司徒執范座。而未殺也。范座獻書魏王曰。臣聞趙王以百里之地。請殺無罪之身。夫薄故也。而得

はしむ。魏王許諾し、司徒をして范座を執へしめ、而も未だ殺さず。范座、書を魏王に獻じて曰く、「臣聞く、趙王百里の地を以て、座の身を殺さん請ふと。夫れ無罪の范座を殺すは薄故にして、百里の地を得るは大利也。臣竊かに大王の爲めに之を美とす。然りと雖も一あり。百里の地得可らず、死者復た生く可らず、則ち王必ず天下の爲めに笑はれん。臣竊かに以爲らく其の死人を以て市はんよりは、生人を以て市ふの便なるに若かず」と。又其の後相信陵君に書を遺つて曰く、「夫れ趙・魏は敵戰の國也。趙王咫尺の書を以て來り、而して魏王輕しく之が無めに無罪の座を殺さんとす。座不肖なりと雖も、故の魏の免相也。嘗て魏の故を以て罪を趙に得たり。夫れ國、内に用臣なくば、外、地を得ると雖も、勢守る能はじ。然して今能く魏を守る者は、君に如く莫し。王、趙に聽いて座を殺すの後、強秦、趙の欲を襲ぎ、趙の割に倍せば、則ち君將に何を以てか之を止めんとする。此れ君の累也」と。信陵君曰く、「善し」と。遽かに之を王に言つて之を

百里之地。大
利也。臣竊爲
大王之美之。雖
然而有一焉。
百里之地不
可得而死者
不可復生也。
則王必爲天下
笑矣。臣竊以爲
與下其以死
人市。不若下
以生人市。便
也。又遺其後
相信陵君
書曰。夫趙魏
敵戰之國也。
趙王以三尺
尺之書。來而
魏王輕爲之
殺。無罪之
誅。雖不肯。
故魏之免相也。
皆以魏之故。
得罪於趙。夫
國內無用臣。
外雖得地。勢
不能守。然今
能守魏者。
莫如君矣。王
聽趙殺。誅之
後。強秦襲趙
之欲。倍趙之
割。則君將何
以止之。此君
之累也。信陵
君曰。善。遂言
之。王而出之。

魏將與秦攻
韓。朱己謂魏
王曰。秦與戎
翟同俗。有虎
狼之心。貪戾
好利而無信。
不識禮義。德

出せり。

● 入朝 ● 從約の盟主 ● 趙の志に違ひ趙をして盟主たらしめざる者は魏の相范雎也 ● 趙從主となりて以て人を朝せしむべし ● 官名 ● 小事 ● 殺さずして置きて趙の地を取る方が得策也との意 ● 范雎の後任の相 ● 簡單なる一通の文書。其違かに信ずべからざるをいへるならん ● 魏が從主たるの故を以て用ひて以て國を守るべき臣 ● 趙が割きたる倍の地を割かんとせば ● 范雎を殺し出せり

魏、將に秦と與に韓を攻めんとす。朱己、魏王に謂つて曰く、「秦は戎翟と俗を同じうし、虎狼の心あり、貪戾にして利を好んで信なく、禮義德行を識らず、苟くも利あれば、親戚兄弟を顧みざる、禽獸の若き耳。此れ天下の同じく知る所、厚を施し徳を積む所にあらず。故に太后は母也、而るに憂を以て死せり。穰侯

行。苟有利焉。
不顧親戚兄弟。
若禽獸耳。此
天下之所同
知也。非所施
厚積徳也。故
太后母也。而
以愛死。穰侯
舅也。功莫大
焉。而竟逐之。
兩弟無罪。而
再奪之國。此
於其親戚兄弟
若此。而又況
於仇讎之敵國
也。今大王與
秦伐韓。而益
近秦。臣甚惑
之。而王弗識
也。則

は舅也、功焉より大なるは莫し、而も竟に之を逐ひぬ。兩弟罪なし、而も再び之が國を奪へり。此れ其親戚兄弟に於けるも、此の若し。而るを又況んや仇讐の敵國に於てをや。今大王、秦と與に韓を伐つて益々秦に近づく。臣甚だ之に惑ふ。而るに王識らずんば則ち不明なり。羣臣之を知つて、而も此を以て諫むる莫くんば、則ち不忠なり。今夫れ韓氏は、一女子を以て一弱主を奉じ、内に大亂あり。外安くんぞ能く強秦・魏の兵を支へん、王以て破れずと爲すか。韓亡びば、秦盡く鄭の地を有ちて、大梁と鄰せん、王以て安しと爲すか。王、故地を得んと欲して、今強秦の禍を負ふ、王以て利なりと爲すか。秦は無事の國に非ず、韓亡ぶるの後は、必ず且に事に便せんとす。事に便せんとせば、必ず、易きと利なるに就かん。易きと利なるに就かば、必ず楚と趙とを伐たじ。是れ何ぞや。夫れ山を越え河を踰え、韓の上黨を絶りて強趙を攻めば、則ち是れ復た關與の事也。秦必ず爲さじ。若し河内を道、鄴・朝歌を倍き、漳・滏の水を絶りて、以て

不明矣。羣臣知之。而莫以諫。則不忠矣。今夫韓氏。以一女子。奉一弱主。內有大亂。外安能支強秦魏之兵。王以爲不。破乎。韓亡。秦盡有鄭地。與大梁。鄰。王以爲安乎。王欲得故地。而今負強秦之禍也。王以爲利乎。秦非無事之國也。韓亡之後。必且便事。便事必就

趙の兵と勝を邯鄲の郊に決せば、是れ智伯の禍を受けん、秦又敢てせじ。楚を伐つには、道、山谷を涉り、三千里を行いて、危隘の國を攻む。行く所のもの甚だ遠くして、攻むる所のもの甚だ難し、秦又爲さざらん。若し河外を道、大梁に背いて、上蔡・召陵を右にし、以て楚の兵と陳の郊に決する、秦又敢てせじ。故に曰く、秦必ず楚と趙とを伐たず、又衛と齊とを攻めずと。韓亡ぶるの後、兵出づるの日は、魏に非ずんば攻むる無けん。秦故より懷地・邢丘・安城・堽津を有して、之れを以て河内に臨まば、河内の共・汲危からざる莫けん。秦、鄭の地を有ち、垣雍を得、滎澤を決して大梁に水がば、大梁必ず亡びん。王の使者大いに過てり。乃ち安陵氏を秦に惡す。秦の許を欲する之れ久し。然り而して秦の葉陽・昆陽は、舞陽・高陵と鄰れり。使者の惡するを聽かば、安陵氏に隨つて之を亡ぼすを欲せん。秦、舞陽の北を繞りて、以て東、許に臨まば、則ち南國必ず危からん。南國危き無しと雖も、則ち魏國豈に安きを得んや。

● 西戎北蠻。未開野蠻のえびす ● 厚誼を施し恩徳を積み、道を以て交はるべき國にあらず。但史記には「厚を施し徳を積む所有るに非ず」とあり、その「有」の字に誤脱せるものと見れば「所にあらず」を「所あらざ」と訓じ、秦が魏を救ふも亦利を擧げて行ふ、魏を愛して患を施すに非ずの意と解すべし ● をぞ ● 當時、韓王少にして母后事を用ひ國亂れし也 ● 韓が取りし所の故の鄭の地 ● 魏の都。即ち前文に所謂益々秦に近づく是也 ● 魏が嘗て韓に取られし地 ● 攻伐を以て事とする國也 ● 便宜の事に從はん ● 秦の兵趙奢の爲めに大敗したる地 ● 背也。後ろにし ● 智伯邯鄲を圍みて敗死せる事蹟に見ゆ ● 陳は亡びて楚に屬す ● 王を指すを遠慮して斯くいふ也 ● 魏の附庸にて韓を伐つを欲せず、故に之を秦に諷諭せしむ ● 隨つては繼いでての意。安陵氏を亡ばし、之に繼いで許を亡ばさんと欲すと也

易與利。就易與利。必不伐。楚與趙矣。是何也。夫越山踰河。絕韓之上黨。而攻強趙。則是復闕與之事也。秦必不爲也。若道河內。倍鄴朝歌。絕漳滏

之水。而以與趙兵。決勝於邯鄲之郊。是受智伯之禍也。秦又不敢伐楚。道涉山谷。行三千里。而攻危隘之國。所行者甚遠。而所攻者甚難。秦又弗爲也。若道河外。背大梁。而右。上蔡。召陵。以與楚兵。決於陳郊。秦又不敢也。故曰。秦必不伐楚。與趙矣。又不攻衛。與齊矣。韓亡之後。兵出之日。非魏無攻矣。秦故有懷地。刑丘。安城。堽津。而以之臨河內。河內之共。汲。莫不危矣。秦有鄭地。得垣雍。決滎澤。而水大梁。大梁必亡矣。王之使者大過矣。乃惡安陵氏於秦。秦之欲許之久矣。然而秦之葉陽。昆陽。與舞陽。高陵。鄰。聽使者之惡也。隨安陵氏。而欲亡之。秦繞舞陽之北。以東臨許。則南國必危矣。南國雖無危。則魏國豈得安哉。

且夫情_レ韓不_レ受_二安陵氏_一可也。夫不_レ患_二秦之不_レ愛_二南國_一。非也。異日者。秦乃在_二河西_一。晉國之去_レ梁也千里有餘。河山以_レ關之。有_二周韓_一而問之。從_二林鄉_一軍。以至_二于今_一。秦十攻_レ魏。五入_二國中_一。邊城盡拔。文臺墮。垂都焚。林木伐。麋鹿盡。而國繼以_レ圍。又長_二陶梁_一。北。東。至_二北_一。

且つ夫れ韓を憎んで安陵氏を受けざるは可也。夫れ秦の南國を愛せざるを患へざるは非也。異日は秦乃ち河西に在り。晉國の梁を去る千里有餘、河山以て之を關り、周・韓有りて之を閑てたりしも、林郷の軍より、以て今に至るまで、秦十たび魏を攻め、五たび國中に入る。邊城盡く拔かれ、文臺墮られ、垂都焚かれ、林木伐られ、麋鹿盡きて、國繼いで以て圍まる。又梁北を長驅して、東陶・衛の郊に至り、北、平關に至り、秦に亡ほされたる者、山北、河外、河内の大縣數百、名都數十あり。秦乃ち河西に在り、晉國の大梁を去るや尙ほ千里にして、禍是の若し。又況んや秦をして韓無くして鄭の地を有ち、河山の以て之を關る無く、周・韓の以て之を閑つる無く、大梁を去る百里ならしむるをや、禍必ず此に百ならん。異日、從の成らざりしは、楚・魏疑うて、韓得て約す可らざりし也。今韓、兵を受くる三年、秦之を撓すに講を以てす。韓、亡ぶるを知れども猶ほ聽かず、質を趙に投じて、天下の爲めに厲行して刃を頓せんと請ふ。臣

至_二平關_一。所_レ亡_二手秦_一者。山北河外河内。大縣數百。名都數十。秦乃在_二河西_一。晉國之去_レ大梁也尙千里。而禍若_レ是矣。又況_レ於_レ使_レ秦無_レ韓而有_二鄭地_一。無_二河山_一以_レ關之。無_二周韓_一以_レ閑之。去_レ大梁二百里。禍必百此矣。異日者。從之不成也。楚魏疑_レ而韓不可_レ得_レ而約_レ也。今韓受_レ兵三年

の愚を以て之を觀れば、則ち楚・趙必ず之れと與に攻めん。此れ何ぞや。則ち皆秦の窮まり無く、盡く天下の主を亡ほして、海内の民を臣とするに非ざれば、必ず休まざるを知らばなり。是の故に臣願はくは從を以て王に事へん。王速かに楚・趙の約を受けて、韓の質を挾さみ、韓を存するを以て務と爲し、因て故地を韓に求めば、韓必ず之を效さん。此の如くせば、則ち士民勞せずして故地得べし。其功秦と共に韓を伐つよりも多く、然り而して強秦と鄰するの禍なからん。夫れ韓を存し魏を安んじて、天下を利す、此れ亦王の大時のみ。韓の上黨を共・寧に通じ、道をして已に通ぜしめば、因て之に關して、出入する者には之に賦す。是れ魏重て韓に質するに其上黨を以てするなり。共に其賦を有すれば、以て國を富すに足れり。韓必ず魏を徳とし魏を愛し、魏を重んじ魏を畏れん。韓必ず敢て魏に反せず、韓は是れ魏の縣たらん。魏、韓を得て以て縣とせば、則ち衛・大梁・河外は必ず安からん。今韓を存せずんば、則ち二周必ず危く、安陵必ず易らん。

曰。王胡不爲從。魏王曰。秦許吾以垣雍。平都君曰。臣以垣雍爲空割也。魏王曰。何謂也。平都君曰。秦趙久相持於長平之下。而無決。天下合於秦。則無趙。合於趙。則無秦。秦恐王之變也。故以垣雍。餌王也。秦戰勝趙。王敢責垣雍之割乎。王曰。不。敢。秦戰不勝趙。王能令韓出垣雍之割乎。王曰。不。能。臣故曰。垣雍空割也。魏王曰。善。

「秦、吾に許すに垣雍を以てせり。」平都君曰く、「臣垣雍を以て空割と爲す。」魏王曰く、「何の謂ぞ。」平都君曰く、「秦・趙久しく長平の下に相持して決する無し。天下、秦に合せば則ち趙なく、趙に合せば則ち秦なからん。秦、王の變せんを恐る、故に垣雍を以て王に餌する也。秦戰つて趙に勝たば、王敢て垣雍の割を責めんか。」王曰く、「敢てせじ。」秦戰つて趙に勝たずば、王能く韓をして垣雍の割を出さしめんか。」王曰く、「能はじ。」臣故に曰く、垣雍は空割也と。」魏王曰く、「善し。」

● 秦趙の戰也 ● 趙と合從を約して之を教ふをいふ ● 韓が魏より得たる地。秦は魏をして之を魏に歸さしめんと約したる也 ● 空しき分割。實際は割かずして只虚偽に之を約する也 ● 亡び ● 王を釣る也 ● どこまでも押切つて

樓梧、秦・魏を約し、將に秦王をして境に遇はしめんとす。魏王に謂つて曰く、

「遇ひて相なくば、秦必ず相を置かん。之を聽かざるば、則ち交秦に悪しからん。之を聽かば、則ち後、王の臣、將に皆務めて諸侯の能く王の上に令する者に事へんとす。且つ秦に遇うて秦を有する者を相とせば、是れ齊なき也。秦必ず王の強を輕んぜん。齊を有する者を之を相とするに若かじ。齊必ず喜ばん。是れ齊を有する者を以て秦と遇はじ、秦必ず之を重んぜん」と。

● 魏王と國境にて遇見せしめんとす ● 秦王と會見するに當り、其體を相(タス)くる相なくんば、秦は必ず己に都合よき者を以て相とせん。中井履軒は相を以て國の宰相と解し、是時魏蓋し趙々相を置かず故に斯く云ふと説けり ● 齊秦の如きをいふ。之に事へて以て其威力を藉らざんば國威必ず落ちんと也 ● 原文「秦者」は「有秦者」の誤脱として補ひ譯す ● 齊との親交を棄つる譯也 ● 秦が魏を重ざるは齊の國親交ある故也、今齊を捨てば秦は魏を輕んぜん ● 相として

將令秦王遇於境。謂魏王曰。遇而無相。秦必置相。不聽之。則交惡。於秦。聽之。則後王之臣。將皆務事諸侯之能令於王之上者。且遇於秦。而相秦者。是無齊也。秦必輕王之強矣。有齊者不若相之。齊必喜。是以有齊者與秦遇。秦必重之矣。

八年、魏王に謂つて曰く「昔し曹は齊を恃んで晉を輕んじ、齊釐莒を伐つて、晉人、曹を亡ほせり。繪は齊を恃んで越を輕んじ、齊、和子の亂ありて、越人、

八年。謂魏王曰。昔曹恃齊而輕晉。齊伐

蓋莒而晉人亡曹。而越人子亂。而越人亡。而韓魏以輕韓。魏伐榆關。而韓氏亡。鄭原恃秦。以輕晉。秦程年穀大凶。而晉人亡。原中山恃齊魏。以輕趙。齊魏伐楚。而趙亡。中山此五國。所以亡者。皆有所恃也。非獨此國爲然而已也。天下之亡國。皆

繪を亡ぼせり。鄭は魏を恃んで以て韓を輕んじ、魏、榆關を伐つて、韓氏、鄭を亡ぼせり。原は秦翟を恃んで以て晉を輕んじ、秦翟、年穀大凶にして、晉人、原を亡ぼせり。中山は齊・魏を恃んで以て趙を輕んじ、齊・魏、楚を伐つて、趙、中山を亡ぼせり。此の五國の亡びし所以は、皆恃む所ありたれば也。獨り此の五國然りと爲すのみに非ず、天下の亡國皆然り。夫れ國の恃む可らざる所以の者多し。其變勝けて數ふ可らず。政教脩まらず、上下輯らざるを以て、恃む可らざる者或り。諸侯鄰國の虞ありて、恃む可らざる者或り。年穀登らず、畜積竭盡するを以て、恃む可らざる者或り。或は利に化し、患に比く。臣此を以て國の必ずしも恃む可らざるを知る也。今王、楚の強を恃んで、春申君の言を信じ、是を以て秦を賓すれども、而も久しければ知る可らず。即し春申君變あらば、是れ王獨り秦の患を受くる也。即ち王、萬乘の國を有しながら、而も一人の心を以て命とする也。臣此れを以て完からずと爲す。願はくは王の之を熟計せられんことを」と。

● 或人が ● 國の名 ● 國の名 ● 其處に乘じてと補ひ見よ ● 諸説ありて事實未詳 ● 州の名 ● 他國 ● 和也 ● 利の爲めに移り ● 患難に陥り近づきて恃むべからざる者あり ● 擯斥疎外 ● 日久しければ其變知るべからず ● 一人は春申君を指す。命は政令也。萬乘の重き、宜しく榮と讃すべし、然るに王は一人の心を以て政令を爲すと也。一説に命は以て生命とする義也と、亦通すべからん

然矣。夫國之所以不可恃者多。其變不可勝數也。或下以政教不脩。上下不輯。而不可恃者。或下有諸侯鄰國之虞。而不可恃者。或下以年穀不登。畜積竭盡。而不可恃者。或化於利。比於患。臣以此知三國之不可恃也。今王恃楚之強。而信春申君之言。以是賓秦。而久不可知。即春申君有變。是王獨受秦患也。即王有萬乘之國。而以一人之心爲命也。臣以此爲不完。願王之熟計之也。

魏王問張旄曰。吾欲與秦攻韓。何如。張旄對曰。韓且坐而晉亡乎。且割而從乎。下乎。王曰。韓且割而從乎。下。張旄曰。韓怨魏乎。怨秦

魏王、張旄に問うて曰く、「吾れ秦と與に韓を攻めんと欲す、何如。」張旄對へて曰く、「韓且に坐して亡ぶるを晉たんとするか。且に割いて天下に從はんとするか。」王曰く、「韓、且に割いて天下に從はんとす。」張旄曰く、「韓、魏を怨みんか、秦を怨みんか。」王曰く、「魏を怨みん。」張旄曰く、「韓、秦を強しとするか。魏を強しとするか。」王曰く、「秦を強しとせん。」張旄曰く、「韓、且に割いて其の強しとする所と、怨みざる所とに從はんとするか。且に其の強しとせ

乎。王曰。怨魏。張旄曰。韓強。秦乎。強魏乎。王曰。強秦。張旄曰。韓且割而從其所強。與其所不怨乎。且割而從其所不強。與其所不怨乎。王曰。韓將割而從其所強。與其所不怨。張旄曰。攻韓之事。王自知矣。

ざる所と、其の怨むる所とに從はんとするか。」王曰く、「韓、將に割いて、其の強しとする所と、其の怨みざる所とに從はんとす。」張旄曰く、「韓を攻むるの事王自ら知れり。」

● 特也 ● 地を割きて ● 韓を攻むるの利害は王既に自ら知れり、韓を伐てば韓は其強とし且つ弱みざる秦に從はんのみと也

客謂司馬食其曰。慮久以天下爲可一者。是不知天下者也。欲獨以魏支秦者。是又不知魏者也。謂茲公不知此兩者。客曰。司馬食其。謂曰。久しく天下を以て一とす可しと慮る者は、是れ天下を知らざる者也。獨り魏を以て秦を支へんと欲する者は、是れ又魏を知らざる者也。茲公此の兩者を知らずと謂ふは、又茲公を知らざる者也。然り而して茲公從を爲す、其説何ぞや。從すれば則ち茲公重く、從せざれば則ち茲公輕ければなり。茲公の重きに處るや、實に期を爲さず。子何ぞ疾かに三國の方に堅きに及んで、自から秦に賣らざる。秦必ず子を受けん。然らずんば、横者將に子を

客、司馬食其に謂つて曰く、「久しく天下を以て一とす可しと慮る者は、是れ天下を知らざる者也。獨り魏を以て秦を支へんと欲する者は、是れ又魏を知らざる者也。茲公此の兩者を知らずと謂ふは、又茲公を知らざる者也。然り而して茲公從を爲す、其説何ぞや。從すれば則ち茲公重く、從せざれば則ち茲公輕ければなり。茲公の重きに處るや、實に期を爲さず。子何ぞ疾かに三國の方に堅きに及んで、自から秦に賣らざる。秦必ず子を受けん。然らずんば、横者將に子を

又不知茲公者也。然而茲公爲從。其説何也。從則茲公重。不從則茲公輕。茲公之處重也。不實爲期。子何不疾及三國方堅也。自賣於秦。秦必受子。不然。横者將圖子以合於秦。是取子之資。而以資子之難也。

● 司馬は姪、魏人 ● 天下を合從して久しきに亘らしめんと計る者 ● 未詳、合從を主唱せし者ならん ● 天下の一にすべからざるを、魏が秦を支ふる能はざるを ● 從を爲して重きに居るも固より永遠を期すべきにあらず、いつ何時合從の離散せんも測り難し ● 三晉ならん。堅きは從約の堅きをいふ ● 從にそむきて秦に合し以て自ら利を收めよ ● 魏人にして連衡を欲する者が子の爲す所を圖りて、魏を以て秦に合せん ● 資は賣るに應じたる字にて商法のもとと也。自分が秦に賣込むべき資本を反つて變たる連衡論者に賣する事となる也

秦拔寧邑。魏王令三人謂秦王曰。王歸寧邑。吾請先天下下講。魏冉曰。王無聽。魏王見天下之不恃也。故欲先講。夫亡寧者。宜割寧一以求講。夫得寧者。安能歸寧乎。

秦、寧邑を拔く。魏王、人をして秦王に謂はしめて曰く、「王、寧邑を歸さば、吾請ふ天下に先だつて講せん」と。魏冉曰く、「王聽く無かれ。魏王、天下の恃むに足らざるを見る、故に先づ講せんと欲す。夫れ寧を亡ふ者は、宜しく二寧を割いて以て講を求むべし。夫れ寧を得る者は、安くんぞ能く寧を歸さんや」と。

● 魏は宜しく寧の如き者二を割きて以て講を求むべし、秦として寧を歸して講和すべきにあらず

秦罷邯鄲攻魏取寧邑吳慶恐魏王之講於秦也謂魏王曰秦之攻王也王知其故乎天下皆曰王近也王不近秦秦之所去皆曰王弱也王不弱二周秦人去邯鄲過二周而攻王者以王爲易制也王亦知三弱之召攻乎

魏王欲攻邯鄲李梁聞之中道而反衣焦不申頭塵

秦、邯鄲を罷め、魏を攻めて寧邑を取る。吳慶、魏王の秦に講ぜんを恐れ、魏王に謂つて曰く、「秦の王を攻むるや、王其故を知るか。天下皆曰ふ、『王近し』と。王、秦に近からず。秦の去る所、皆曰ふ、『王弱し』と。王二周より弱からず。秦人、邯鄲を去り、二周を過ぎて王を攻むるものは、王を以て制し易しとすれば也。王亦弱の攻を召くを知れりや」と。

●邯鄲の圍を解き ●王秦に近き故也といふ、然れども王實は秦に近からず ●秦去つて魏に合はざれば。安井息軒は原文「秦」の一字衍とす、即ち「王、秦の去る所に近からず」と訓じ、去る所は趙の邯鄲を指すと解せらる也、最もよく通ず ●今又攻められ、請するは、是れいよく弱を示す所以、我が弱きを示せばいよく攻を召く事となる也

魏王、邯鄲を攻めんと欲す。季梁之を聞き、中道にして反る。衣焦きて申びず、頭塵去らず、往いて王に見えて曰く、「今者臣來るとき人を大行に見る。方に北面して其駕を持し、臣に告げて曰く、『我れ楚に之かんと欲す』と。臣曰く、『君楚に

之く。將た奚爲れぞ北面する』と。曰く、『吾が馬良し』と。臣曰く、『馬良しと雖も、此れ楚の路に非ず』と。曰く、『吾が用多し』と。臣曰く、『用多しと雖も、此れ楚の路に非ず』と。曰く、『吾が御者善し』と。此の數者愈々善くして、楚を離るる愈々遠き耳。今王、動いて霸王を成さんと欲し、舉げて天下に信ぜられんと欲す。王の國の大、兵の精銳を恃んで、邯鄲を攻めて、以て地を廣め名を尊くせんとす。王の動愈々數々にして、王を離るる愈々遠からん耳。猶ほ楚に至らんとして北行するがごとし』と。

●旅行の中途より引返す ●焦は卷也、申は舒也、しわものばさずの意ならん、大急ぎで見ゆる也 ●大道 ●楚は南方にあり、宜しく南面して行くべく北面すべきにあらず ●費用 ●舉動の勤也、下の舉げては舉動の繁にて互言也 ●霸王の業 ●霸王の業

不_レ去。往_レ見_レ王。曰。今者臣來。見_レ人於大行。方北面而持_レ其駕。告_レ臣曰。我欲_レ之楚。臣曰。君之楚。將奚爲北面。曰。吾馬良。臣曰。馬雖_レ良。此非_レ楚之路也。曰。吾用多。臣曰。楚之路一也。非_レ吾御者善。此數者愈善。而離_レ楚愈遠耳。今王動欲_レ成_レ霸王。舉_レ信_レ於天下。恃_レ三國之大。兵之精銳。而攻_レ邯鄲。以廣_レ地。尊_レ名。王之動愈數。而離_レ王愈遠耳。猶_レ至_レ楚。而北行_レ也。

周宵謂宮他

周宵、宮他に謂つて曰く、「子、宵の爲めに齊王に謂つて、『宵、外臣たらんを

曰。君其遣縮高。吾將仕之。以五大夫。使爲持節尉安陵。君曰。安陵小國也。不能必使其民。使者自往。請使道。使者至。縮高之所。復信陵君之命。縮高曰。君之幸攻也。將使高攻也。夫以父攻子守。人大笑也。見臣而下。是倍主也。父教子倍。亦非君之所喜也。敢再拜

すしも其民を使ふ能はず。使者自ら往け。請ふ道かしめん」と。使者、縮高の所に至り、信陵君の命を復す。縮高曰く、「君の高を幸する、將に高をして管を攻めしめんとするか。夫れ父を以て子の守を攻めば、人大いに笑はん。臣を見て下らば、是れ主に倍く也。父として子に倍くを教ふる、亦君の喜ぶ所に非じ。敢て再拜して辭すと。使者以て信陵君に報ず。信陵君大いに怒り、大使をして安陵に之かして曰く、「安陵の地、亦猶ほ魏のごとし。今吾、管を攻めて下さずんば、則ち秦兵、我に及び、社稷必ず危ふからん。願はくは君の縮高を生束して之れを致さんことを。若し君致さずんば、無忌將に十萬の師を發して以て安陵の城に造らんとす」と。安陵君曰く、「吾が先君成侯、詔を襄王に受けて、以て此地を守る。手づから大府の憲を受けたり。憲の上篇に曰く、「子、父を弑し、臣、君を弑する、常ありて赦さず。大赦すと雖も、降城亡子は與かるを得ず」と。今縮高謹んで大位を辭し、以て父子の義を全うせんとす。而るに君必ず之

辭。使者以報信陵君。信陵君大怒。遣三大使之。安陵之地。亦猶魏也。今吾攻管而不下。則秦兵及我。社稷必危矣。願君之生東縮高而致之。若君弗致也。無忌將發二十萬之師。以造中安陵之城。安陵君曰。吾先君成侯受詔襄王。以守此地也。手受大府之憲。憲之

を生致せよと曰ふ。是れ我をして襄王の詔に負きて、大府の憲を廢せしむる也。死すと雖も、終に敢て行はじ」と。縮高之を聞いて曰く、「信陵君、人と爲り、悍にして自ら用ふ。此の辭反さば、必ず國の禍を爲さん。吾已に己を全うして人臣たるの義無し、豈に吾が君をして魏の患あらしむ可けんや」と。乃ち使者の舍に之き、頸を刎ねて死す。信陵君、縮高死すと聞き、縞素を服し舍を避け、使者をして安陵君に謝せしめて曰く、「無忌は小人也。思慮に困しみ、言を君に失せり。敢て再拜して罪を釋く」と。

- 秦が韓より取りたる地
- 爵位の名
- 役の名
- 民をして必ず我言を聽かしむるといふ譯に行かず
- 導也
- 白也、申す
- 愛幸
- 若し我子が
- 秦王
- 魏の附庸なればいふ
- 生きながら
- しばりて
- 魏の襄王
- 大府は魏國の國籍を藏する府、憲は憲法
- 常刑也
- 城を以て敵に降
- れる者と城を棄ててにげたる者
- 五大夫等をいふ
- 性急に猛くして人言を用ひず自分の考通り押通す
- この辭をそのまゝに復命せば
- 吾已に父子の義を全うしたるも而も我が爲めに國の禍ありてはこれ人臣たるの義なき也
- 喪服
- 管を攻めて下さず、思慮困窮し、因て甚しき失言を爲せり
- 御詫申す

上篇曰。子弑父。臣弑君。有常不救。國雖大。救。降城亡子。不得與焉。今縮高謹辭。大位。以全父子之義。而君曰。必生致之。是使。我負。襄王之詔。而廢。中。大府之憲。上。也。雖。死。終。不。敢。行。縮。高。聞。之。曰。信。陵。君。爲。人。悻。而。自。用。也。此。辭。反。必。爲。國。禍。吾。已。全。己。無。下。爲。人。臣。之。義。矣。豈。可。使。吾。君。有。魏。患。也。乃。之。使。者。之。舍。勿。頸。而。死。信。陵。君。聞。縮。高。死。服。縞。素。避。舍。使。使。者。謝。安。陵。君。曰。無。忌。小。人。也。困。於。思。慮。失。言。於。君。敢。再。拜。釋。罪。

魏王與龍陽君共船而釣。龍陽君得二十萬魚。餘涕下。王曰。有所不。安乎。如是。何。不相告也。對。曰。臣無。敢。不。安也。王曰。然。則何爲。涕。出。曰。臣爲。王。之。所得。魚。也。王。曰。何。謂。也。對。曰。臣之。始。得。

魏王、龍陽君と船を共にして釣る。龍陽君、十餘魚を得て涕下る。王曰く、「安からざる所あるか。是の如くんば何ぞ相告げざる。」對へて曰く、「臣敢て安からざる無し。」王曰く、「然らば則ち何爲れぞ涕出づる。」曰く、「臣、王の得たる所の魚の爲め也。」王曰く、「何の謂ぞ。」對へて曰く、「臣の始めて魚を得るや、臣甚だ喜べり。後に得る又益々大なり。今臣直だ臣が前の得たる所を棄てんと欲す。今臣の凶惡を以てして、王の爲めに枕席を拂ふを得たり。今臣、人君に至り、人を庭に走らせ、人を途に辟けしむ。四海の内、美人亦甚だ多し。臣の王に幸せらるゝを得るを聞かんか、必ず裳を棄けて王に趨らん。臣亦猶ほ曩

魚也。臣甚喜。後得又益大。今臣直欲棄之矣。今以臣凶惡而得爲王拂枕席。今臣爵至人君。走人於庭。辭人於途。四海之内。美人亦甚多矣。聞臣之得幸於王也。必棄裳而趨。王。臣亦猶曩魚也。臣亦將棄矣。臣安能無涕出乎。魏王曰。誤。有是

の臣が前に得たる所の魚のごとけん。臣亦將に棄てられんとす。臣安くんぞ能く涕出づる無からんや。」魏王曰く、「誤てり。是の心あるや、何ぞ相告げざる」と。是に於て令を四境の内布いて曰く、「敢て美人を以ふ者あらば族せん」と。是に由て之を觀れば、近習の人、其の攀附するや固く、其の自ら羈ひ繋ぐや完し。今千里の外より、美人を進めんと欲す。效す所の者庸ぞ必ずしも幸を得んや。假之ひ幸を得とも、庸ぞ必ずしも我が用を爲さんや。而るに近習の人、相與に我を怨む、禍あるを見て、未だ福あるを見ず、怨あるを見て、未だ徳あるを見ず。智を用ふるの術に非ざる也。

- 嬖幸也。男女兩説あり、男色を以て幸せらるゝ者とす可とすべし。後世男色を謂つて龍陽之好となす
- 凶は行を謂ひ、惡は貌を謂ふ。或は醜惡と解し二字共に容貌と見るも可
- 枕の音正しくはシン、姑く慣用に從ふ。王と起臥し因て爲めに枕席を拂ひ拭ふの意
- 龍陽君に封ぜられ人君と格を同じうするをいふ
- 朝廷道途、遇ふ者皆走り避くと也
- 王の所に來らん
- 吳註に「誤」は「謬」(ア、)の字の訛とす
- 一族悉く殺さん
- 嬖幸の臣
- 攀は握持の義
- 其不善を覆ひて主に繋結する
- 美人を進めんと欲する人を指す
- 此例を美人に假りて、疎遠の人の賢才を進めんと欲するも偶々禍にかかり怨を買ふのみなるを論じたる也

心也。何不_レ相告_二也。於是布_レ令於四境之内。曰。有_レ敢言_二美人_一者。上_レ族。由_レ是觀_レ之。近習_レ之人。其擊_レ諂也。固矣。其自_レ擊也。完矣。今由_二千里之外_一。欲_レ進_二美人_一。所_レ效者。庸_レ必得_レ幸乎。假_レ之得_レ幸。庸_レ必爲_二我用_一乎。而近習_レ之人。相與_レ怨_レ我。見_レ有_レ禍。未_レ見_レ有_レ福。見_レ有_レ怨。未_レ見_レ有_レ德。非_二用_レ智_一之術也。

或謂_二魏王_一。王_レ傲_二四疆之内_一。其從_二於王者_一。十日之内。備_レ不_レ具者。死。王_レ因取_二其游_一之_二舟上_一繫_レ之。臣_レ爲_レ王之_レ楚。王_レ晉_レ臣之_レ反。而_レ行。春申君聞_レ之。謂_二使者_一曰。子爲_レ我_レ反。無_レ見_レ王矣。十日之内。數萬之_レ衆。令_レ涉_二魏境_一。

或ひと魏王に謂ふ、「王、四疆の内を傲め、『其の王に従ふ者は、十日の内に備へよ。具へずんば死せん』と。王因て其の游を取り、舟上に之いて之を繫け。臣、王の爲めに楚に之かん。王、臣が反るを晉つて行け」と。春申君之れを聞いて、使者に謂つて曰く、「子我が爲めに反れ、王に見ゆる無かれ、十日の内に、數萬の衆を、魏の境に涉らしめん」と。秦の使之を聞いて以て秦王に告ぐ。秦王、魏王に謂つて曰く、「大國必ず來るに意あらば、是を以て足らん」と。

● 四疆。傲は驕也。擊或の義又はきびしくふれを出しての意とす。蓋し此章の事實明かならず。魏王を伐たんが爲めに出發するか、又秦に敗れて入朝せんが爲か、二者其一なるべし。此二說中何れを取るかに從つて全文の解自ら異なるべき也 ● 魏王の秦に行くに従ふべきもの ● 用意をととのへよ ● 旌旗の旗 ● 人衆の聚まる目標とする也 ● 今王に説きたる其人也、春申君。己の楚を専らにするを示して次の如く言ふ也 ● 楚王 ●

秦使_レ開_レ之。以_レ告_二秦王_一。秦王_レ謂_二魏王_一曰。大_レ國有意_二必來_一。以_レ是而足_レ矣。

王に見ゆる迄もなし、我人衆を魏に繰り出さんと也 ● 魏の人數だけにて十分ならん、何ぞ楚に借るに要せん。或は「是」を「來るに意あらば」只それだけで十分也、わざと御來訪に及ばずとも解すべし

觀_レ鞅謂_二春申_一曰。人皆以_レ楚_レ爲_レ強。而君用_レ之弱。其於_レ鞅也。不_レ然。先_レ君者。二十餘年。未_レ嘗_レ見_レ攻_レ今_レ秦_レ欲_レ踰_二兵於_一澠_レ隘_レ之_レ塞。不_レ使_レ假_二道_一兩_レ周_レ。倍_レ韓_レ以_レ攻_レ楚。不_レ可_レ。今則不_レ亡_レ矣。不_レ能_レ愛_レ其_レ許_レ鄢_レ陵_レ與_レ。

觀鞅、春申に謂つて曰く、「人皆以へらく、楚強たり、君之を用ひて弱まりぬと。其の鞅に於ては然らず。君に先だつもの二十餘年、未だ嘗て攻められず。今秦、兵を澠隘の塞に踰えしめんと欲せしも使しめず、道を西周に假りて、韓に倍いて以て楚を攻むる不可なり。今は則ち然らず。魏且に且暮に亡びんとし、其許・鄢陵と梧とを愛する能はず、割いて以て秦に予へたり。相去ること百六十里。臣の見る所の者は、秦・楚鬪はんの日のみ」と。

● 君が楚國の政を自由にするに及んで弱くなりたり ● 鞅は然りと爲さず ● 楚國は也 ● 其當時。此「今」の字或は衍か ● 魏がそれをさせなかつたと也。但、史記には「不便」に作る、從ふべきか ● 愛して維持する能はず ● 秦楚が ● 坊本「日近也已」に作る

梧。割以予秦。去百六十里。臣之所見者。秦楚圍之日也巳。

安邑之御史死。其次恐不得也。輸人爲之謂安邑令曰。公孫綦爲人請。御史於王。王曰。彼固

安邑の御史死し、其次得ざらんを恐る。輸人之が爲めに安邑の令に謂つて曰く、「公孫綦、人の爲めに御史を王に請へるに、王は、『彼固より次あり。吾之を敗り難しと曰へり』と。」因て遽かに之を置きぬ。

有次乎。吾難敗其法。因遽置之。

○ 次府の者御史たるを得ざるを恐る ○ 輸は安邑の里の名 ○ 彼の安邑は其次府者が後任となる法あり ○ 其言を聞きて、安邑の令は遽かに次府者を御史となしたり

景王

秦攻魏急。或謂魏王曰。棄之。不如用之。之易也。死之。不如棄之。

秦、魏を攻むる急なり。或ひと魏王に謂つて曰く、「之を棄つるは、之を用ふるの易きに如かず。之に死するは、之を棄つるの易きに如かず。能く之を棄て、之を用ふる能はず、能く之に死して之を棄つる能はざる、此れ人の大過也。今王、

易也。能棄之。弗能用之。能死之。弗能棄之。此人之大過也。今王亡地數百里。亡城數十。而國患不解。是王棄之。非用之也。今秦之強也。天下無敵。而魏之弱也。甚。而王以是質秦。王又能死。而弗能棄之。此重過也。今王能用臣之計。虧地不足。以傷國。卑體不足。以苦

地を亡ふこと數百里、城を亡ふこと數十、而も國の患解けざるは、是れ王之棄つるなり、之を用ふるに非ざる也。今秦の強は天下敵なくして、魏の弱や甚だし。而るに是を以て秦に質する。王又能く死するも、之を棄つる能はず。此れ過を重ぬる也。今王能く臣の計を用ひば、地を虧くも以て國を傷るに足らず、體を卑うするも以て身を苦しむるに足らず、患を解いて怨報いられん。秦、四境の内、執法より以下、長輓者に至るまで、故より畢く曰く、「嫪氏に與せんか、呂氏に與せんか」と。門閭の下より、廊廟の上に至ると雖も、猶ほ之れ是の如し。今王、地を割きて以て秦に賂ひ、以て嫪毒の功となし、體を卑うして以て秦を尊び、以て嫪毒に因れ。王、國を以て嫪毒を賚けば、以ふに嫪毒勝たん。王、國を以て嫪毒を賚けば、太后の王を徳とする、骨髓に深からん。王の交、最も天下の上たらん。秦・魏百たび相交はり、百たび相欺けり。今嫪氏に由りて秦に善くし、而して交、天下の上たらば、天下孰れか呂氏を棄て、嫪氏に従はざらん。

天下必ず呂氏を棄て、嫪氏に従はざれば、則ち王の怨報いんと。

● 徒に其地を棄てて之を略ふは之を利用するの易きに如かず、又徒に地を愛んで之を死守するは之を棄てて略ふの易きに如かず ● 質的の質。秦の攻伐のまことなりて之に當ると也 ● 地を愛みて棄つる能はず、以て秦を敵とすれば必ず死す、已に地と城とを亡ひて患解けざる上に又秦の質となつて死するは、是れ過を重ぬる也 ● 怨みは期せずして自ら報い出る、事とならん ● 執政の臣。原文「自」は執法の上に移すべき也 ● 車を轆く者。「長」の字衍か。義未詳 ● 嫪毐、秦の太后の嬖幸者 ● 呂不韋、嫪と呂と權を争へる也 ● 里門の下より朝廷の上まで。貴賤上下皆 ● 則の誤か ● 深く骨髓に入らん。嫪は太后の嬖臣なれば也 ● 主として魏を攻めたるは呂不韋なれば也

身。解。患。而。怨。報。秦。貞。四。境。之。内。執。法。以。下。主。於。長。槐。者。故。畢。曰。與。嫪。氏。乎。與。呂。氏。乎。雖。至。於。門。閭。之。下。廊。廟。之。上。猶。之。如。是。也。今。王。割。地。以。賂。秦。以。爲。嫪。毐。功。卑。體。以。尊。秦。以。因。嫪。毐。王。以。國。贊。嫪。毐。以。嫪。毐。勝。秦。矣。王。以。國。贊。嫪。毐。太。后。之。德。王。也。深。於。骨。髓。王。之。交。最。爲。天。下。上。矣。秦。魏。百。相。交。也。百。相。欺。也。今。由。嫪。氏。善。秦。而。交。爲。天。下。上。天。下。執。不。棄。呂。氏。而。從。中。嫪。氏。天。下。必。舍。呂。氏。而。從。中。嫪。氏。則。王。之。怨。報。矣。

秦王使人謂安陵君曰。寡人欲以五百里之地易中安

秦王、人をして安陵君に謂はしめて曰く、「寡人、五百里の地を以て、安陵に易へんと欲す。安陵君其れ寡人に許せ」と。安陵君曰く、「大王、恵を加へ、大を以て小に易ふ、甚だ善し。然りと雖も、地を先王より受く。願はくは終に之を

陵。安。陵。君。其。許。寡。人。安。陵。君。曰。大。王。加。惠。以。大。易。小。甚。善。雖。然。受。地。於。先。王。願。終。守。之。弗。敢。易。秦。王。不。說。安。陵。君。因。使。唐。且。使。於。秦。秦。王。謂。唐。且。曰。寡。人。以。五。百。里。之。地。易。中。安。陵。安。陵。君。不。聽。寡。人。何。也。且。秦。滅。韓。亡。魏。而。君。以。五。十。里。之。地。一。存。者。以。三。君。爲。長。者。故。不。錯。

守らん。敢て易へじ」と。秦王説ばず。安陵君因て唐且をして秦に使せしむ。秦王、唐且に謂つて曰く、「寡人五百里の地を以て安陵に易へんとす。安陵君寡人に聽かざるは何ぞや。且つ秦、韓を滅ほし魏を亡ぼして、君、五十里の地を以て存するは、君が長者たるを以て、故に意に錯かざれば也。今吾、十倍の地を以て君に廣めんを請ふ。而るに君寡人に逆ふは、寡人を軽するか。唐且對へて曰く、「否、是の若きに非ず。安陵君、地を先王に受けて之を守る。千里と雖も、敢て易へざる也。豈に直だ五百里のみならんや。」秦王怫然として怒り、唐且に謂つて曰く、「公亦嘗て天子の怒を聞きしか。」唐且對へて曰く、「臣未だ嘗て聞かず。」秦王曰く、「天子の怒は、伏屍百萬、流血千里なり。」唐且曰く、「大王嘗て布衣の怒を聞きしか。」秦王曰く、「布衣の怒、亦冠を免ぎ徒跣し、頭を以て地を楡く爾。」唐且曰く、「此れ庸夫の怒のみ。士の怒に非ず。夫れ專諸の王僚を刺さんとするや、彗星月を襲ひ、彗政の韓傀を刺さんとするや、白虹日を貫

意也。今吾以十倍之地。請廣於君。而君逆寡人者。輕且寡人。與。唐且對曰。否。非若受地於先王。而守之。雖千里。不敢易也。豈直五百里哉。秦王佛然怒。謂唐且曰。公亦嘗聞天子之怒乎。唐且對曰。臣未嘗聞也。秦王曰。天子之怒。伏屍百萬。流血千里。唐且曰。大王嘗聞布衣之怒乎。秦王曰。布衣之怒。亦免冠徒跣。以頭搶地爾。唐且曰。此庸夫之怒也。非士之怒也。夫專諸之刺王僚也。彗星襲月。彗政之刺韓傀也。白虹貫日。要離之刺慶忌也。倉廩擊於殿上。此三子者。皆

き、要離の慶忌を刺さんとするや、倉廩殿上に撃てり。此の三子は、皆布衣の士也。怒を懐いて未だ發せざるに、休祿天より降り。臣と與にして將に四たらんとす。若し士必ず怒らば、伏屍二人、流血五步、天下縞素せん。今日是れ也」と。劍を挺いて起つ。秦王色撓み、長跪して之に謝して曰く、「先生坐せよ。何ぞ此に至らん。寡人諱りぬ」と。夫れ韓・魏滅亡して、安陵五十里の地を以て存するものは、徒、先生ありしを以て也。

- 安陵は五十里也 ● 有徳の君子 ● 攻めんと欲せずそのまゝ、差しかきたれば也 ● 忿る貌 ● 大軍攻
- 伐の状をいふ ● 無位無官の民。平民 ● 正解に「士ノ怒ニ觸ルレバ是ノ如クニシテ和解スルノミ」と
- 凡人 ● 公子光の爲めに吳王僚を刺す。事史記に見ゆ ● 韓傀は韓の相也 ● 吳王闔閭の爲めに王の子慶忌を刺す。事吳越春秋に見ゆ ● 蓋慶忌が來りて ● 感應祥瑞 ● 刺す者と二人 ● 五歩の内に殺す ● 縞素は喪服也。帝王の死をいふ ● ひざまづきて丁單に辭義す ● 以下は記者の言ならん

布衣之士也。懷怒未發。休祿降於天。與臣而將四矣。若士必怒。伏屍二人。流血五步。天下縞素。今日是也。挺劍而起。秦王色撓。長跪而謝之曰。先生坐。何至於此。寡人諱矣。夫韓魏滅亡。而安陵以五十里之地存者。徒以有先生也。

布衣之士也。懷怒未發。休祿降於天。與臣而將四矣。若士必怒。伏屍二人。流血五步。天下縞素。今日是也。挺劍而起。秦王色撓。長跪而謝之曰。先生坐。何至於此。寡人諱矣。夫韓魏滅亡。而安陵以五十里之地存者。徒以有先生也。

卷第八

韓

康子

三晉已破二智氏。將分其地。段規謂韓王曰。分地必取。成臯。韓王曰。成臯。石溜之地也。寡人無所用之。段規曰。不然。臣聞一里之厚。而動千里之權。者。地利也。萬

三晉已破智氏。將分其地。段規謂韓王曰。分地必取成臯。韓王曰。成臯石溜之地也。寡人無所用之。段規曰。不然。臣聞一里之厚。而動千里之權。者。地利也。萬

● 韓魏趙 ● 康子 ● 石多きをいふ ● 厚は固也。要害險固なる地をいふ。一里の厚に據りて千里の遠方

人之衆。而破三軍者。不意也。王用二臣言。則韓必取鄭矣。王曰。善。果取成臯。至韓之取鄭也。果從成臯始大。

までも權威を振ふは地の利に據る故也 ● 敵の不意に乘ず ● 成臯の地の利を以て鄭人の備無きを伐たば必ず勝たんと也 ● 大は笑の誤かといふ

烈侯

韓傀相韓。嚴遂弑於君。二人相害也。嚴遂政議直指。韓傀以之叱之於朝。嚴遂拔劍趨之。以救解。於是嚴遂懼。誅亡去。游求人。可三以報韓傀者。至

韓傀、韓に相たり。嚴遂君に重んぜられ、二人相害す。嚴遂、政議直指して、韓傀の過を擧ぐ。韓傀之を以て之を朝に叱す。嚴遂劍を抜いて之を趨ふ。救を以て解けぬ。是に於て、嚴遂誅を懼れて亡け去り、遊んで人の以て韓傀に報ず可き者を求めて、齊に至る。齊人或は言ふ、軹の深井里の聶政は勇敢の士也。仇を避けて屠者の間に隠る」と。嚴遂陰かに聶政に父はり、意を以て之を厚くす。聶政之れを問うて曰く、「子安くに我を用ひんと欲するか。」嚴遂曰く、「吾れ役せらるゝを得るの日淺し。事今薄るも、奚ぞ敢て請ふ有らん」と。是に於て、嚴遂乃

齊。齊人或言。軾深井里。政。勇敢士也。避仇隱於屠者之閒。嚴遂陰交於政。政以意厚之。政問曰。子欲安用我乎。嚴遂曰。吾得爲君役之日淺。事今薄矣。敢有請。於是嚴遂乃具酒。薦政。政前。前。仲子奉黃金百鎰。前爲政。政母壽。政驚。愈怪其厚。固謝。嚴仲子。仲子

ち酒を具へ、自ら政の母の前に觸す。仲子黄金百鎰を奉じて、前んで政の母の壽を爲す。政驚き、愈々其の厚きを怪しんで、固く嚴仲子に謝す。仲子固く進む。而るに政謝して曰く、「臣、老母あり、家貧しく、客遊して以て狗屠を爲し、且夕に甘脆を得て、以て親を養ふ可し。親の供養備はれり。義敢て仲子の賜に當らず」と。嚴仲子、人を辟け、因て政の爲めに語つて曰く、「臣、仇ありて、諸侯に行游する衆し。然れども齊に至り、足下の義の甚だ高きを聞く。故に直ちに百金を進むるものは、特に以て夫人が蠶繭の費として、以て足下の謙に交らんとするなり。豈に敢て以て求むる有らんや。」政曰く、「臣、志を降し身を辱しめて、市井に居る所以は、徒幸ひに老母を養はんとなり。老母在せり。政が身未だ敢て以て人に許さず」と。嚴仲子固く讓る。政竟に受くるを肯んぜず。然れども仲子卒に賓主の禮を備へて去る。之を久しうして政の母死す。既に葬むり服を除く。政曰く、「嗟乎、政は乃ち市井の人、刀を鼓して以

固進。而政謝曰。臣有老母。家貧。客游。以爲狗屠。可下。且夕得甘脆。以養親。親供養備。義不取。當仲子之賜。嚴仲子辟人。因爲政。政語曰。臣有仇。而行游諸侯。衆矣。然至齊。聞足下義甚高。故直進百金。者。特以爲夫人蠶繭之費。以交足下之驩。豈敢以有求耶。政曰。

て屠る。而して嚴仲子は乃ち諸侯の卿相也。千里を遠しとせず、車騎を枉けて臣に交はる。臣の之を待つ所以は、至つて淺鮮なり。未だ大功の以て稱す可き者あらず。而るに嚴仲子百金を舉げて親の壽を爲す。我受けずと雖も、然れども是れ深く政を知る也。夫れ賢者、感念睚眦の意を以てして、窮僻の人を親信す。而るに政獨り安くんぞ嘿然として止む可けんや。且つ前日政に要し、政徒らに老母を以てす。老母今天年を以て終へたり。政、將に己を知る者のために用ひられんとす」と。

● 政は正に通ず ● 仲子者があつてなだめし故其端は解けたれども、嚴遂は君の朝廷にて劍を抜きたるを罪せんことを恐れ亡走せり ● 心を盡して親切にす ● 交りを得るの日淺しと也、役せらるは謙解 ● 一説薄をウスシと訓じ、過する事今は薄しと解す。仲井種軒は「事今薄」を衍とせり、最も通ず ● 酒をす、む ● 嚴遂の字 ● 賀壽。壽を祝す ● 辭退す ● 犬殺 ● 肉のやはらかに甘美なるもの ● 義に於て衆人諸侯の國に行游して仇を報ずべき人物を求めたれども得ず ● 嚴政の母をいふ ● 租食 ● 交情の情に ● 逐漸く本音を吐き掛けたる故政斯くいひて豫めきつぱり断る也 ● 金を受けられよといふ也 ● 丁單に體を盡して去る ● 憂服を除く、眼忌があげたり ● 嚴仲子を指す ● 感念せる睚眦の遺恨あるの故を以て、睚眦は目を怒らしにらむ意 ● 政自身を指す ● 默然也。だまつて之に報いずして止むべからず ● 我に求むる所あり ● 老母あるの故を以て之を断りたり

人徒辭獨行。伏劍至韓。韓適有東孟之會。韓王及相皆在焉。持兵戰而衛者甚衆。彘政直入上階刺韓傀。韓傀走而抱哀侯。彘政刺之。兼中哀侯。左右大亂。彘政大呼。所殺者數十人。因自皮面抉眼。自屠出腸。遂以死。韓取彘政屍暴於市。縣購之千金。久之莫知誰子。政姊嬰聞之曰。吾弟至賢。不可愛妾之軀。滅中吾弟之名。非弟意也。乃之韓視之曰。勇哉氣矜之降。是其軼賁育而高成荊矣。今死而無名。父母既沒矣。兄弟無有。此爲我故也。夫愛身不揚弟之名。吾不忍也。乃抱屍而哭之曰。此吾弟軼深井里彘政也。亦自殺於屍下。晉楚齊衛聞之曰。非獨政之能。乃其姊者亦列女也。彘政之所以名施於後世者。其姊不避菹醢之誅。以揚其名也。

の彘政也」と。亦屍の下に自殺す。晉・楚・齊・衛之を聞いて曰く、「獨り彘政の能あるのみに非ず、乃ち其の姊なる者も亦列女也」と。彘政の名を後世に施したる所以は、其姊、菹醢の誅を避けず、以て其名を揚げたれば也。

● 衛の地 ① をぞ、父の季の兄弟をいふ ② 多く、十分に ③ 援助 ④ 其間の距離 ⑤ 人々の利害相異なるものを生じ、人心まぢくとならん ⑥ 一國全體 ⑦ 別れて ⑧ 劍をもちて劍をつ互にして ⑨ 東孟の地の會合 ⑩ 救を冀ふ也 ⑪ 其人相の分ちぬ様にする爲め也 ⑫ 懸賞にて其誰なるかを知る者を求むる也 ⑬ 本意にあらざ ⑭ 意氣、矜は自ら持するをいふ ⑮ 古の勇者孟賁賁育 ⑯ 過也 ⑰ 亦古の勇者の名 ⑱ 人其名を知らず ⑲ 名を人に知られじとしたるは累を我に及ぼさん事を恐れて也 ⑳ 烈女 ㉑ なまずしはからとせらるゝの誅戮

成午從趙來。謂申不害韓曰。子以韓重我於趙。請以趙重子於韓。是子有兩韓。而我有兩趙也。

昭侯

成午、趙より來り、申不害に韓に謂つて曰く、「子、韓を以て我を趙に重くせよ。請ふ趙を以て子を韓に重くせん。是れ子兩韓ありて、我兩趙ある也」と。

魏之圍邯鄲也。申不害始合於韓王。然未之知王之所欲也。恐言而未必中於王也。王問申子曰。吾誰與而可。對曰。此安危之要。國家之大事也。臣

魏の邯鄲を圍むや、申不害始めて韓王に合ふ。然れども未だ王の欲する所を知らず、言つて未だ必ずしも王に中らざらんを恐る。王、申子に問うて曰く、「吾誰と與にせば可ならんか。」對へて曰く、「此れ安危の要、國家の大事也。臣請ふ、深く惟ひて之を苦思せん」と。乃ち微かに趙卓・韓臯に謂つて曰く、「子は皆國の辯士なり。夫れ人の臣たる者は、言必ず用て忠を盡すべきのみ」と。二人各々進んで王に議するに事を以てす。申子微かに王の説ぶ所を視て、以て王に言ふ。王

請深惟而苦思之。乃微謂趙卓趙臯曰。子皆國之辨士也。夫爲人臣者。言可必用。盡忠而已矣。二人各進議於王。以事。申子微視王之所說。以言於王。王大說之。

大いに説ぶ。

● 王の心に適中せず其氣に入らざるを ● 爲と懸考したる上にて御返答申さん ● 一國の辨才ある士 ● 同井叔皮の説に従つて訓ず、正解には「可ハ豈可也」とあり、其説によれば「言必ずしも用ふ可けんや」と訓ずる也

申子請仕其從兄官。昭侯不許也。申子有怨色。昭侯曰。非所謂學子之者乎。聽亡其道乎。又亡其行。子之術。面廢子之調乎。子嘗教寡人。循功勞。

申子、其の從兄を官に仕へしめんと請ふ。昭侯許さず。申子怨色あり。昭侯曰く、「所謂子に學べる者に非ざれば也。子の調を聽いて、子の道を廢てんか。又亡其子の術を行つて、子の調を廢てんか。子嘗て寡人に教ふ、功勞に循ひ次第を視よと。今此に求むる所あるも、我將た奚ぞ聽かんや」と。申子乃ち舍を避け罪を請うて曰く、「君は眞に其人也」と。

● 子の調を容るゝは子の數へに従ふ所以に非ざるを以て其調を許さざる也。正解には「所謂」を「所以」の誤とす、然か改めば更に義明かならん ● 亡其は無乃に同じ、察る也 ● 人を用ふるには功勞に循ひ次第順序を視極めよ ● 斯く教へながら今は又從兄の仕官を請はるゝも我いかで之を聽き容るべき「我將た奚(イヅレ)に聽かんか」と訓じ、一體どちらに従へばよきかと反問する語物と見るも可ならん ● 眞によく我道を實行せらるゝ、御方也

視次第。今有所求。此我將奚聽乎。申子乃避舍請罪曰。君眞其人也。

蘇秦爲趙合從。說韓王曰。韓北有鞏洛。成臯之固。西有宜陽常阪。之塞。東有宛穰。洧水。南有陘山。地方千里。帶甲數十萬。天下之強弓勁弩。皆自韓出。谿子少府時力距來。皆射六百步之外。韓卒足而射。百發不暇止。遠者達胸。近者掩

蘇秦、趙の爲めに合從し、韓王に説いて曰く、「韓は北に鞏洛・成臯の固め有り、西に宜陽・常阪の塞あり、東に宛・穰・洧水あり、南に陘山あり。地、方千里、帶甲數十萬あり。天下の強弓勁弩は、皆韓より出づ。谿子、少府の時力・距來は、皆六百歩の外を射る。韓卒跣足して射れば、百發止むるに暇あらず、遠きは胸に達し、近きは心を掩ふ。韓卒の劔戟は皆、冥山、棠谿、墨陽、合騰、鄧師、宛馮、龍淵、大阿より出づ。皆、陸には馬牛を斷ち、水には鵠鴈を撃ち、敵に當れば即ち堅きを斬る。甲盾、鞬鞞、鐵幕、革抉、吸芮、畢く具はらざる無し。韓卒の勇を以て、堅甲を被むり、勁弩を蹠み、利劔を帯びば、一人百に當る、言ふに足らじ。夫れ韓の勁と、大王の賢とを以て、乃ち西面して秦に事へて、東藩と稱し、帝宮を築き、冠帶を受け、春秋を祠り、臂を交へて服せんと欲す。夫れ社稷を羞かしめて天下の笑と爲る、此に過ぐる者なし。是の故に願はくは大王の之を

心。韓卒之劍。皆出於冥山棠谿。墨陽合。鄆。劍師宛。馮。龍淵。大阿。皆陸斷馬牛。水擊鵠。鳳。當敵。即斬。堅。甲。盾。鞬。釜。鐵。幕。革。抉。吶。芮。無不畢具。以韓卒之勇。被堅甲。蹙勁弩。帶利劍。一人當百。不足言也。夫以韓之勁。與大王之賢。乃欲四面事秦。稱東藩。築帝宮。受冠帶。

熟計せられんことを。大王、秦に事へば、秦必ず宜陽・成臯を求めん。今茲之を效さば、明年又益々地を割くを求めん。之に與へば、即ち地の以て之に給する無けん。與へずんば、則ち前功を棄て、後更に其禍を受けん。且つ夫れ大王の地は盡くる有りて、秦の求は已む無けん。夫れ盡くる有るの地を以てして、已む無きの求を逆ふ。此れ所謂怨を市つて禍を買ふ者也。戦はずして地已に削られん。臣聞く、鄆語に曰く、寧ろ雞口と爲るとも、牛後と爲る無かれと。今大王西面して、臂を交へて秦に臣事す。何を以てか牛後に異ならん。夫れ大王の賢を以て、強韓の兵を挾さみ、而して牛後の名あるは、臣竊かに大王の爲めに之を羞づ」と。韓王忿然として色を作し、臂を攘け劍を按じ、天を仰いで太息して曰く、「寡人死すと雖も、必ず秦に事ふる能はず。今主君、趙王の教を以て之に詔ぐ。敬んで社稷を奉じて以て從はん」と。

宛、穰は共に地名 軍卒 皆良弓の名。鄆は豐陽也。新築を以て弩を作る、因て鄆子の弩といふ少府は

詞春秋。交臂而服焉。夫産社稷。而爲天事笑。無過此者矣。是故願大王之熱計之也。大王事秦。秦必求宜陽成臯。今茲效之。明年又益求割地。與之即無地。以給之。不與。則棄前功。而後更受其禍。且夫大王之地有盡。而秦之求無已。夫以有盡之地。而逆無已之求。此所謂市怨而買禍者也。不戰而地已削矣。臣聞鄆語曰。寧爲雞口。無爲牛後。今大王西面交臂。而臣事秦。何以異於牛後乎。夫以大王之賢。挾強韓之兵。而有牛後之名。臣竊爲大王羞之。韓王忿然作色。攘臂按劍。仰天太息曰。寡人雖死。必不能事秦。今主君以趙王之教。詔之。敬奉社稷。以從。

弓を造る所にて其作の時力距來の二種の弩あり、時力は作る期節よくて其力の常に倍するをいひ、距來は弩勢動利にて來敵を距ぐに足るの謂也 足ぶみをして 疾く運設して絶えざるをいふ 選きは甲を透して胸に達し近きは心體迄も深く中る 冥山、棠谿、墨陽は良劍を産する地名、鄆師は鍛工の名、宛、龍淵も亦地名、大阿は劍の名、要するに良劍に關する地名人名劍名を列舉せる者と見て可なり 甲はよろひ、盾は大たて、鞬は革履、釜はかぶと、鐵幕は鐵の臂懸當てともいひ障面ともいふ、革抉は革の決(ユガケ)、吶は楯、芮は楯に繋ぐ紛設 秦王の巡幸に備ふる宮殿 衣冠凡て秦の制度に從ふ 秦の春秋の記をたすく 今年 前の骨折は皆むだにならん 已より之を致すの意 後は尻也、雞口は小なれども上にありて貴く、牛後は大なれども下にありて賤し、これ亦秦に事ふるの恥を喻ふる也 蘇秦をいふ對稱

宣惠王

宣王、樛留に謂つて曰く、「吾、公仲・公叔を兩用せんと欲す、其れ可ならん

宣王謂樛留曰。吾欲兩用

秦韓戰于濁澤。韓氏急。公仲朋謂韓王曰。與國不可恃。今秦之心欲伐楚。王不如下因張儀爲和於秦。路之以一名都。與之伐楚。此以一易二之計也。韓王曰。善。乃微公仲之行。將西講於秦。楚王聞之大恐。召陳軫而告之。陳軫曰。秦之欲伐我久矣。今又得韓之名都

秦韓、濁澤に戰ふ。韓氏急なり。公仲朋、韓王に謂つて曰く、「與國恃む可らず。今秦の心、楚を伐たんと欲す。王張儀に因て和を秦に爲し、之に賂ふに一名都を以てし、之と與に楚を伐たんに如かず。此れ一を以て二に易ふるの計也。」韓王曰く、「善し」と。乃ち公仲の行を傲しめ、將に西、秦に講せんとす。楚王之を聞いて大いに恐れ、陳軫を召して之を告ぐ。陳軫曰く、「秦の我を伐たんと欲するや久し。今又韓の名都一を得て、甲を具へ、秦韓、兵を并せて南に郷ふ。此れ秦の廟祠して求むる所以也。」今已に之を得たり。楚國必ず伐たれん。王、臣に聽かば、之が爲めに四境の内を傲しめ、師を選んで、韓を救ふと言ひ、戰車をしめて道路に満たしめ、信臣を發し、其車を多くし、其幣を重くして、王の己を救ふを信ぜしめよ。縦ひ韓爲し我に聽く能はずとも、韓必ず王を徳とし、必ず虜行を爲して以て來らじ。是れ秦韓和せず、兵楚に至ると雖も、國大いに病れじ。爲し能く我に聽き、和を秦に絶たば、秦必ず大いに怒り、以て厚く韓を怨みん。

一而具甲。秦韓并兵南鄉。此秦所以廟祠而求也。今已得之矣。楚國必伐矣。王聽臣。爲之傲四境之内。選師言救韓。令戰車滿道路。發信臣。多其車。重其幣。使信王之救己也。縱韓爲不能聽我。韓必爲王也。必不爲秦韓不和。兵雖至楚。國不大病矣。爲

韓、楚の救を得ば、必ず秦を輕んぜん。秦を輕んぜば、其の秦に應ずる必ずや敬まじ。是れ我、秦韓の兵を困しめて、楚國の患を免がる也」と。楚王大いに説び、乃ち四境の内を傲しめ、師を選んで、韓を救ふと言ひ、信臣を發し、其車を多くし、其幣を重くして、韓王に謂つて曰く、「敵邑小なりと雖も、已に悉く之を起せり。願はくは大國遂に意を秦に肆にせよ。敵邑將に楚を以て韓に殉ぜんとす」と。韓王大いに説び、乃ち公仲を止む。公仲曰く、「不可なり。夫れ實を以て我を困しむる者は秦也。虚名を以て我を救ふ者は楚也。楚の虚名を恃んで、輕く強秦の敵を絶たば、必ず天下の笑とならん。且つ楚韓は兄弟の國に非ず、又素より約して秦を伐つを謀るに非ず。秦、楚を伐たんと欲す。楚困て以て師を起し、韓を救ふと言ふ。此れ必ず陳軫の謀也。且つ王已に人をして秦に報ぜしむ。今行かすんば、是れ秦を欺く也。夫れ強秦の禍を輕んじて、楚の謀臣を信ぜば、王必ず之を悔いん」と。韓王聽かず。遂に和を秦に絶つ。秦果

能聽我。絕二和於秦。秦必大怒。以厚怨於韓。韓得二楚救。必輕秦。輕秦其應秦必不敬。是我困秦。韓之兵。而免楚國之患也。楚王大說。乃敵四境之內。選師言救韓。發信臣。多其車。重其幣。謂韓王曰。敝邑雖小。已悉起之矣。願大國遂肆意於秦。敝邑將以楚殉韓。韓王大說。乃止。公仲曰。不可。夫以實困我者。秦也。以虛名救我者。楚也。恃楚之虛名。輕絕強秦之敵。必為天下笑矣。且楚韓非兄弟之國也。又非秦約而謀伐秦矣。秦欲伐楚。楚因以起師言救韓。此必陳軫之謀也。且王已使人報於秦矣。今弗行。是欺秦也。夫輕強秦之禍。而信楚之謀。臣王必悔之矣。韓王弗聽。遂絕和於秦。秦果大怒。與師與韓氏戰於岸門。楚救不至。韓氏大敗。韓氏之兵。非削弱也。民非蒙愚也。兵為秦禽。智為楚笑。過聽於陳軫。失計於韓朋也。

顏率見公仲。

顏率、公仲に見ゆ。公仲見ず。顏率、公仲の調者に謂つて曰く、「公仲必ず率

して大いに怒り、師を興して、韓氏と岸門に戦ふ。楚の救至らず。韓氏大いに敗れぬ。韓氏の兵削弱なりしに非ず、民蒙愚なりしに非ず。兵、秦の禽と爲り、智、楚の笑と爲りしは、聽を陳軫に過り、計を韓朋に失したれば也。

● 秦を味方にする楚の地を取るとの二つ ● 行装を警用意せしめ ● 神に祈願を掛けて ● 軍隊の糧を運搬して之を出し ● 使臣をいふ ● 幣帛 ● 韓王に也 ● 若也 ● 顔行也、秦の前行(先導)を爲して ● 兵を ● 思ふ存分秦と戦はれよ ● 國を以ての意。殉ぜんは存亡を共にし死を以て従はんと也 ● 秦に行かんとするを止む ● 實地に兵を差向けて ● 智謀の足らざる事 ● 公仲也

公仲不見。顏率謂公仲之調者曰。公仲必以率爲陽也。故不見率也。公仲好士。公仲尚於財。率曰。散施。公仲無行。率曰。好義。自今以來。率且正言之。而巳矣。公仲之調者以告公仲。公仲遽起而見之。

を以て陽ると爲す、故に率を見ざるならん。公仲、内を好むを、率は曰く、士を好むと。公仲、財を尚むを、率は曰く、散施すと。公仲、行なきを、率は曰く、義を好むと。今より以來、率、且に之を正言せんとするのみ」と。公仲の調者以て公仲に告ぐ。公仲遽かに起つて之を見たり。

● 取次ぎの者 ● 伴也。うそをいふ ● 婦人 ● 財を散じて人に施す ● 素行修らざ ● 今迄人に對して斯くいひし故うそつきとして會はざるならん、されば今日以後正言して諱まざるべしと也

王

張儀爲秦連橫。說韓王曰。韓地險惡。山居。五穀所生。非麥而豆。民

張儀、秦の爲めに連横し、韓王に説いて曰く、「韓の地は險惡にして山居せり。五穀の生ずる所、麥に非ずんば豆なり。民の食する所は、大抵豆飯藿羹にして、一歳收めざれば、民、糟糠にだに厭かず。地は方九百里に満たず、二歳の

之所食。大抵豆飯菹羹。一歲不收。民不厭糟糠。地方不滿九百里。無二歲之所食。料大王之卒。悉之不遇三十萬。而圖徒負。在二其微。亭障塞。見卒不過二十萬而已。秦帶甲百餘萬。車千乘。騎萬匹。虎鷙之士。跽跼科頭。貫頤奮戟者。至不可勝計也。秦

食する所なし。大王の卒を料るに、之を悉すも三十萬に過ぎずして、而も厮徒負養其中に在り。爲し微亭障塞を守るものを除かば、見卒二十萬に過ぎざるのみ。秦は帶甲百餘萬、車千乘、騎萬匹、虎鷙の士、跽跼科頭、貫頤奮戟する者、勝けて計る可らざるに至る。秦馬の良、戎兵の衆、前を探り後を隄み、蹄閒三尋騰る者、勝けて數ふ可らず。山東の卒は、甲を被むり胄を冒むり以て會戰するに、秦人は甲を捐て徒程して以て敵に趨き、左に人頭を挈け、右に生虜を挾さむ。夫れ秦卒の山東の卒に與ける、猶ほ孟賁の怯夫に與けるがごとく、重力を以て相壓する、猶ほ烏獲の嬰兒に與けるがごとし。夫れ孟賁・烏獲の士を戰はしめて、以て服せざるの弱國を攻むる、以て千鈞の重きを墮して、烏卵の上に集むるに異なる無し。必ずや幸なからん。諸侯、兵の弱く食の寡きを料らずして、從人の甘言好辭を聽き、比周して以て相飾る。皆言つて曰く、「吾が計を聽かば、則ち以て、強、天下に霸たる可し」と。夫れ社稷の長利を顧みずして、須臾の説を聽く。

馬之良。戎兵之衆。探前跽後。蹄閒三尋騰者。不可勝數也。山東之卒。被甲冒胄。以會戰。秦人捐甲徒程。以趨敵。左挈人頭。右挾生虜。夫秦卒之與。山東之卒也。猶孟賁之與怯夫也。以重力相壓。猶烏獲之與嬰兒也。夫戰孟賁烏獲之士。以攻不服之弱國。無以異於

人主を註誤するもの、此に過ぐるはなし。大王、秦に事へずんば、秦、甲を下して宜陽に據り、韓の土地を斷絶せん。東、成臯・宜陽を取らるれば、則ち鴻臺の宮、桑林の苑は、王の有に非ざらんのみ。夫れ成臯を塞ぎ、土地を絶たるれば、則ち王の國分れん。先づ秦に事へば則ち安し。秦に事へずんば則ち危ふからん。夫れ禍を造して、禍を求めば、計淺くして怨深からん。秦に逆うて楚に順はじ、亡ぶる無からんと欲すと雖も、得可らじ。故に大王の爲めに計るに、秦に事ふるに如く莫し。秦の欲する所は、楚を弱むるに如く莫く、而して能く楚を弱めん者は、韓に如く莫し。韓の能く楚より強きを以てに非ず、其の地勢然れば也。今王、西面して秦に事へ、以て楚を攻めて、敵邑の爲めにせば、秦王必ず喜ばん。夫れ楚を攻めて其地を私し、禍を轉じて秦を説ばす。計此より便なる者無し。是の故に、秦王、使臣をして書を大王の御史に獻せしむ。須らく以て事を決すべし」と。韓王曰く、「客、幸にして之に教ふ。請ふ郡縣に比し、帝宮を築き、春秋を

祠り、東藩と稱し、宜陽を效さん」と。

- 豆の葉の汁 ● 收穫なき時は ● かすぬか ● 二年分の食料なし ● 屠徒は雜役に服する者、前に見ゆ。負養は道具などを預擔して公家に給養する者 ● 穢も亦塞也、國境のとりて ● 現在の卒 ● 勇猛の士 ● 素足にてかぶとも被らざる者 ● あとがひを賣かれながらもなほ戦を奮ひて戦ふ勇士 ● 戦士 ● 駿馬地に立ち、善く前を探り後を踏みて走らんと欲するをいふ ● 前後の踏間三尋、蹶躍して走るをいふ。以上秦の兵馬多くして勇健なるを言ふ ● 徒は空手、程は裸 ● いけどり ● 古の勇者 ● 亦古の勇士 ● 機倅にも免るゝ事なからん ● 合従論者 ● 相黨して、ぐるになつて ● 長久の利益 ● 目前一時の ● あやまる ● 上流の地 ● 韓の宮と苑との名 ● 韓を以て秦の郡縣に比し。帝宮以下の事は屢々前に出づ

墮二千鈞之重。集中於鳥卵之上。上必無幸矣。諸侯不料兵之弱。食之寡。而聽從人之甘言好辭。比周以相飾也。皆言曰。聽吾計。則可以強霸天下。夫不顧社稷之長利。而聽須臾之說。註誤人主者。無過於此者上矣。大王不事秦。秦下甲據宜陽。斷絕韓之上地。東取成臯。宜陽。則鴻臺之宮。桑林之苑。非王之有已。夫塞成臯。絕上地。則王之國分矣。先事秦則安矣。不事秦則危矣。夫造禍而求福。計淺而怨深。逆秦而順楚。雖欲無亡。不可得也。故爲大王計。莫如事秦。秦之所欲。莫如弱楚。而能弱楚者。莫如韓。非以韓能強於楚也。其地勢然也。今王西面事秦。以攻楚爲敵邑。秦王必喜。夫攻楚而私其地。轉禍而說秦。計無便於此者上也。是故秦王使使臣獻書大王。御史須以決事。韓王曰。客幸而效之。請比郡縣。築帝宮。祠春秋。稱東藩。效宜陽。

鄭疆之走張儀於秦。曰。儀之使者必之楚矣。故謂太宰曰。公留儀之使者。疆請西圖儀於秦。故因西請秦王曰。張儀使人致上庸之地。故使使臣再拜謁秦王。秦王怒。張儀走。

鄭疆の、張儀を秦より走らすや、曰く、儀の使者必ず楚に之かんと。故に太宰に謂つて曰く、「公、儀の使者を留めよ。疆請ふ、西、儀を秦に圖らん」と。故に因て、西、秦王に請うて曰く、「張儀、人をして上庸の地を致さしむ。故に使臣をして再拜して秦王に謁けしむ」と。秦王怒り、張儀走る。

- 謂へらく ● 楚の官 ● 或は謂の誤とし、或は告ぐの義とす ● もと楚の地に於て秦の取れし地、それを張儀の計らひにて又楚に致せりと也 ● 自らいふ也、疆謂つて楚の使となり、此を秦王にいふ也 ● 坊本に此二字なし、正解には「大王」の説かといふ ● 秦王其事制を怒り、張儀誅を畏れて走る

宜陽之役。楊達謂公孫顯曰。請爲公以五萬攻西周。得之。是以九鼎印甘茂也。不然。秦攻西

宜陽の役、楊達、公孫顯に謂つて曰く、「請ふ公の爲めに、五萬を以て西周を攻めて之を得ん。是れ九鼎を以て甘茂を抑ふる也。然らずんば、秦、西周を攻めて、天下之を惡み、其の韓を救ふ必ず疾からん。則ち茂の事敗れん」と。

- 秦の甘茂が韓の宜陽を圍みし時 ● 二人共に秦人。事既に秦策に見ゆ ● 原文「印」、秦策に従つて「印」に改め譯す

周。天下惡之。其救韓必疾。則茂事敗矣。

秦圍宜陽。游騰謂公仲曰。公何不與趙。蘭離石祁。以質許也。則樓緩必敗矣。收韓趙之兵。以臨魏。樓廓必敗矣。韓趙爲一。韓必倍秦。甘茂必敗矣。以成陽資翟強於齊。楚必敗之。須秦必敗。秦失魏。宜陽必不拔矣。

秦、宜陽を圍む。游騰、公仲に謂つて曰く、「公何ぞ趙に蘭離・石祁を與へ、質を以て地を許さざる。則ち樓緩必ず敗れん。韓・趙の兵を收めて魏に臨まば、樓廓必ず敗れん。韓・趙一とならば、魏必ず秦に倍かん、甘茂必ず敗れん。成陽を以て翟強を齊に資けば、楚必ず敗れん。則ち秦、魏を失はば、秦は必ず敗れ、宜陽必ず抜けじ」と。

● 趙の地にて韓の取りたるもの。今之を歸すと也 ● 趙の人力を取りて ● 樓廓の趙を以て秦に合せんと欲する事 ● 樓廓魏のために秦を合せんとする事 ● 甘茂宜陽を攻むるの事 ● 魏のために齊を合して楚を外にせんとする者 ● 正解に、原文「須」は「則」の誤、且つ「秦失魏則秦必敗」の錯誤といふ

韓公仲謂向壽曰。禽困覆車。公破韓。辱

韓の公仲、向壽に謂つて曰く、「禽も困しめば車を覆へす。公、韓を破つて公仲を辱しめ、公仲、國を收めて復た秦に事ふ。自ら以爲らく必ず以て封ぜらる

公仲。公仲收國復事秦。自以爲必可。以封。今公與楚解。中封。小令尹。以桂陽。秦楚合。復攻韓。韓必亡。公仲射率其私徒。以關於秦。願公之熱計之也。向壽曰。吾合秦楚。非以當韓也。子爲我諷之。公仲曰。秦韓之交。可合也。對曰。願有復於公。諺曰。貴其所貴。以貴者上貴。今

可しと。今公、楚に解中を與へ、小令尹を封するに桂陽を以てし、秦・楚合して復た韓を攻めんとす。韓必ず亡びん。公仲射ら其の私徒を率ゐて、以て秦と關はん。願はくは公の之を熱計せられんを。」向壽曰く、「吾が秦・楚を合するは、以て韓に當るに非ず。子、我が爲めに之を公仲に諷けて曰へ、秦・韓の交合す可しと。」對へて曰く、「願はくは公に復す有らん。諺に曰く、『其の貴ぶ所以の者を貴べば貴し』と。今王の公を愛習するや、公孫郝に如かず、其の公を智能とするや、甘茂に如かず。今二人の者皆事を親するを得ずして、公獨り王と與に斷を國に主るものは、彼以て之を失ふ有ればなり。公孫郝は韓に黨し、而して甘茂は魏に黨す。故に王信ぜざる也。今ま秦・楚、強を争うて、公、楚に黨せば、是れ公孫郝・甘茂と道を同じうする也。公何を以てか之に異ならん。人皆楚の變多きを言ふ。而るに公之れを必ず。是れ自ら貴しとする也。公、王と其變を謀り、韓に善くして以て之に備へんに如かず。此の若くせば則ち禍なけん。韓氏先に

王之愛習公也。不如公孫郝。其智不能也。不如甘茂。今二人者。皆不得親於事矣。而公獨與王主斷於國者。彼有以失之也。公孫郝黨於韓。而甘茂黨於魏。故王不信也。今秦楚爭強。而公黨於楚。是與公孫郝甘茂同道也。公何以異之。人皆言楚之多變也。而公必

國を以て公孫郝に従ひ、而して後、國を甘茂に委せり。是れ韓は公の讐也。今公、韓に善くして以て楚に備ふるを言ふ、是れ外舉に讐を避けざる也。」向壽曰く、「吾甚だ韓の合せんを欲す。」對へて曰く、「甘茂、公仲に許すに武遂を以てし、宜陽の民を反せり。今公徒らに之を收めんとす。甚だ難し。」向子曰く、「然らば則ち奈何せん。武遂は終に得可らざらんのみ。」對へて曰く、「公何ぞ秦を以て韓の爲めに潁川を楚に求めざる。此れ乃ち韓の寄地也。公求めて之を得ば、是れ令、楚に行はれ、而して其地を以て韓に徳する也。公求めて得ずんば、是れ韓楚の怨解けずして、交々秦に走らん。秦楚強を争ひ、而して公、楚を過めて以て韓を收む、是れ秦に利あらん。」向子曰く、「奈何。」對へて曰く、「此れ善事也。甘茂は魏を以て齊を取らんと欲し、公孫郝は韓を以て齊を取らんと欲す。今公、宜陽を取つて以て功と爲し、楚・韓を收めて以て之を安んじ、而して齊・魏の罪を誅めば、是れ公孫郝・甘茂、事なからん」と。

之。是自爲貴也。公不如下與王謀其變也。善韓以備之。若此則無禍矣。韓氏先以國從公孫郝。而後委國於甘茂。是韓公之難也。今公言善韓以備楚。是外舉不避讐也。向壽曰。吾甚欲韓合。對曰。甘茂許公仲。以武遂一反宜陽之民。今公徒收之。甚難。向子曰。然則奈何。武遂終不可得已。對曰。公何不三以秦爲韓。求潁川於楚。此乃韓之寄地也。公求而得之。是令行於楚。而以其地德韓也。公求而弗得。是韓楚之怨不解。而交走秦也。秦楚爭強。而公過楚以攻韓。此利於秦。向子曰。奈何。對曰。此善事也。甘茂欲以魏取齊。公孫郝欲以韓取齊。今公取宜陽以爲功。收楚韓以安之。而誅齊魏之罪。是公孫郝甘茂無事也。

● 向壽秦の爲めに宜陽を守り、將に韓を伐たんとす、公仲謀をして韓に讐はしむる也 ● 高歡 ● 桂陽と共
に秦の地名 ● 楚の官名 ● 家業、手勢 ● 今一應甲上げたき事あり。復は重ねて曰ふ意 ● 人皆の一種
に貴ぶ所を貴べば自然其身も貴はれるやうになる ● 秦王 ● 王の ● 親しく國事に關與するを得ずして
● 裁斷 ● 次の如き缺點ある故也 ● 約に背く事なからんを信ず ● 世間の人心に反し己れ一人上が
りするもの故人は公を貴べし ● いつ楚が約を變じて困らぬやうに謀りて ● 楚に ● 外より舉用す
るに適材ならば體をも避けざる大量を示すもの也 ● 秦が韓より取りし地名、これを返すを約する也 ● 反
は其地のみを取りて其民を反すをいふと。正解には「及」の訛といへり ● 武遂は已に甘茂が韓に返す事を約し
たりといへば、他に韓に許すべき地なし ● もと韓の地にて楚に讐はれたる地の意 ● 原文「攻」史記によ
つて「收」に改む ● 秦の利たるのみならず、秦の爲めにも都合よき事也 ● 何等國に爲す所あらざるべし

客卿爲韓謂

客卿、韓の爲めに秦王に謂つて曰く、「韓珉の議、其君を知りて、異君を知らず、

爲大臣不致爲諸侯一輕也。國矣。齊韓嘗因公孫郝而不受。則諸侯不致因羣臣以爲能矣。外內不相爲。則諸侯之情僞。可二得而知一也。王之明二也。公孫郝擣里疾請無攻韓陳四辟去。王猶攻之也。甘茂約楚趙而反敬魏。是其講我。茂且攻宜陽。王猶校之也。羣臣之智。無幾於王之明者。臣故願公仲之以國待於王。而無自左也。

内は羣臣 陳也、蓋し宜陽の役の事なり 原文「四」は「而」の訛 魏は楚趙と仲懸し、故に反つてといふ 是れ魏を以て秦に請ぜんとする也 檢校觀察する意 公仲が韓の國を以て直ちに王の御命令を待ち左右近侍の臣に倚頼する事なきやうにあらしめたしと也

或謂公仲曰。必聽實也。故先王聽諺言於市。願公之聽臣言也。公求中立於秦。而弗能得也。善公孫郝以難甘茂。勸齊

或ひと公仲に謂つて曰く、「聽くととは國に聽くなり。必ずしも實を聽くのみならず。故に先王は諺言を市に聽けり。願はくは公の臣の言を聽かんことを。公中立を秦に求めて得る能はず、公孫郝を善くして以て甘茂を難る。齊を勸めて以て魏を止む。楚・趙は皆公の驪なり。臣、國の此を以て患を爲さんを恐る。願はくは公の復た中立を秦に求めんことを。」公仲曰く、「奈何せん。」對へて曰く、「秦王、公孫郝を以て公に黨せりと爲して、之に聽かず、甘茂は公に善からずして、

兵以勸止魏。楚趙皆公之驪也。臣恐國之以此爲患也。願公之復求中立於秦也。公仲曰。奈何。對曰。秦王以公孫郝爲黨於公。而弗善於公。而弗爲公言。公何不因行願。以與秦王語。行願之爲秦王臣也。公。臣請爲公謂秦王曰。齊魏合與離。於秦執利。

公の爲めに言はず。公何ぞ行願に因て以て秦王と語らざる。行願の秦王の臣たるや公なり。臣請ふ公の爲めに秦王に謂つて曰はん、「齊・魏の合すると離るとは、秦に於て孰れか利なる。齊・魏の別ると合するとは、秦に於て孰れか強なる」と。秦王必ず曰はん、「齊・魏離れば則ち秦重く、合せば則ち秦輕からん。齊・魏別れば則ち秦強く、合せば則ち秦弱からん」と。臣即ち曰はん、「今王、公孫郝に聽き、韓・秦の兵を以て、齊に應じて魏を攻めば、魏敢て戦はず、地を歸して齊に合せん。是れ秦輕からん。臣、公孫郝を以て不忠と爲す也。今王、甘茂に聽き、韓・秦の兵を以て、魏に據つて齊を攻めば、齊敢て戦はず、亦地を割いて魏に合するを求めん。是れ秦輕からん。臣、甘茂を以て不忠と爲す。故に王、韓をして中立して以て齊を攻めしめ、王、魏を救ふと言つて以て之を勁くせんに如かず。齊・魏、相聽く能はず、必ず離れて兵交はらん。王欲せば、則ち公孫郝を齊に信し、韓の爲めに南陽を取り、穀川に易へて以て歸せ。此れ惠王の願也。王欲せば、則

齊魏別與合。於秦執強。秦王必曰。齊魏離則秦重。合則秦輕。齊魏別則秦強。合則秦弱。臣即曰。今王聽公孫郝。以韓秦之兵。應齊而攻魏。魏不戰。魏歸地而合。於齊。是秦輕也。臣以公孫郝爲不忠。今王聽甘茂。以韓秦之兵。據魏而攻齊。齊不戰。魏亦求割地而合。於魏。是秦輕也。臣以甘茂爲不忠。故王不如下令韓中立以攻齊。王言救魏以勁之。齊魏不能相聽。必離兵交。王欲則信公孫郝於齊。爲韓取南陽。易穀川以歸。此惠王之願也。王欲則信甘茂於魏。以韓秦之兵。據魏以郟齊。此武王之

ち甘茂を魏に信し、韓・秦の兵を以て、魏に據つて以て齊を郟けよ。此れ武王の願也。臣以爲らく、韓をして中立して以て齊を攻めしむる、最も秦の大急也。公孫郝は齊に黨すれば肯て言はず、甘茂は薄ければ敢て調けじ。此の二人は王の大患也。願はくは王の之を熟計せんことを」と。

● 汎く衆に聽くをいふ ● 實ある至言 ● 市井賤俗の言を聽く。即ち國に聽くの謂也 ● 韓の中立を。中立は横せず縦せず、他に倚らずして單獨に行へ也 ● 正解に「兵字及ビ勸止ノ勸字悉ラクハ衍、言フハ、中立ヲ求メテ得ズ、因テ郝ハ韓ヲ以テ齊ヲ取ラント欲スルヲ以テ、郝ニ善クシテ以テ齊ノ乘ニ合フヲ勸メ、茂ハ魏ヲ以テ齊ヲ取ラント欲スルヲ以テ、茂ヲ離リテ以テ魏ノ秦ニ合フヲ止ム、是レ韓ハ齊秦ニ合ヒテ魏ヲ外ニスル也、故ニ楚趙其横ヲ窮リテ仲ヲ歸トスル也」と。姑く之に従つて訓ず ● 人の姓名 ● 公平にして秦王之に信ず、故に事必ず成るべしと也 ● 齊より取りたる地を齊に歸して ● かくの如くせんと欲せば ● 使也。「信せしめ」と訓ずるも亦通ずべきか ● 惠王武王共に秦の先代の王也 ● 最大急務 ● 公仲と交隣きが故に韓のために秦王にいはず。或は王(秦王)と親しみ薄き故に告ぐるに眞實を以てせずとも解すべからん

願也。臣以爲令韓中立以攻齊。最秦之大急也。公孫郝黨於齊而不肯言。甘茂薄而不戰。此二人。王之患也。願王之熟計之也。

公仲數、諸侯に信あらず。諸侯之を錮す。南國を楚に委ねんとして、楚王聽かず。蘇代爲めに楚王に謂つて曰く、「聽いて其反に備へんに若かず。朋の反するや、常に韓に仗つて楚に畔き、齊に仗つて秦に畔く。今四國之を錮して、入る所なく、亦甚だ之を患ふ。此れ方に其の尾生たるの時也」と。

● 其言を善いて通ぜず、其説を行はざる也。交通の路を塞ぐと解するも亦通ぜん ● 韓國を楚の命のまゝにせんと謂ふ ● 其反覆の用心をする ● 公仲の名 ● 公仲も ● 莊子に見ゆ。女との約束を守りて梁下に溺れ死したる人。公仲も今は信有りて前日反覆の如くなりざれば、楚以て之を受くべしと也

公仲數不信。於諸侯。諸侯錮之。南委國於楚。楚王弗聽。蘇代爲謂。楚王曰。不若聽。而備於其反也。朋之反也。常仗韓而畔楚。仗齊而畔秦。今四國錮之。而無所入矣。亦甚患之。此方其爲尾生之時也。

公叔に謂つて曰く、「公、武遂を秦に得んと欲して、楚の能く河外を揚ぐるを患へず。公人をして楚王を恐して、人をして公の爲めに武遂を秦に求めしめん